

広島女学院大学大学院
言語文化研究科英米言語文化
博士後期課程
博士学位論文

ベケットの不在の文学
—散ッタモノタチの陰影

博士後期課程3年
沖田泰弘
(学生番号 988202)

目次

序	1
I. 『不在の書』、解体	
1. 第1章の解体	7
2. 第2章の解体	20
3. 第3章の解体	30
4. 第4章の解体	33
5. 第5章の解体	42
6. 第6章の解体	49
7. 第7章の解体	68
8. 第8章の解体	73
9. 第9章の解体	83
10. 第10章の解体	96
11. 第11章の解体	102
12. 第12章の解体	110
13. 第13章の解体	123
14. 『不在の書』のまとめ	131
II. 『仲間』、解体	136
1. 創りだされる仲間たち	136
2. 仲間たちの仲間度	145
3. 『仲間』のまとめ	160
III. 『見ちがい言いちがい』、解体	162
1. 3つの視線	163
① 闇を見透かすイイカゲンナ視線 ..	163
② 老女の遠い視線	165
③ 監視するモノの視線	172
2. 仲間の関係	173
3. ログスの死	181
4. 『見ちがい言いちがい』のまとめ ..	194
IV. 『さらにまちがうために』、解体 ..	195
1. メとコトバのたどる道	195

2. 場としての空 ^{くう}	200
3. 仲間1・2・3	201
① 仲間1 — 老女の背中	201
② 仲間2 — 老人と子供	203
③ 仲間3 — アタマとメ	204
4. 『さらにまちがうために』のまとめ	205
V. 結論 — 新しい如 ^{によ} ・陰影	207
引証文献	213
参考文献	216
1. 作品	216
2. 伝記・評論	218
3. その他	219
索引	223

序

Je suis legion.¹

ワタシはおおぜい。

新約聖書のなかで、マタイもマルコもルカも、悪霊にとりつかれたオトコ（マタイではふたり、マルコとルカではひとり）の話を伝えている²。カレは、墓場を住まいとしていた。ヒトビトはこのオトコを鎖でつなぎ監視していたが、カレはそれを引きちぎり、悪霊によって荒野へと駆りたてられていた。イエスがこの地方へきたとき、オトコはイエスのまえにでてわめいた。イエスが名をたずねると、オトコは「レギオン」と答えた。レギオンは、古代ローマの軍団のことである。オトコのいいたかったことは、自分はひとりではなく「多」であるということであった。悪霊たちは、イエスが自分たちを底なしの淵に行かせるのをおそれ、辺りの山にいるブタのなかに入らせてくれるように願った。イエスがそれを許すと、カレらはブタのなかに入り、ブタの群れは崖をくだって湖になだれこみ、おぼれ死んだ。その悪霊たちがどうなったか、聖書には書かれていない。イエスと出会う前のオトコを悪とし、出会った後のオトコを善として二分することで、このオトコの物語は二元論を象徴するものといえる。

フランスの哲学者リオタール（Jean-François Lyotard, 1924- ）は、ポストモダンに「メタ物語に対する不信」（l'incrédulité à l'égard des méta-récits）³と定義している。メタ物語は「おおきな物語」（la grand récit）⁴ともいわれているが、リオタールによれば、それは知の正当化とニンゲンの解放

¹ *Mille Plateaux*, Minuit. p.293.

² 『マタイによる福音書』6:28-34.『マルコによる福音書』5:1-10.『ルカによる福音書』8:26-39.

³ *La Condition Postmoderne*, Minuit. p.7.

⁴ *ibid.*, p.63.

という物語である。彼は、このような物語にたいする不信の時代は、ヨーロッパの再建が終わった少なくとも 1950 年代の終わりごろからはじまったとしている。フローベルはすでに 19 世紀半ばに、確かな輪郭や構図におさまりきれない時代を察知している。既成の輪郭や構図を規定していたのは、さまざまな二元論であった。この二元論の不条理が問題にされたのが、ポストモダンの時代といえる。これは、これから扱おうとするサミュエル・ベケット (Samuel Beckett, 1906-1989) の通過した時代である。ベケットがポストモダンという枠をうけいれていたかどうかはわからないが、新しい時代の流れを意識していたことは確かである。たとえば、絵画の世界で、マティス (Matisse) やタル・コート (Tal Coat) が革新的な画家であることは認めているが、彼らが可能なものの分野から一步も出ていないことを指摘している⁵。一方、オランダ出身のヴァン・ヴェルデ (Bram van Velde, 1895-1981) を、表現するものと表現されるものとの正当化された関係が不在であることを受け入れた最初の芸術家であると認めている⁶。1949 年に雑誌の編集長デュテュイ (Duthuit) と交わした対話のなかで、ベケットはヴァン・ヴェルデの絵の印象を伝えようとしながら、コトバに窮している。ベケットの生涯の課題であるコトバとのたたかいが、すでにはじまっているのである。

Ce qui suit ne sera qu'une défiguration verbale, voire un assassiant verbal, d'émotions qui, je le sais bien, ne regardent que moi.... chaque fois qu'on veut faire faire aux mots un véritable travail de transbordement, chaque fois qu'on veut leur faire exprimer autre chose que des mots, ils s'alignent de façon à s'annuler mutuellement. C'est, sans doute, ce qui donne à la vie tout son charme.⁷

⁵ *Proust and Three Dialogues with George Duthuit*, John Calder. p.102

⁶ *ibid.*, p.125.

⁷ *Disjecta*, John Calder. pp.124-5.

(大意) ワタシの感動を、コトバはゆがめ、圧殺する。コトバに仕事をさせようとするたびに、コトバはおたがいに打ち消しあうように並ぶ。

これこそ、おそらく人生にすべての呪縛をあたえるものだ。

ヴァン・ヴェルデが従来の表現法では表現しきれないものを表現しようとたたかったように、ベケットの文学は、コトバを使いながら、コトバとたたかうという矛盾のなかで進められていった。それは、限定するコトバと限定されるモノとの二元性を克服するたたかいであった。ヴァン・ヴェルデの表現主義は、フォームを単純化して抽象へと向かう。抽象表現主義は、後継者によるネオ・ダダ、ポップ・アートを経て、1960年代後半にアメリカでミニマル・アート(minimal art)として現われる。これは、「芸術上の自己表現を最小限度に抑制するもので、作品の色彩、形態、構成を極端に単純化し、基本的要素にまで還元してしまう」⁸ 芸術である。ベケットは個人のなかで、おなじ経過をたどることになる。小説三部作のすぐあとにそのテーマを引き継いで書かれた中篇ひとつと、後期三部作の中篇三つを取り上げて解体しながら、その経過をたどっていくこととする。この解体という作業は単に分析のことで、脱構築を意味しない。ベケットの作品には、直観による俳句的なイメージが現われては消えていく。しかし、コトバで創りだされるイメージがすぐコトバで否定されていくため、イメージとイメージがつながらないもどかしさがある。それでも、ひとつひとつのイメージを明確に捉え続けることから始めるしかない。彼の散文はモノローグ的で一種のツブヤキといってもいいが、どこで区切って読むかいろいろな解釈ができる。筆者は、イメージが捉えやすいようにテキストを詩のように並べかえてみた。四つの中編を解体しながら、ベケットのコトバとのたたかいがどこに行き着いたか、読者はイメージとイメージをどう関連させていくことができるか、この2点を明らかにしていくことをこの論文の目標とする。

⁸ 『日本大百科事典』22. 小学館. p. 414

ここで、あのオトコの話にもういちどもどろう。イエスがこのオトコを解放したのは、悪霊の支配からであり、悪霊たちからではない。オトコが記憶を保持する存在であるかぎり、散った悪霊たちとの関係のなかで生きつづけたはずである。悪霊たちは、「散ッタワタシタチ」となり、カレは不在のカレらとの新しい関係のなかに置かれたのである。イエスはヒトの多様性をよく知っていた。イエス自身も、群れをつくっていた。その群れのなかには、漁師も収税人も裏切り者までもそろっていた。神さえも群れであった。ヒトを創造するとき、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り」⁹と書かれている。ヒトが意識的存在である限り多様な存在であることはまぬがれないが、資本主義という時代にあってその自己分裂はますます深まっている。自己は分裂して散ッタモノとなり、複雑な内的風景を呈している。最初に掲げた「ワタシはおおぜい」というコトバを繰り返したのは、現代を分裂症の時代として捉えたフランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) と精神医学者フェリクッス・ガタリ (Félix Guattari, 1930-1992) である。彼らの多様性の理論は、筆者のベケット理解を助けてくれた。また、すべての矛盾するものをつつむ根底の場をしめす西田幾多郎も、筆者の目を開いてくれた。ベケットの思考がこの哲人たちの思考と同じ方向に向いていたことも明らかにしていきたい。

ベケットの世界は、ドゥルーズとガタリのいう樹木状のモデルを脱したリゾーム (rhizome, 根茎) の状態にある。そこには、はじめも終わりもない。さまざまなウゴメキの跡があるだけである。リゾームの特徴は、『千の高原』 (*Mille Plateaux*¹⁰) で、次のように列挙されている。(1.2 と 5.6 をまとめたのは、著者たちである。)

1.2. 「結合と異質性の原理」 (“Principe de connection et d'hétérogénéité”) (13-4)。一点を秩序のなかで固定する樹木や根とち

⁹ 『創世記』 1:27 (口語訳)

¹⁰ *Mille Plateaux*, Minuit, 1972

がって、リゾームの一点はほかのどの一点とでも結合できる。たとえば言語を取りあげてみると、普遍的な言語というものがあるわけではなく、方言、隠語、俗語、特殊な言語の集まりがあるだけである。それらが、機械的なく組ミ込ミ> (agencement) のなかで機能している。

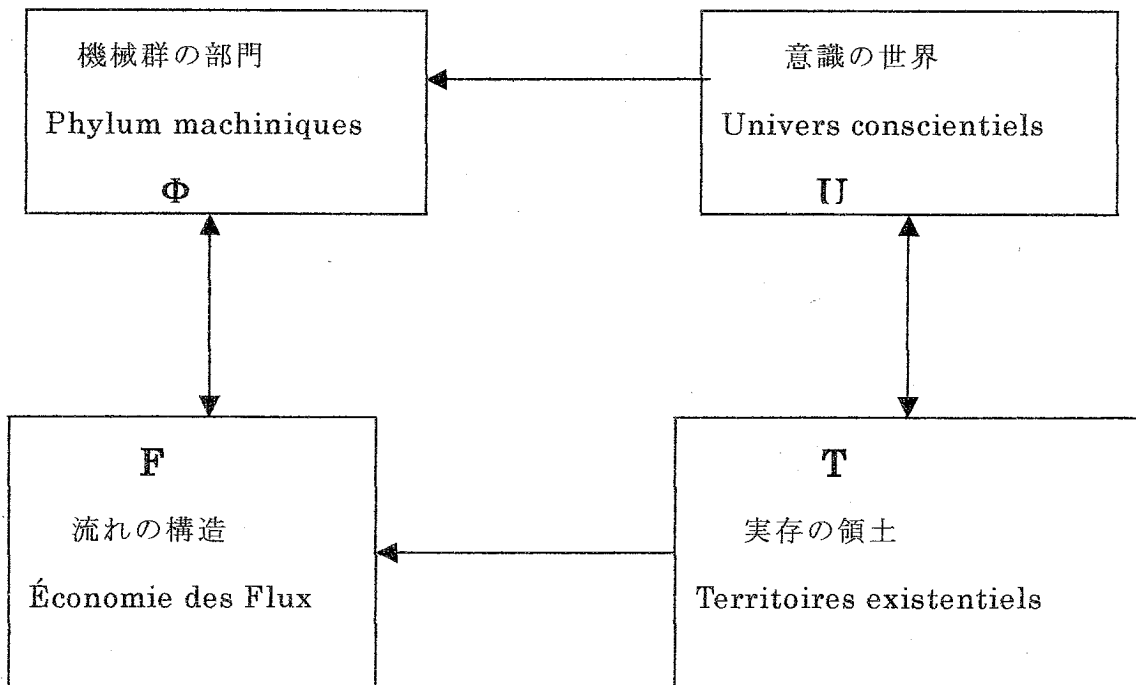
3. 「多様性の原理」(“Principe de multiplicité”) (14-6)。固定された点ではなく、線だけが存在する。多様性は統一性をもたないが、そのあらゆる次元を満たしておおいつくすとき、<共存平面> (plan de consistance) をつくる。この面は、多様性の<外部> (le dehors) で、抽象線、脱出線、脱領土の線によって決定される。樹木は血統であるが、リゾームは同盟である。

4. 「意味作用をもたない切断の原理」(“Principe de rupture asignifiante”) (16-9)。たとえば、アリや雑草はリゾームをつくっている。つぶしてもつぶしても再生してくる。リゾームは、切断線によって層化され、領土化され、組織され、意味化されても、脱領土化の線と脱出線をいつももっている。意味づけの領土化を脱して、リゾームは遊牧をつづける。音楽もリゾームである。リゾームは、始まることも行きつくこともない。いつも中間、<間奏曲> (intermezzo) である。樹木は動詞「...である」(être) を押しつけるが、リゾームは接続詞「と...と...と...」(et...et...et...) を生地としてもっている。

- 5.6. 「地図制作と複写の原理」(“Principe de cartographie et décalcomanie”) (19-24)。筆記、素描、写真はモデルに依存する複写である。精神分析は無意識の複写や写真をつくり、言語学は言語の複写や写真をとるだけである。中心的秩序の複写に対し、非中心化された多様体のリゾームは地図をつくりだすことによって、無意識そのものを生産する。地図は開かれたもので、多数の入口や出口をもっている。たとえば、長い記憶は樹木状で中心化されているが、短い記憶はリゾーム状

で不連続性と切断と多様性をもっている。ひとは短い記憶、つまり短い観念でものを書く。

リゾームは多様体であり、多様体は群れである。機械も機械群として、さまざまな組ミコミによって機能している。「ワタシはおおぜい」も、〈主体群〉(groupe-sujet)¹¹を示している。この論文は、ベケットの作品に登場するモノタチ（ヒトだけでなくカラダも自然もモノもふくめて）を主体群とその散ラバリとして捉え、ひとつの地図を頼りに散ッタモノタチの跡をたどることからはじまるが、その地図は、1989 年のガタリの「分裂分析的地図作成法」(*Cartographes Schizoanalytiques*) に基づくものである。このなかで、地図作成の基本図として、次の四つの実体があげられている。この実体群の機能と相互関係については、本論で深めていくこととする。



¹¹ *Cartographes Schizoanalytiques*, Galilee. p.11

I. 『不在の書』、解体

ベケットは 1949 年、小説三部作最後の長編『名づけきれないもの』(*L'Innommable*) の執筆をはじめている。1953 年に完成し、さらに 1956 年には英訳 *The Unnamable* を終えている。この作品のなかでは、コトバの呪縛との激しいたたかいがつづいている。それは、コエとのたたかいでもあった。おなじたたかいが、1950 年から 52 年にかけてフランス語で書かれた *Textes pour Rien*¹、16 年後のベケット自身による英訳 *Texts for Nothing*² にも続いている。こちらは中編で、13 の章に分かれていて検討しやすいので、この作品の解体から取り掛かることとする。日本語では、片山昇によって『反古草子』³ として訳されているが、わたしはこれを『不在の書』と訳したい。そのわけは、各章の解体のなかで明らかにしていくこととする。

1. 第 1 章の解体

Quelqu'un dit,

= Someone said.

Vous ne pouvez pas rester là.(115)

You can't stay here.(100)

ダレカがいった

オマエタチはココにとどまることはできない⁴。

はじめから、ダレカのコエがでてくる。コエの問題は、この作品を解明して

¹ *Novelles et Textes pour Rien*, Minuit. 1958

² *The Complete Short Stories 1829-1989*, Grove Press. 1995

³ 『ベケット短編集』, 白水社, 1972

⁴ テキストの配列を、序で触れたように、詩のように並べかえてみた。また、参考のため、テキストの引用は、フランス語と英語を並列し、私訳の日本語をつけ加えておく。引用文の () 内の数字は、引用 1. 2 の原書のページ数である。以下同様。

いくうえでたいへん重要な要素となるので、ガタリの分析した三つのコエを取りあげておく。

1. les voix de *pouvoir*, circonscrivant et circonvenant, de l'extérieur, les ensembles humains, sois par coercition directe et emprise panoptique, sur les corps, soit par saisie imaginaire des âmes;

「権力」のコエで、外部からヒトの集団を限定し丸めこむ。

2. les voix de *savoir*, s'articulant de l'intérieur de la subjectivité aux pragmatique technico-scientifiques et économiques;

「知」のコエで、主体性の内部から構成される。

3. les voix de *l'autoréférence*, développant une subjectivité processuelle autofondatrice de ses propres coordonnées, autoconsistanoielle (que j'avais rapporté, naguère a la catégorie de «groupe-sujet»), ce qui ne l'emêpche pas de s'instaurer transversalement aux stratifications sociale et mentales.

「自己準拠」のコエで、自己共存的である。⁵

ワタシタチに「ココにいるわけにはいかない」と命令しているコエは、明らかに「権力のコエ」である。このコエは、「土地」(la Terre)を権力基盤の準拠対象としてもっているからである⁶。だから、ココから脱出することを求めているのではなく、ワタシタチが脱出してきた土地に定着することを求めているのである。コエは、いろんなかたちで繰り返される。ほかのダレカ (un autre, another) のコエがする。

Un autre dit,

= Another said,

ou le même,

or the same,

⁵ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.11

ou le premier,	or the first,
ils ont tous la même voix,	they all have the same voice,
tous les même idées,	the same ideas,
vous n'aviez	All you had to do was
qu'à rester chez vous. (116)	stay at home. (101)

別のヤツがいった

あるいはおなじヤツ

あるいは最初のヤツ

ヤツラはみんなおなじコエ

ミンナおなじ考え

キミタチは家にいさえすればよかったのに。

おなじコエで、おなじことをくりかえしている。なじみになったこのコエがち
かづいてくると、その気配を感じるまでになってしまった。このコエが話しか
けてくるワタシタチとはダレのことだろうか。

tout mon petit monde (120)	= all my little company (103)
----------------------------	-------------------------------

ワタシの小さな仲間たち

ワタシがワタシひとりではないという状況で、この作品ははじまっている。

Ah oui,	= Ah yes,
nous sommes plus d'un on dirait,	we seem to be more than one,
tous sourds,	all deaf,
même pas,	not even,
unis pour la vie. (116)	gathered together for life. (100-1)

ああそうか

ひとりじゃないらしい

ミミをかさないヤツら

⁶ *ibid.*, p.14

いやもっとひどい

それでも生涯いっしょとは。

ワタシ(Je, I)は、単独に存在しているのではなく、ワタシたち(nous, we)として存在している。ワタシたちのなかには、ほかにダレがいるのか。

メとミミがいる。

Œil patient et fixe,	= Eye ravening patient
à fleur de cette tête	in the haggard vulture face
hagarde de charognard,	...
œil fidèle	I'm up there
...	and I'm down here,
Je suis là -haut	under my gaze,
et je suis ici,	founded,
tel que je me vois,	eyes closed,
vautré,	ear cupped
les yeux fermés,	against the sucking peat (102)
l'oreille en ventouse	
contre la tourbe qui suce (119)	

じつと獲物をねらうメ

どうもうなハゲタカのカオに

忠実なメ

...

ワタシは上にいる

そしてワタシは下にいる

ワタシ自身に見つめられ

ころがって

メをとじて

水をすう泥炭に

ミミをそばだて

メは、二種類ある。ワタシを見る単数の視線と、ワタシのカオにある複数のとじたメと。前者は一望監視的支配をねらう権力のコエと同じ働きをするメであるが、やはりワタシ自身のメとされている。これはフロイトの審級的な自我－超自我系⁷のなかで理解するなら、見下ろすワタシの視線は超自我であり、見下ろされメをとじているワタシは「抑圧されたものの隠れ家」(*refuge du refoulé*)⁸に身をひそめていることになる。ガタリは、このような局所的な「隠れ家」のなかに無意識を押し込めることを避けている⁹。無意識はひろく **U** と **T** の領域にあるとし、他者性の線と潜在的可能性とまったく新しいいままでもなかったような生成の総体の世界としている。自我と超自我という二元性の袋小路にはまりこむのではなく、西田流に言えば、意識が意識される意識と意識する意識に分裂するのは統一された意識への過程であると考えたほうがよい。ワタシタチの分裂は、やがて群れというかたちに生成するのだから。

カラダ (*le corps, the body*) がいる。肢体がバラバラになっている状況で、これは器官としてのカラダである。

Je dis au corps,

Ouste, debout,

et je sens l'effort qu'il fait,

pour obéir,

comme une vieille carne,

tombée dans la rue,

qu'il ne fait plus,

qu'il fait uncore,

= I say to the body,

Up with you now,

and I can feel it struggling,

like an old hack,

founded in the street,

struggling no more,

struggling again,

till it gives up. (100)

⁷ *ibid.*, p.44

⁸ *ibid.*, p.44

⁹ *ibid.*, p.44

avant de renoncer. (116)

ワタシはカラダにいう

さあ立て

するとカラダが努力しているのが感じられる

従おうと

通りに倒れたオイボレ馬のように

もう動こうとせず

もういちど動こうとし

そしてあきらめてしまう。

ワタシがカラダに対し「さあ立て」と命令しているのは、三つのコエのうち第2の「知のコエ」である。ここで、器官としてのカラダとは別の「器官ノナイカラダ」(‘Corps sans Organes’)について触れておきたい。このカラダは、はじめからあるもので、肢体や器官を必要としない。すべての流れや強度がその上につくりだされる。この概念は、ドゥルーズとガタリにとって重要なもので、6ページの基本図のUとTの中間に置かれている。器官ノナイカラダは、器官を必要としないが、器官と対立するものではない。ただ、器官といっしょに<有機体>(organisme)をつくるように仕向けられることには耐えられない。命令されることは、苦痛なのである。だがワタシは、カラダに命令するような立場にはないのである。器官ノナイカラダは、みずからを<自動生産>(auto-production)するものであり、みずからの上に<分割登記のエネルギー>(énergie d’inscription disjonctive, ‘Numenn’¹⁰ともいわれる)が分配されることによって、いろんなものが生じていく。ワタシもカラダも器官もワタシにかかわるすべては、この器官ノナイカラダの上に生じたものである。生じたものは、分割登記されたものとして、分離していく。分離したものはリゾームをなすものとして、交換可能なのである。

¹⁰ L’Anti-Œdipe, Minuit, 1972. p.21

j'ai été mon père

= I was my father

et j'ai été mon fils (121)

and I was my son (103)

ワタシはワタシのチチであり

ワタシはワタシのムスコであった

毎晩チチのひざでお話をきいた思い出のなかで、ワタシとチチは交換可能なものとなっている。ふたりは、テをつないで散歩することもあった。交換可能なもののあいだをつないでいるのは、テである。テは、〈接合部〉(synapse)の役目をはたしている。

メもミミもそれぞれバラバラに散ったアタマ(la tete, the head) がいる。アシがいる。

un jour que je sortais,

= the day my feet dragged me out

a la traîne de mes pieds

that must go their ways,

faits pour aller,

that I let go their ways

pour faire des pas,

and drag me here (102)

que j'ai laissés aller,

qui m'ont triane ici (118-9)

ある日ワタシは出かけた

進むアシにひきずられ

道を行くアシ

ワタシはアシが行くにまかせ

アシはワタシをココにひきずってきた

6 ページの基本図で、ガタリは、 $\Phi \leftarrow U$ の関係を〈命題的言説性〉(discursivité propositionnelle), $F \leftarrow T$ の関係を〈エネルギー的言説性〉(discursivité énergétique) と捉えている。この言説性や〈言説〉(discurs) とはどういうことだろうか。ガタリにとって、それは言語にかかわることだけでなく、〈行程〉(un parcours) であり、〈さすらい〉(l'errance) であった。そして、図の左

半分が言説の領域であり、右半分が非言説の領域である。だからアシは、地図の左の領域をさすらう遊牧機械なのである。

解体を深めるために、ここで、基本図のなかでおこるふたつの変化を見ておきたい。〈線條化〉(striage) と〈平滑化〉(lissage) である。

1. toute hétérogénéité développée au sein d'un même registre entitaire est un *striage*;

同一の実体の内部で展開するあらゆる異質性が〈線條化〉である。

2. toute transformation inter-entitaire de voisinage entre deux registres est un *lissage*;

隣りあうふたつの実体間のあらゆる変化が〈平滑化〉である。¹¹

たとえば、思い出というものを考えてみると、実存の領土 **T** と流れの構造 **F** の間でおきる〈感覚の平滑化あるいは下部配置〉(le lissage sensible ou sub-position) では、実体の〈冗長性〉(redondances) は〈「ブラウン運動的」分散〉(la dispersion « brownienne »)、つまり〈カオス的スープ〉(des arrangements de la soupe chaotique)¹² の状態にある。実体は、〈ふるいの記憶〉(la mémoire de ces cribles)¹³ によって解きほぐされていく。いまはもう痛まないワタシのリウマチ (mes rhumatismes, my rheumatism) は、もう痛みを忘れてしまったというかたちで、思い出される。おなじ痛みをもっていたハハも、思い出される。いつのまにかなくなってしまったが、いまでも愛着のあるボウシ (mon chapeau, my hat) も、そうである。これらの思い出が、**F** に向かう途中で、ユニットにまとめられていく。これらは、平地の思い出である。ところが、思い出の場は平地ばかりではない。

Tantôt c'est la mer

= Sometimes it's the sea,

tantôt la montagne,

other times the mountains,

¹¹ *ibid.*, pp.103-4

¹² *ibid.*, p.152

¹³ *ibid.*, p.152

souvent ca a été la forêt,
 la ville,
 la plaine aussi,
 j'ai tâté de la plaine aussi
 (120)

often it was the forest,
 the city,
 the plain too,
 I've flirted with the plain too
 (103)

ウミのこともあり
 ヤマのこともあり
 モリのこともよくあった
 マチのことも
 ヘイヤのことも
 ヘイヤはすきなところであった

F の領域では、それぞれの場の思い出が線条化されていく。それが機械群の部門 **Φ** に向かう途中、機械状の平滑化が行われる。これは具象機械の領域であるが、**Φ** にはいると抽象機械の領域となる。

ワタシはどこでも、〈死ンダモノとして〉(pour mort、for dead) 扱われるままであった。なにで死んだというのか。

de faim,	= of hunger,
de vieillesse,	of old age,
tué,	murdered,
noyé,	drowned,
...	...
d'ennui,	of tedium,
...	...
de ma belle mort (121)	natural death (103)
飢えて	
老いて	

殺されて

おぼれて

...

たいくつして

...

自然死

ここでは、感覚的な流れの線条化が、記号的な流れの平滑化へと進んでいる。
感覚的領域を脱して、可能的潜在的領域、抽象機械の領域にはいっていく。

ワタシの居場所を、もういちど確認してみると、丘の頂上で、ふかくえぐられた土のなか。

Je suis dans l'excavation (117) = I am down in the hole (101)

ワタシはアナのなかにいる

excavation という英語もあるが、hole のほうがむさくるしさを感じさせる。
それに、^{xx} I am [/] down ^x in ^x the [/] hole というツブヤキやすいリズムをつくるためにも、hole のほうが適している。ヒトが見下ろすときは、

comme au cimetière (117) = as in a graveyard (101)

まるで墓場

共同墓地を表す cemetery という英語もあり、リズムをつくるうえではそのほうがよいが、廃棄場を連想させる graveyard のほうが陰鬱さを感じさせる。そこがワタシのイマの場となっている。その気になれば見晴らしはきくのだが、キリ (le brouillar, the mist) がさえぎっている。

Ma demeure. = My dwelling place.

Sans le brouillard, But for the mist,

...

...

je la verrais d'ici. (116) I could see it from here. (101)

ワタシのすまい。

キリがなければ

...

ココから見えるのだが

ワタシはココで、いったいナニをしているのか。

Et ce que je fais,

= And what I'm doing,

capital,

all important,

je souffle,

breathing in and out

en me disant,

and saying,

avec des mots

with words

comme faits de fumée (119)

like smoke (102)

ワタシがやっていることは

いちばんかんじんなことは

ワタシはあえいでいる

ひとりごとをいいながら

煙のような

コトバで

イマのワタシに、ひとりごとをつぶやく以外にすることがあるのだろうか。

ガタリはヴィトキヴィッチ (Witkiewicz) の演劇「プラグマティスト」(Les pragmatistes)を解説しながら、オシャベリについて次のように書いている。

Degré zéro de l'expression, ce flux intarissable de paroles, ce bavardage intérieur ininterrompu ... l'auteur le qualifiera d'accord indispensable à la symphonie que constitue son existence. « La manière la plus authentique de sentir la vie n'est-telle pas la parole? Il n'y a que- à dire n'importe quoi. En réalité, rien que le fait de parler ... Dans les mots, la richesse des possibilités est beaucoup plus grande que dans

les événements. »¹⁴

(大意) ゼロ度の表現、つきることのないコトバの流れ、とだえることのない内なるオシャベリは、自分の存在を形成するシンフォニーに欠かせないもの。生きていると感じるいちばんまちがいのない方法は、話スコトではないだろうか。なんでもいいから話す、その無意味なコトバには、出来事よりもずっとおおきな可能性があるのである。

いま確認されているワタシタチ仲間は、どういう関係にあるのだろうか。

Nous sommes d'accord,	= we're of one mind,
tous d'accord,	all of one mind,
au fond,	deep down,
depuis toujours,	we're fond of one another,
nous nous aimons bien,	we're sorry for one another,
nous nous plaigmons bien,	but there it is,
mais voilà,	there's nothing we can
nous ne pouvons rien. (119)	do for one another. (102)

ワタシタチはおなじ思い

ミンナおなじ思い

こころの底で

いつも

ワタシタチはおたがいに愛しあっている

おたがいにあわれみあっている

でもけっきょく

おたがいになにもできない。

ワタシタチ仲間のあいだで、なにかこれ以上の関係が望めるのであろうか。ワタシはそれぞれに、tu (オマエ)で話しかけるが、仲間がワタシに応答すること

¹⁴ *Cartographies Schizoanalytiques*, pp.304-5

はない。ワタシのヒトリゴトが、いつか〈ポリフォニー〉(poly-phonie)になることがあるのだろうか。

Je suis loin (119)

= I am far (102)

ワタシは遠くにいる

このようにオシャベリをしているワタシとは別のワタシが、どこか遠くに散っている。まだ主体群の全体は確認できていない。未確認のワタシとココにいるワタシの間をへだてているのは、キリである。キリの問題は、作品のタイトルにかかわる重要な問題である。旧約聖書の『伝道の書』¹⁵は、「^ś空の空、空の空、いっさいは空である」という伝道者の言葉ではじまる。この〈^ś空〉と訳されているヘブル語の原形は、^{hebel} (hebel)で、“breath, vapour, mist, vanity, something vain”を意味している。ワタシたちと外の世界の間に幕をおろしているキリ、散ッタモノたちの間をへだてているのは、空である。また、^{hebel} はアダムの子アベル (Abel) の名となっている¹⁶。彼は兄のカイン (Cain) に殺され、空なる存在・不在者となったが、死んだモノ・殺されたモノとして扱われてきたワタシは、まさに空なる存在・不在者としてのアベルを、抽象空間のなかにワタシとしてもっている。第2章以降も、空なる存在・空なる世界が展開される。空なる存在は、非在ではなく、不在である。こういったことも、この作品を『不在の書』と訳したい理由である。

キリは、いつはれるのか。タイシャクシギ (les courlis, the curlews) が、ヨルの到来をつげている。

Le brouillard se dissipera (120)

= Yes, it will be night,

the mist will clear (102)

ヨルがきて

キリははれるだろう

¹⁵ 口語訳『旧約聖書』, p. 921

¹⁶ 『創世記』 4 : 2

ヨル、キリがはれても、まわりの世界や、ふるさとが見えてくるわけではない。
ナニか、見えてくるものがあるのか。

La nuit venue	= and the whole night sky
et sur la montagne	open over the mountain,
ce sera tout le ciel nocturne,	with its lights,
avec ses luminaires,	including the Bears,
pour me servir de guide	once again
dont les chariots	to guide me
encore une fois,	on my way,
de guide à mes pas	let's wait for night. (102)
attendons la nuit. (120)	

夜空いちめん
ヤマの上にはヒカリがあり
そのなかに大熊・小熊座
ワタシをみちびくことだろう
もういちど
ワタシの道を
ミンナでヨルを待とう。

穴の閉じられた場からかいま見えてくるのは、ヨルの星ゾラ。星の散ラバリは、基本図の U の領域で行われる〈世界の散ラバリの線条化〉(striage de constellations d'Univers)に通じている。

2. 第2章の解体

de fois qu'on serait	= perhaps we're in a head (105)
dans une tête (125)	

ミンナひとつのアタマのなかかもしれない

第1章では、ワタシの居場所は丘の上の穴のなかであったが、この章では象牙の地下牢 (oubliette d'ivoire、ivory dungeon) で、下の世界として、上の世界と対比されている。しかしまた、アタマのなかの世界としてまとめられてもいる。ココでワタシは、上の世界を思い出すのであるが、その記憶は、基本図の $F-T$ の領域の切れぎれな記憶ではなく、 $\Phi-U$ の領域の連続的な記憶へと移っている。

Φ . est constituée de chaînes machine-mémoires habitées par des plus-values potentielles. Plus-value signifie que la concaténation des Phylum est susceptible de produire quelque chose de plus qu'une simple addition des composantes mises en œuvre. Sur les Flux F . de pure discursivité (Flux- coupure de Flux) se greffent des intégrales de mémoires [$\Phi.U.$]. Non seulement mémoires de potentialité actuelle (Φ .) mais aussi mémoires de potentialité virtuelle (U .) (=le point de vue de tous les énonciateurs potentiels).¹⁷

(大意) Φ は、潜在的な剰余価値の宿る記憶機械の連鎖からなる。剰余価値というのは、さまざまな部門の連結が、利用される構成要素の単なる累積以上のなにかを生産できるということ。純粹な言説性の流れ F (流れと流れの切断) の上に、記憶の積分 [ΦU] が組み込まれる。現実的な潜在性の記憶 (Φ) だけでなく、仮想の潜在性の記憶 (U) (=あらゆる潜在的な発話者の視点) も付け加えられる。

上のほうには、アカリとキセツがあった。そこには現実の記憶に、仮想の記憶が付加されていく。それが実在として、直観される。

¹⁷ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.96

Chercher,	= Seek,
à la lumière de la nuit,	by the excessive light of night,
excessive,	a demand commensurate
un besoin à la hauteur de l'offre,	with the offer,
et se terrer,	and go to ground
bredouille,	empty-handed
au petit jour,	at the old crack
au nouveau jour. (124)	of day. (105)

ヨルの過度のアカリで

テにはいるものだけ

さがし

そしてカラテで

ネグラにもどる

あたらしいいちにちの

夜明けに。

この夜明けまえの思い出をきっかけに、潜在的な三つの記憶が連続的に生産される。

1. 夏の夜明けの記憶

Revoir madam Calvet,	= See Mother Calvet again,
écrémant les ordures,	creaming off the garbage
avant le passage des boueurs.	before the nightmen come.
...	...
Elle doit y être encore.	She must still be there.
Avec son chien	With her dog
et son landau squelettique. (124)	and her skeletal babybuggy.
	(105)

カルヴェおばさんとの再会

ゴミをあさっている

清掃夫がくるまえに。

...

まだあそこにいるにちがいない。

イヌをつれ

ガイコツのような乳母車をおして。

2. 夏の日曜日の記憶

un dimanche d'été.

= a summer Sunday.

Monsieur Joly est dans le beffroi,

Mr. Joly is in the belfry,

il a remonté l'horloge

he has wound up the clock,

maintenant il sonne les cloches,

now he is ringing the bells.

...

...

Il n'avait qu'une jambe et demie.(126)

He had only one leg and a
half. (107)

夏の日曜日

ジョリイおじさんは鐘楼にいる

時計のねじをまきおわり

鐘をならすところ

...

おじさんにはいっぽん半しかアシがなかった。

3. 冬の最後の思い出

un dernier souvenir,

= one more memory

...

...

Piers, poussant ses bœufs

Piers pricking his oxen

parmi la plaine,

o'er the plain,

...

au ciel et dit,
Fini le beau temps.
Et voilà,
en effet,
peu après,
la neige.

...

Le chemin étroit long
qui menait à l'abri (127)
もうひとつ最後の思い出

...

ピアズはヘイヤで牛をおいながら

...

ソラをみあげていう
いい天気もこれでおしまい。
すると
そのとおり
まもなく
ユキ。

...

山小屋へもどるミチは
とおかった

...

he raised his eyes
to the sky and said,
Bright again too early.
And sure enough,
soon after,
the snow.

...

The way was long
that led back to the den (107)

この三つの思い出は、現実的だけでなく仮想の潜在的な記憶がどんなに付加されても、原素材の感覚は保持されている。キセツやゴミや鐘の音やユキなども、それぞれ個別化されている。ドゥルーズとガタリは、それを「コレ性」と

呼んでいる。

Il y a un mode d'individuation très différent de celui d'une personne, d'un sujet, d'une chose ou d'une substance. Nous lui reselvons le nom d'*hecceité*. Une saison, une hiver, un été, une heure, une date one une individualité parfaite et qui ne manque de rien... Dans les types de civilization, l'Orient a beaucoup plus d'individuations par hecceité que par subjectivité et substantialité ainsi le haï-ku se doit de comporter des indicateurs comme autant de lignes flottantes constituent un individu complexe.¹⁸

(大意) ヒト、主体、モノあるいは実体の個体化とはまったくちがったかたちの個体化がある。ワタシたちはこれに「コレ性」という名を用意したい。あるキセツ、ある冬、ある夏、ある時間、ある日にちは、なにも欠けることのない完全な個体化をもっている... いろんな型の文明のなかで、特に東洋は、主体性や実体性による個体化よりもコレ性による個体化をずっと多くもっている。たとえば俳句は、複雑な個体を構成するゆれ動く線として多くの指標を備えていなければならない。

キセツやゴミや鐘の音やユキが、ひとつひとつ「生きた働きとして」¹⁹ 直観される俳句的なイメージとなっている。このような東洋的なイメージの創造と、コトバとのたたかいはどう結びつくのだろうか。コトバに邪魔されずイメージそのものがイメージからイメージへと作用するように、ワタシのオシャベリは

18 *Mille Plateaux*, p.318-9

19 「美の意識」、『西田幾多郎全集』第3巻、岩波書店、1965、p.262。「色とか音とかいふものが、考へられた色や音ではなくして、その一々が生きた働きとして、一つの作用から直に他の作用に移り行くのが直観である。是故に直観は意識成立の根源と考へられ、その内容は我々に対して与へられたものと考へられるのである。知覚や表象が美的感情の基礎として考へられるのは、此の如き直観の意義に於てでなければならぬ。」

コトバを空ッポにするためのものになってしまう。

Voilà les vieux mots lâchés encore. = there are old words out again.

Parler,	Utter,
Il n'y a que ça,	there's nothing else,
parler,	utter,
s'en vider,	void yourself of them,
ici comme toujours.	here as always,
que ça. (125)	nothing else. (106)

またもや古いコトバがもれてくる。

しゃべること

それしかない

コトバを空ッポにすること

ココにはいつものことながら

それだけ。

ここで、流れの平滑化の速度について見ておく必要がある。準拠の流れが連続するとき、〈決定可能性の無限の速度〉 (*vitesses de déterminabilité finies*) が存在する。これは、 $d+\infty$ と表記される²⁰。一方、準拠の関係の決定可能性が限りなく遅い場合がある。これは、 $d-\infty$ と表記される。このとき、オシャベリはとまってしまう。

Et maintenant ici,	= And now here,
quel maintenant ici,	what now here,
une énorme seconde,	one enormous second,
comme au paradis,	as in Paradise,
et l'esprit lent,	and the mind slow
lent,	slow,

²⁰ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.156

presque arrêté.

nearly stopped.

...

...

Les mots aussi,

The words too,

lents,

slow,

lents,

slow,

le sujet meurt

the subject dies

avant d'atteindre le verbe,

before it goes to the verb,

les mots s'arretent aussi.

words are stopping too.

Mieux donc que

Better off then

du temps de la faconde?

than when life was babbles?

C'est ça, c'est ça,

That's it, that's it,

le bon cote. (125)

the bright side. (106)

そしてイマ、ココ

どんなイマ、ココ

とてつもない一秒

天国の時間のように

そしてアタマもゆっくり

ゆっくり

ほとんど停止。

...

コトバもまた

ゆっくり

ゆっくり

主語は動詞にたどりつかないうちにシんでしまう

コトバも停止。

オシャベリのころよりはまし。

そう、そうなのだ、いい方向にむいている。

発話行為を構成している準拠の速度 $d+\infty$ と $d-\infty$ は、基本図の $F-T$ では重なりあっていて、 $d+\infty$ だけの〈溶解〉(dissolution) と $d-\infty$ だけの〈石化〉(putrification) を避ける〈ジグザグ運動〉(slalom) が行われている²¹。しかし、 $\Phi-U$ 間で、可能性の領域に入ると、新しい〈信号の流れ〉(les Flux signalétiques) が生まれ²²、〈減速〉 $d-\infty$ は〈局面空間〉(les espaces de phases) ϕ と〈発話行為的流域〉(les bassins énonciatifs) ΣU によって規制される²³。新しい信号の流れから、〈表現-内容関係〈偶然的な表現 E_c 、局面の内容 $C\phi$ 〉〉(rapport Expression – Contenu 《Expression contingente E_c , Contenu de phase $C\phi$ 》²⁴ の問題が生じる。偶然性 FT の領域と潜在性 ΦU の領域が、共通の領域 $E_c C\phi$ においてつながっている。ひとつの局面 ϕ が停止することがあっても、準拠的な発話行為が再構成されるたびに、つぎつぎと新しい局面 ϕ が折りたたまれていく。流れは延長的な記憶に基づいているが、いまでは〈表現の亀裂片的な切断〉(la rupture fractale expressive) が流れを分断し、 $d+\infty$ と $d-\infty$ の線を取り外している²⁵。こうして表現は、〈言語活動の原動力〉(des ressorts pragmatiques) を生みだし、さらに〈実存的变化〉(des mutations existentielles) を引き起こす²⁶。発話行為と実存は、〈同じ表現装置〉(les mêmes dispositifs d'Expression) に属しているのである。だから、コトバが途切れるということは、実存にかかわる重大な出来事である。

Mais ils tarissent.

= But they are failing,

c'est vrai,

true,

ça change tout,

that's the change,

ils viennent mal,

they are changing,

²¹ *ibid.*, p.157

²² *ibid.*, p.165

²³ *ibid.*, p.166

²⁴ *ibid.*, p.169

²⁵ *ibid.*, p.176

²⁶ *ibid.*, p.177

mauvais,

that's bad,

mauvais. (125)

bad. (106)

しかしコトバがひからびてくる

まったく

コトバがうまくでてこない

こまった

こまった。

コトバを空ッポにしようとしながらコトバが停止すると、実存の〈破局〉
(catastrophes) が問題となってくる。

この章で、もうふたつ注目しなければならないイメージがある。ひとつは、
上での生活のなかでワタシのとっていた他者の視線からの逃げの姿勢である。

On s'en cachait pourtant,

= It is true you hid from them,

on rasait leurs murs,

hugged their walls,

c'est vrai,

true,

ça manque ici,

you miss that here,

les derivatifs manquent,

you miss the derivatives,

ici c'est le mal (125)

here it's pure ache (106)

実際オマエはヤツラからかくれていた

ヤツラの壁にへばりついて

まったく

それがココでは欠けている

あの気晴らしが欠けている

ココではそれが苦痛だ

おなじように壁にへばりついて視線をさける人物が、1963年のベケットのシナ

26 *ibid.*, p.177

リオ *Film*²⁷ にでてくる。この作品のテーマは、「存在スルトイウコトハ知覚サレルコトデアル」(*Esse est percipi*) という哲学者バークレイ (Berkley) の言葉によって明示されている。ヒトやドウブツやカミによって外から知覚されることをどんなにのがれても、自分自身によって内から知覚されることはのがれることができない。登場人物は、対象 (Object) とメ (Eye) [下線筆者] に分裂していて、OとしてE (この場合はカメラ) の追跡をのがれるため、壁にへばりつくようにして移動する。Eが、実は自分による自分の知覚であることに気づいていなくて、他者の視線と思っている。この章でも、「オマエ」は上のほうで他者の視線をのがれようとしていた。しかし同時に、それを楽しんでもいたのである。それは、ともかく自分に存在感を与えてくれる〈気晴らし〉でもあった。

もうひとつのイメージは、ココの状況である。丘の上の穴であり、墓地のようなところであり、象牙の地下牢であり、アタマのなかの世界であることは見てきたが、つぎのようにも描かれている。

Ici c'est une autre cloche, = Here you are under a different glass,
vite inhabitable elle aussi, not long habitable either,
il va falloir la quitter. (123) it's time to leave it. (104)

ココは別の鐘のかたちをしたガラスのいれもの

すぐ住めなくなる

はなれなければならない。

ココは鐘のようにとざされた世界であり、またガラスという視線にさらされる材質でできている。この下の世界では、〈見ラレルコト〉は、もはや〈気晴らし〉ではなく、むしろ〈苦痛〉となっている。見ルモノが「他者」ではなく、ワタシ自身あるいはワタシの名をかたるヤツであることがわかってきたからである。

²⁷ *The Complete Dramatic Works*, faber and faber. pp.323-4

3. 第3章の解体

ce n'est que de voix	= it's only voices,
que des mensonges (130)	only lies (109)
ただのコエ	
ただのウソ	

過去の思い出は、未来の思い出へとかわっていく。つまり、つくられたハナシとなるのである。

je vais parler de l'avenir,	= I'll speak now of the future,
je vais parler au futur,	I'll speak in the future,
...	...
Vite vite,	Quick quick
avant de pleurer.	before I weep.
J'aurait un ami,	I'll have a crony,
de ma promotion,	my own vintage,
un pays,	my own bog,
un vieux conscrit,	fellow warrior,
nous revivrons nos campagnes,	we'll relieve our campaigns
en comparant nos éraflures.	and compare our scratches.
...	...
tout ça ce sont des souvenirs (133-5)	that's all memories (111-2)
将来のことをしゃべろう	
未来形でしゃべろう	
...	
はやくはやく	

ナミダがながれないうちに。

ナカヨシをひとりもつだろう

同期

同郷

同年兵

ふたりは野戦を回想するだろう

傷をくらべあいながら。

...

そんなことはみんな思い出

ハナシづくりがもうひとつ。

je vais être un homme,

= I'll be a man,

il le faut,

there's nothing else for it,

une sorte d'homme,

a kind of man,

de vieil enfant,

a kind of old tot,

j'aurai une goudenante,

I'll have a nanny,

elle m'animera bien,

I'll be her sweet pet,

...

...

elle aura toute la responsabilité, she'll have all the responsibility,

elle s'appellera Nanny,

her name will be Bibby,

je l'appellerai Nanny (131)

I'll call her Bibby (110)

ワタシはひとりのオトコになろうとしている

それがひつよう

一種のオトコ

老いたコドモ

ネエヤがいるだろう

ワタシをかわいがってくれるだろう

...

すっかりめんどろをみてるだろう

ネエヤはビビイ

ビビイとよぼう

未来形で書かれているが、ジェイムズ・ナルスン (James Knowlson) のベケットの伝記 *Damned to Fame*²⁸ によれば、実際にベケット兄弟が Bibby とよんでいたネエヤがいたことがわかる (35)。過去の記憶が未来形で書かれるということは、老いたコドモに「ナル」ということと深いかわりがあるだろう。ここでも、ドゥルーズとガタリの『千の高原』が理解をたすけてくれる。

...la majorité, dans la mesure où elle est analytiquement comprise dans l'étalon abstrait, ce n'est jamais personne, c'est toujours. Personne ... tandis que la minorité, c'est le devenir de tout le monde, son devenir potentiel pour autant qu'il devie du modèle. (133-4)

多数派は、抽象的なハカリにふくまれた尺度なのだから、ダレでもなくいつも「無人」である。少数派は、ミンナの生成であり、モデルからはずれているかぎり、潜在的な生成である。

オトコは権威としての多数派であり、老人やコドモ、ここでは老いたコドモは、少数派として、そういうものに「なっていく」のである。過去の記憶が未来形で生かされることは、この生成にかかわっている。ワタシは、生成してくるすべての仲間たちをうけいれるが、ミンナのモデルとなるような支配的なオオモノの存在をゆるさない。コエやコトバも、「ただのコエ、ただのウソ」として、オオキナカオをさせないのである。この姿勢は、ベケットの作品を理解するための重要なカギであることがこれからの解体で明らかになっていくはずである。

²⁸ *Damned to Fame - The Life of Samuel Beckett*, Simon & Schuster, 1996

4. 第4章の解体

Qu'irais-je,	= Where would I go,
si je pouvais aller.	if I could go,
que serais-je,	who would I be,
si je pouvais être,	if I could be,
que dirais-je,	what would I say,
si j'avais une voix,	if I had a voice,
qui parle ainsi	who says this,
se disant moi? (139)	saying it's me ? (114)
ワタシはドコへ行こう	
行けるものなら	
ワタシはナニになろう	
なれるものなら	
ワタシはナニをいおう	
ワタシにコエがあるものなら	
こんなことをいってるのはだれだ	
ワタシだと名のって。	

ダニエル・カッツ (Daniel Katz) は、上の一節についてのアラン・バデュ (Alain Badiou) の興味深い意見を紹介している。

“Au fameux « Que puis-je connaître? Que dois-je faire? Que puis-je espérer? » de Kant, répond, dans les *Textes pour rien*, le triplet ...Badiou's isolation of the textual vortices represented by these categories in Beckett is

fruitful, but one should know that ... unlike Kant's questions, Beckett's are all imposed in the *conditional* — the answers given are necessarily hypothetical, as the litany of “ifs” already tells us that, in fact, I *can't* go, I *can't* be, and I have *no* voice.²⁹

(大意)『不在の書』の三つの問いは、「ワタシはナニを知ることができるか。ナニをしなければならないか。ナニを望むことができるか」というカントの有名な問いに対応していることを、バデュは指摘している。しかし、注意しなければならないのは、カントの問いとちがって、ベケットの問いはすべて「条件文」のなかに置かれているということ — 与えられた答えは必ず仮定であるということ、で、「もし」の繰り返し、が、事実上「ワタシは行ケナイ、ナレナイ、コエをモテナイ」ということを告げている。

しかし、事実を直説言説で断定しないで、条件法で婉曲的に表現することこそ、ベケットが探求している表現法のひとつなのである。1941年に書きはじめられた『ワット』(*Watt*)のなかで、主人公は〈無〉(*nothing*)を経験するが、無を表現するために〈仮説〉(*hypothesis*)を発展させる工夫をしている³⁰。無を「コレ性」として経験し、それを表現する方法の探究は、三部作を経て、この『不在の書』でも続いている。

ココにも、ワタシの名をかたるヤツがいる。

C'est le même inconnu que toujours, = It's the same old strange
le seul pour qui j'existe, as ever,
au creux de mon inexistence, for whom alone accusative I exist,

²⁹ *Saying I No More*, Northwestern University Press. p.145. さらに、203 ページの注には、バデュの論が追加されている。 '... after 1960, Beckett's works adds a fourth question: "Qui suit-je, si l'autre existe?" '(1960 年以降、ベケットは第 4 の問いを加える。「ワタシはダレだろう、もし別のヤツがいるとしたら。」)

³⁰ *Watt*, Grove Press. p.78

de la sienne,
de la notre (139)

in the pit of my inexistence,
of his,
of ours (114)

いつもとおなじ見知らぬヤツ

アイツひとりのためにワタシは存在している

ワタシの空の存在の空洞のなかに

アイツの空の存在の空洞のなかに

ワタシたちの空の存在の空洞のなかに

2行目はフランス語から訳したものだが、英語では、「アイツに対してだけワタシは対格として存在している」あるいは「ワタシだけがアイツに対し対格として存在している」あるいは「アイツに対したただ対格としてワタシは存在している」ともとれる。あいまいではあるが、ワタシは自己準拠をもたない、アイツ準拠の文法上の格の存在でしかないということははっきりしている。アイツは、第1章でおなじみのアイツ。「権力のコエ」をもったアイツだけは、オオキナカオをしようというのか。

Il me cherche
pour me tuer (140)

= The truth is he's looking for me
to kill me (114)

ワタシを消すため

アイツはワタシをさがしてる

アイツはアベルを殺したカインの立場にいる。しかし、それだけではない。

il me veut là,
avec une forme et un monde,
comme lui,
malgré lui,
moi qui suis tout,
comme lui qui n'est rien. (140)

= he wants me there,
with a form and a world,
like him,
in spite of him,
me that am everything,
like him who is nothing. (114)

アイツはワタシがソコにいることをのぞんでいる

カタチをもってミンナをつれて

アイツとおなじように

本心とはうらはらに

ミンナであるワタシがいることを

無であるアイツとおなじように。

アイツはそもそも、無ではないか。カインがアベルを殺して空なるモノ・不在者にしたのは、自分が神に退けられたモノとしてそもそも空なるモノとなったからではないか。アベルを、自分とおなじモノに変えたのである。アイツはワタシを自分とおなじような放浪者・不在者にしようとしているのではないか。ワタシと仲間タチが、それぞれ「コレ性」をもった存在になることをさまたげようとしているのではないか。アイツもおなじ仲間のひとりでありながら、ミンナのモデルになろうとしているのではないか。

il me fait parler

= He has me say things

en disant que ce n'est pas moi,

saying it's not me,

avouez que c'est fort (140)

there's profundity for you

(114)

アイツはそれはワタシではないといいながら

ワタシにしゃべらせる

強引なことだ

アイツはワタシを<アイツのワタシ> (son moi, his me) にしてしまう。しかしそれでも、アイツは<ワタシにほかならないアイツ> (lui qui est moi, who is none but me) なのだ。

Ce que je fait,

= What am I doing,

je parle,

talking,

je fait parle mes chimères,

having my figments talk,

ca ne peut être que moi. (142)

it can only be me. (116)

ワタシがしていることは

しゃべっている

ワタシの空想のモノたちにしゃべらせている

けっきょくワタシのはずだが。

アイツはワタシであり、ワタシはアイツである。アイツがワタシにしゃべらせるように、ワタシは仲間にしゃべらせる。コエはアイツのもの、アイツはワタシ。しかし、だからコエはワタシのものといえるのか。どうも、そうではないらしい。ここでも『千の高原』の助けをかりよう。

C'est le langage tout entier qui est discours indirect. Loin que le discours indirect suppose un discours direct, c'est celui-ci que s'extrait de celui-là, ... JE est un mot d'ordre.

Un schizophrène declare: <j'ai entendu des voix dire: *il est consient de la vie*>. Il y a bien en ce sens un cogito schizophrénique, mais qui fait de la conscience de soi la transformation incorporelle d'un mot d'ordre ou le résultat d'un discours indirect. Mon discours direct est encore le discours indirect libre qui me traverse de part en part et qui vient ou d'autres d'autres mondes planètes. (106-7)

(大意) 言語全体が間接言説である。間接言説は直接言説を前提とするどころか、直接言説こそ間接言説からでてくるのである。「ワタシ」は、ひとつの指令語である。ある分裂症のヒトが告白している、「ワタシはいくつものコエがいうのをきいた」。たしかに分裂したコギトがある。しかし、それは自意識を、指令語の無形の変化あるいは間接言説の結果にしてしまう。ワタシの直接言説はやはり、ほかのヒトビトとかほかの星からきてワタシをつきぬける自由間接言説である。

おなじ仲間でありながら、アイツとコエが不可解なのは、ほかの世界からくるように近づいてくるからであろう。この捉えきれないものは、神が預言者を襲うようにワタシを襲ってくる。ワタシは逃げたいけど、しかし待っている。

je suis de nouveau loin,	= and I am far again
j'ai encore une lointaine histoire,	with a far story again,
je m'attends au loin	I wait for me afar
pour que mon histoire commence,	for my story to begin,
pour qu'elle s'achève,	to end,
et de nouveau	and again
cette voix ne peut être la mienne.	this voice cannot be mine.
(143)	(116)

ワタシはまたもや遠くにいる
またもや遠いオハナシをムネに
ワタシは遠くのワタシを待っている
ワタシのオハナシがはじまるように
オハナシがおわるように
またまたこのコエはワタシのじゃない

待っているワタシと待たれているワタシ。待たれているワタシとは、けっきょくアイツのことにちがいない。ワタシに自分のコエがないとすれば、オハナシがはじまるのは、アイツのコエがやってきてから。オハナシがおわるのは、アイツがさるとき。『千の高原』は、そのことを適切におしえてくれる。

Nous ne croyons pas à cet égard que le récit consiste à communiquer ce qu'on a vu , mais à transmettre ce qu'on a entendu, ce qu'un autre vous a dit. Ouï-dire. (97)

モノガタリは見たことを伝えることにあるのではなく、ほかのヒトがアナタにいったことを伝えることにある、と考えられる。聞き伝

えである。

これは、不在者アベルのオハナシであると同時に、不在者カインのオハナシであり、アベルもカインも散ッタワタシであることが見えてくる。アベルを殺害したあと神から追放されたカインが、仲間のなかにまぎれこんでいる。アイツとはカインであり、聞き伝えのもののコエはカインのコエではないのか。

ここで、まったく別の観点から、アイツのことを考えてみたい。ダニエル・カツ (Daniel Katz) は、ベケットの三部作³¹までを、〈ポスト・ジョイス的〉とし、『不在の書』を〈ポスト・ベケットの作品〉(post-Beckettian works)の第一作と捉えている³²。ベケットには、いつもジョイスの影がつきまといっている。ジョイスとベケットは、どういう関係にあったのか。

I would like to suggest that in certain fundamental ways Beckett's postwar texts present us with one of the first and most incisive responses that we have to Joyce — and particularly the Joyce of the *Wake*. Indeed, I think the very Beckettian concern with belatedness and secondarity, already implicit in anything defined a “response,” is itself an outgrowth of and reflection on the Joycean project and its “interminable” nature ... Obviously, any utterance, gesture, or significatory practice qualified as a response automatically implies a reversal — in relation to the problematically “previous” statement — of the positions of sender and addressee. A response is what happens at the moment an addressee of particular message becomes, in turn, a sender whose message is then destined for the site whence

³¹ *Molloy, Malone Dies, The Unnamable*

³² *Saying I No More*, Northwestern University Press, 1999. p.8

the “first” message came. In this sense, a “response” consists of an addressee, in turn, addressing the origin of its own designation as addressee ... Responses are always in part self-addressed apostrophes to the ear. The belatedness and repetition which are part of the structure of the response, along with the element of auto-address it implies, perhaps allow us to think the response in terms of a narcissistic echo, a noninaugural reproduction of the subject ...³³

(大意) ベケットの戦後のテクニストは、ジョイスに対する痛烈な応答を提供してくれる。遅れや二義性に対するまさにベケット的な関心は、それ自身ジョイスのもくろみと「終りのなさ」の結果であり反映である。応答として適切などんな発話、身振り、意義のある実践も、「先に」いわれたこととの関係で、発信者と受信者の逆転を含んでいる。応答とは、特定のメッセージの発信者が今度は受信者になる瞬間に起こることであり、発信者のメッセージはそれから「はじめの」メッセージが送られてきた場所に向けられる。この意味で、応答は受信者となることにきまっている元のひとに向けて発進する受信者から成り立っている。応答はいつもミミへのいくぶん自分向けの呼びかけである。応答の構造の一部である遅れと繰り返しは、内に含まれた自分向けの要素とともに、ナルシス的なエコーに基づいた応答、主体の開始したものでない再生産であると考えられる。

しかしながら、三部作になると、応答に基づいているふたつの発話の位置—「発信者」と「受信者」、「話者」と「聞き手」—は、見分けがつかないほど不定となる。聞くミミは、自分のコエを聞いている。話すコエは、別のコエを話している。こうして「応答」の能力を失う。この応答不能、だからこの応答しない、

³³ *ibid.*, pp.126-7

つまり開始しないでいることの不能は、それ自体ジョイスへの一種の応答、ジョイスのテキストに組み込まれてしまって応答できないので代わりにエコーし返すことをひきうけてしまうことになる。こういうふうに見ると、ジョイスに応答することは、自分自身の視点や位置から答えることにはならないで、むしろジョイスの内側から話すこと、ジョイス症候群になってしまう。ベケットの最初の評論「ダンテ… ブルーノ・ヴィコ… ジョイス」(*Dante... Bruno. Vico... Joyce*) は、ジョイスの進行中の作品『フィネガンズ・ウェイク』(*Finegan's Wake*) を擁護するために書かれた。ジョイスがたどりついた『ウェイク』のコトバは、目もくらむようなイメージでふくれあがっている。しかしベケットは、コトバとのたたかいのなかで、コトバをギリギリまできりつめていくをめざすことになる。ジョイスにまきこまれ、ジョイスの視点からジョイスに応答することを強いられながら、ベケットはジョイス症候群からの脱出をはかる。このようなベケットを見ると、アイツとワタシは、カインとアベルであるだけでなく、ジョイスとベケットの関係も反映されていると考えることができる。カッツの提示するこの視点も、この作品の解体をすすめていくうえで、たいへん示唆に富むものとなってくる。

5. 第5章の解体

C'est une image

= It's an image

dans ma tête qui est sans force (145)

in my helpless head (112)

ひとつのイメージ

かよわいワタシのアタマのなかの

この章で展開されるのは、裁判のイメージである。ワタシは同時に、書記(*le greff, the clerk*) であり、裁判官(*juge, judge*) であり、当事者(*partie, party*)

であり、証人(temoin, witness)であり、弁護士(avocat, advocate)である。
法廷でも、いろんなワタシがいる。

Puis vite ils de referment,	= An instant and they close again,
pour regarder dans la tête,	to look inside the head,
pour essaer d'y voir,	to try and see inside,
pour m'y chercher,	to look for me there,
pour y chercher quelqu'un,	to look someone there,
dans le silence	in the silence
d'une tout autre justice,	of quite a different justice,
dans les toiles	in the toiles
de cette instance obscure	of that obscure assize
où être est être coupable. (145)	where to be is to be guilty. (112)

すぐまたメはとじる
アタマのなかを見るために
そのなかを見ようとして
そこにワタシをさがすため
そこにダレカをさがすため
まったく別の裁きの静寂のなかに
存在スルコトガ罪デアルような
あいまいな審理の絵のなかに。

Toile はもともと布だから、イメージはキャンパスの上に描かれた絵のように
浮かんでくると思われる。もういちど、そのキャンバスをのぞいてみよう。

d'après l'image,	= according to the image,
mais seulement d'après elle,	but according to it alone,
il y en a d'autres,	there are others,
il y en aura d'autres,	there will be others,

d'autres images,

other images,

d'autres gens. (147-8)

other gentlemen. (118)

イメージからすると

イメージだけからすると

ほかのモノたちがいる

ほかのモノたちがいるだろう

ほかのイメージが

ほかのヒトたちが

ほかのヒトたちとは、ダレか。あたらしい仲間なのか。

Me voila hanté (150)

= Now I'm haunted (120)

ワタシときたらユウレイ屋敷

ユウレイたちは、〈死者のユウレイ〉(ceux des morts, those of the dead)、〈生者のユウレイ〉(ceux des vivant, those of the living)、〈生まれていないものたちのユウレイ〉(ceux de ceux qui ne sont pas nes, those who are not born)。このユウレイたちは、審理の場でナニをしているのか。

Ce sont eux murmurent mon nom,

= It's they murmur my name,

qui me parlent d'un moi,

speak to me of me,

qui parlent d'un moi (150)

speak of a me (129)

ワタシの名をささやくのはアイツラ

ワタシのことをワタシにしゃべる

ワタシの一面をしゃべる

ワタシは書記として、記録する。聞こえることが、わからないまま。書いていることが、わからないまま。聞き伝え — これこそまさに、書記の仕事であり、作家の仕事である。

je n'invente rien.

= I invent nothing.

...

...

je le dis comme je l'entends. (148-9) I say it as I hear it. (118-9)

ワタシはナニも思いつかない。

.....

聞こえらとおりワタシは話す。

ワタシは、ただ記録する。ワタシのことはほっておいてくれと、願いながら。

me laissant vide,

= and leave me empty,

vide et silencieux. (150)

empty and deserted. (120)

ワタシをカラッポにして

カラッポでヒッソリさせてくれるように。

審理は、ヨル進行する。アサになると、ユウレイたちは退散する。

il y a soudain des oiseaux

= there are suddenly birds

et tout se tait,

and all goes silent,

un instant.

an instant.

Mais les fantômes,

But phantoms come back,

ils reviennent,

it's in vain

ils sont beau s'en aller,

they go abroad,

se meler aux mourants,

mingle with the dying,

il reviennent

they come back

se glisser dans le cercueil,

and slip into the coffin,

petit

no bigger

comme une boîte d'allumettes (151)

than a matchbox (120)

ふいにトリがないてすっかり静まる

いっしゅん。

でもあのユウレイたち

いくら出かけて

死にかけたものたちとまじわっても

ムダだ

もどって

ヒツギにすべりこむ

マッチ箱ほどのヒツギに

ヨルになれば、また審理は続行されるだろう。存在スルコトガ罪デアルような裁きは、一種の宗教裁判にちがいない。ダンテの影響を受けたベケットの宗教観が、この章には垣間見える。

Ce sera la demain,	= That's where the council will be
le council	tomorrow,
il sera prie pour mon âme,	prayers will be offered for my soul,
comme pour celle d'un mort,	as for that of one dead,
comme pour celled'un enfant mort,	as for that of an infant dead,
dans sa mère morte,	in its dead mother,
pour qu'elle n'aille pas	that it may not go
dans les limbes,	to Limbo,
c'est joli,	sweet thing
la théologie. (150)	theology. (120)

おなじところでアス宗教会議があるだろう

ワタシのタマシイのために祈られよう

死者のタマシイのために祈られるように

死んだハハの体内で死んだコの

タマシイのために祈られるように

地獄のほとりにいかないように

スバラシイカナ

神学

上のほうでは、ワタシは死んだモノとして扱われてきたが、死んだモノ、死に

かかったモノ、まだ生まれないモノのイメージは、ずっとワタシにつきまとっている。ベケットの生涯の愛読書であったダンテの『神曲』³⁴のイメージが、いたるところに反映されている。地獄のほとりリンボーは、キリストがやってくるまえになくなったモノや洗礼をうけるまえの死児がいく場所である。死んでいても生まれようとしていても、胎児はいつも仲間のひとりである。この法廷で、ユウレイたちはふたつの働きをしている。ひとつは、死んだモノあるいは死にかかっているモノとしての被告のワタシの一面を、裁判官のワタシに、あれこれあげつらっている。もうひとつは、まだ生まれていないワタシを、生みだし、育てようとしている。

ils veulent me creer,	= they want to create me,
ils veulent me faire,	they want to make me,
comme l'oiselle l'oisillon	like the bird the birdikin
avec des larves	with lava
qu'ell va chercher au loin (152)	she fetches from afar (121)

ヤツラはワタシを創造しようとしている
つくりだそうとしている
トリがヒナを育てるように
遠くからムシをはこんできて

遠くのムシとは、ユウレイたちが上のほうからはこんでくる情報のことである。外部準拠の「知のコエ」をもつよりも、ワタシは解放されること、カラポッにしてもらうことを望んでいる。ここで、ユウレイたちのなかに、カインが、そしてジョイスがまぎれこんでいることを忘れてはならない。のがれようとしながら、ワタシはついていく。

Je le suivrai,	= I'll follow him,
de mes yeux scellés	with my sealed eyes,

³⁴ *The Divine Comedy*, translated by Henry Francis Cary, Oxford University Press, 1910

il n'a pas besoin de porte,

he needs no door,

...

...

pour sortir,

to issue

de cette tête imaginaire,

from this imaginary head,

...

...

en exil. (150)

in exile (120)

ワタシはアイツについていこう

メをとじて

アイツにはドアはいらない

...

この空想のアタマから

出かけるのに

...

流浪へと

流浪は、殺人者カインが神からうけた罰である。「だれでもカインを殺す者は七倍の復讐を受けるでしょう」³⁵と、神から保護されたはてしのない流浪である。殺されたアベルが、殺したカインの同伴者になろうとしている。ジョイスにしても、祖国アイルランドからの追放者であり、次のように歌っている。

This lovely land that always sent

Her writers and artists to banishment

And in a spirit of Irish fun

Betrayed her own leaders,

one by one.³⁶

この美しい国はいつも

³⁵ 『創世記』 4 : 1 5

³⁶ "Gas from a Burner". *Poems and Exiles*, Penguin Books. p.107

作家や芸術家たちを追放し
アイルランド風にたわむれて
自分たちの指導者をあざむいた、
ひとりずつ。

ジョイスは 1940 年、22 才のときダブリンをあとにして、最後の 20 年間はパリに定住した。ベケットも 1931 年、31 才のときアイルランドに愛想をつかし、パリに住んだ。その点では、ジョイスの流浪に従ったといえる。

6. 第 6 章の解体

cette innommable chose (158) = this unnamable thing (125)
この名づけきれないもの

ユウレイたちが、アタマをではいりするそのあいまは、どうなっているのか。〈ワタシの看守たち〉(mes gardiens, my keepers) がいる。ワタシは逃げる気もないのに、見張られている。〈看護士たち〉(des infirmiers, male nurses) のこともある。やはりワタシの監視役。あるときは、〈食屍鬼たち〉(des sortes de goules, ghouls)。ワタシの死体をながめている。またあるときは、〈ガイコツの大集団〉(de grandes grappes d'os, great clusters of bones)。いっしょにはしゃぎたくなるくらい陽気なヤツラ。

ma vie est variée (154,155) = my life is varied (123)
ワタシの人生さまざま

人生の多様性はナニによってきまるのだろうか。

la mienne de vie, = my viewless form
que je dis finie, described as ended,
ou à venir, or to come,

ou toujours en cours,

or still in progres,

selon les mots,

depending on words,

selon les heures (158)

the moments (125)

ワタシの人生

終わったといってもよい

これからといってもよい

途中といってもよい

コトバしだい

トキしだい

ここで、コトバできまる人生と、トキによってきまる人生とはどういうことか、考えてみたい。

(1) コトバできまる人生

『千の高原』で述べられているドゥルーズとガタリの思考をかりて、論考をすすめてみたい。コトバというものを、〈記号〉(signe) として捉えるなら、それは〈意味されるものにかかわる意味するもの〉(le signifiant renvoyant au signifié) (164) である。この〈記号の意味づけ体制〉(le régime signifiant du signe) (146) のなかで、専制的な意味づけは意味されるものをひとつの円の中にとじこめ、それに〈カオ〉(visage) をあたえる。ワタシは、コトバが登場させるユウレイたちのカオ、看守たちのカオ、食屍鬼たちのカオにとりかこまれている。コトバがそういう人生をワタシにおしつける。ユウレイたちは、コトバによってワタシのカオをつくりだそうとする。ワタシは、おしつけられたカオをなくして、とじられた円から脱出したいと願っている。カオをなくするということは、円から追放されて受刑者となるということだろう。

Le supplicié, c'est d'abord celui qui perd son visage et qui
entre dans un devenir-animal, dans un devenir-moléculaire

dont on disperse les cendres aux vents. (145-6)

受刑者とは、まずカオをうしなうモノであり、動物ニナルコト、

分子ニナルコトであり、その灰はカゼにちらされるのである。

だから、アベルであるワタシがカインといっしょに流浪の身となることは、
またベケットであるワタシがジョイスといっしょに祖国を離れて生きるこ
とは願わしいことではないのか。ワタシがカゼに舞うチリとなったイメージ
がうかぶとき、ワタシはほっとするのである。

me voilà,	= look at me,
petite poussiere dans un petit nid,	a little dust in a little nook,
venus du dehors perdu.	by breath straying
qu'un souffle souleve,	stirred faintly
qu'un autre raba,	his way and that
Oui, je suis ici pour toujours,	from the lost without.
Avec araignées et mouches mortes,	Yes, I'm here for ever,
dansant au frémissement	with the spinners
de leurs ailes empêtrées,	and the dead flies,
et j'en suis bien content,	dancing to the tremor
...	of their meshed wings,
Quelquefois il vien un papillon,	and it's well pleased I am,
Tout chaud de fleurs,	...
comme il est faible,	Sometimes a butterfly comes,
et vite mort.	all warm from flowers,
les ailes en croix (156)	how weak it is,
	and quick dead,
	the wings crosswise (123-4)

ワタシはココに

かたすみの小さなチリ
かすかなカゼにもまいあがり
まぎれこむべつのカゼでまいおりる。
そう、ワタシはいつまでもココにいる
クモや死んだハエといっしょに
からまったハネのふるえにのせておどりながら
ほんとにうれしい

...

ときにはチョウ
ハナのぬくもりをもって
なんとはかなく
すぐに死ぬ
ハネを十字架のようにして

ワタシがチリとなつてなつている世界は、すみの世界でありながら、そこにはいくつものカオがある。ワタシは、「チリ」であり、「クモ」であり、「ハエ」であり、「チョウ」である。しかし、大空を舞うチリではなく、隠れ家のすみのチリであるといつても、カゼで動くヨロコビは、25 ページで触れた東洋的な「コレ性」をもったものとして捉えられている。鈴木大拙が、芭蕉の「古池」の俳句について語っている世界である。

この句の作者にとって、「我」は古池であり、「我」は蛙であり、
「我」は水音であり、「我」は実存のこれらすべての個々別々の
単位を包含する実在である。³⁷

ワタシは小さいいくつもの実在に「ナル」ことによって、いくつもの「コレ性」をつくりだすことによって、コトバによる固定化をまぬがれようとしている。
しかしここで、クモの存在に注目したい。からめとるクモは、コトバの網の目

³⁷ 『鈴木大拙選集』第 26 巻、春秋社、1961、p. 127

を連想させる。コトバの執拗さも、「コレ性」をもっている。

(2) トキできる人生

トキの問題は、実在の問題とかかわりがある。思い出や他者の作品が、実在となるのはどういう場合であろうか。西田幾多郎は、次のように説明している。

静物画に於けるオレンジの美は、伊太利の天が聯想せられるに由るのではなくして、ベルグソンが薔薇の花の中に過去の記憶を嗅ぐと云う如く、黄金色のオレンジの中に伊太利の天が見られなければならぬ。... 単なる思出は何等の藝術的意義を有せないのである。オレンジの色香を通して伊太利の天を見、薔薇の中に過去の記憶を嗅ぐのは、唯我々が現在意識の底に入って、純なる作用の深き流に結合することによって可能となるのである。³⁸

これは 25 ページの注に引用した「直観」の作用によるものである。秋月龍珉も、「薔薇の花の中に過去の記憶を嗅ぐ」というベルグソンのこの経験に触れたあと、この思い出を秘めた薔薇こそ実在としている。

この具体的な“あるがまま・そのまま”の実在を仏教では“如”（真如、as-it-is-ness）という。³⁹

見えるものがそのまま「如」であるように、ココロにうかぶこともそのまま「如」である、ココロの動きは、「即心」（the mind as it is）⁴⁰として、そのまま実在である。これはきわめて東洋的な考え方であるが、神秘主義に関心をもっていた A. ハクスリー（Aldous Huxley）はこれを理解していたようである。禅画家の手法に触れながら、うつろいやすいモノが個体として白い空白の上に近接的に、モノソノモノ<Thing-in-Itselfhood> として描かれることに言及してい

³⁸ 『西田幾多郎全集』 3、「美の本質」、岩波書店、1965、p.260

³⁹ 『秋月龍珉著作集』 8、「鈴木禅学と西田哲学の接点」、三一書房、1978、p. 32

⁴⁰ 同上、p. 35

る⁴¹。

〈表現装置〉がワタシの直観を作用させる。

à douze ans,	= at the age of twelve,
ou à quarante,	or at the age of forty,
car la glace est restée,	for the mirror remained,
mon père est parti	my father went
mais la glace est restée,	but the mirror remained,
ou il avait tant change,	in which he had so much changed,
ma mère s'y coiffait,	my mother did her hair in it,
...	...
dans une autre maison,	in another house,
d'où on ne voyait pas la mer,	with no view of the sea,
d'où on voyait la montagne,	with a view of the mountains,
si c'était ma mère,	if it was my mother,
quelle bonne bouffée	what a refreshing whiff
de vie sur terre. (157)	of life on earth. (124)

12 のときか

40 のとき

カガミはのこっていたのだから

チチはなくなったが

カガミはのこっていた

カガミのなかでチチはすっかりかわりはてていた

カガミのなかでハハがカミをすいていた

...

べつのイエで

⁴¹ *The Doors of Perception and Heaven and Hell*, Flamingo, 1994. p.129

そこからウミは見えなかったが

ヤマが見えた

さわやかな命のカゼが

大地のうえをふきすぎて。

思い出は、実際のできごとばかりではない。本で読んだことも、空想したことも、時間的次元と空間的次元を超えて、「コレ性」をもった「如」としてよみがえってくる。カガミという実在をとおして、チチがいたころのウミの見えるイエの思い出に、ハハだけのヤマの見えるイエの思い出がつづく。そのさわやかなカゼと大地の風景が思いださせるのは、ダンテの『神曲』をとおして直観したウミでの苦い経験である。

Je fus,

je fus,

disent ceux de Purgatoire,

ceux des Enfers aussi,

admirable pluriel,

marveilleuse assurance.

Plongé dans la glace,

jusqu'aux narines,

les paupieres collee

de larmes gelées,

revivre ses campagnes,

quelle tranquillite,

et se savoir au bout de ses surprises,

non, j'ai dû mal entendre.

Combien d'heures encore

avant le silence suivant (157)

= I was,

I was,

they say in Purgatory,

in Hell too,

admirable singulars,

admirable assurance.

Plunged in ice

up to the nostrils,

the eyelids caked

with frozen tears,

to fight all your battles

o'er again,

and know there are

no more emotions in store,

no, I haven't heard right.

How many hours to go,

ワタシはいた

ワタシはいた

煉獄のヤツラがいう

地獄のヤツラがいう

すばらしい複数

すばらしい保証

ハナの穴まで

コオリにつかり

マブタには凍ったナミダがはりつき

そのタタカイを回想すること

なんという静けさ

おどろきのココロもつきはてたことを知ること

いや、聞きちがえたにちがいない。

あとなん時間

つぎの沈黙まで

ヴェルギリウスにつれられて地獄と煉獄を旅するダンテに、ワタシも同伴している。地獄篇第三十二篇で、地獄の第九層の凍った沼を渡りながら⁴²、反逆者の世界を経験する。聞き伝えをしながら、どうも聞きちがえていると思うのは、なぜだろうか。語っていることが聞き伝えであると自覚する瞬間から、直観は反省へと移っている。カチカチ鳴るハのオトと泣きさけぶコエとののしりの場面を思い出しながら静寂を考えるのは、聞き伝えがおわったあとの沈黙のことを考えはじめているからである。ナミダを凍らせマブタをかたくとざしてしまう寒気のなかで、意味づけでしばりつけるコトバの凍結作用を思いおこしているからである。思い出にかかわるトキの問題も、直観から反省へと移ると

⁴² *The Divine Comedy*, pp. 109 – 112

き、やはりコトバの問題へともどっていく。

A supprimer,

le mots se laissent supprimer,

et les folles pensées

qu'ils inventent,

la nostalgia de cette boue

où souffla l'esprit de l'Éternel

et écrivit son fils,

beaucoup plus tard,

de bout de son doigt de con divin,

aux pieds de l'adultère,

à balayer (156)

削除すること

コトバは削除できる

コトバのつくりだす狂った思いも

あのドロへの郷愁

神の霊がイキをふきかけたドロ

ずっとあとになって

聖なるまぬけのユビ先で

姦淫のオンナのアシもとに

神の子が文字をかいたあのドロ

きれいに消してしまうこと

= Blot,

words can be blotted

and the mad thoughts

they invented,

the nostalgia for that slime

where the eternal breathed

and his son wrote,

long after.

with divine idiotic finger,

at the feet of the adulteress,

wipe it out (124)

神がイキをふきかけてアダムをつくったあのドロ⁴³。律法学者やパリサイ人
に取り囲まれたイエスが姦淫のオンナのアシもとにしゃがみこんで指先で文字

⁴³ 『創世記』 2:7

を書いたあのドロ⁴⁴。イエスはいちど立ち上がり、「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」と命じ、またしやがみこんで文字を書きつづけた。消されなければならないのは、あのドロへの郷愁ではなく、ドロをいわば地層化した神と神の子のわざであろう⁴⁵。コトバの働きは、まさにこの地層化であり、領土化であり、呪縛である。

cette innomable chose,	= this unnamable thing
que je nomme,	that I name
nomme,	and name
nomme,	and never wear out,
sans l'user,	and I call that words.
et j'appelle ça des mots.	It's because I haven't hit
C'est que je ne suis pas tombé	on the right ones,
sur les bons,	the killers,
ceux qui tuent,	haven't yet heaved them,
des aigreurs de cette infecte pâture	up from that heart burning
il ne me sont pas encore	glut of words,
montés à la gorge,	what words shall I name
de cette gave de mots,	with my unnamable words?
avec quels mots les nomer,	(125)
mes innomables mots. (158-9)	

名づけきれないモノ

名づけても

名づけても

つくしきれないモノ

⁴⁴ 『ヨハネによる福音書』 8 : 6 - 8

⁴⁵ *Mille Plateaux*, p.54. <Les strates étaient des jugements de Dieu, la stratification générale était le système entier du jugement de Dieu> (地層は神の裁きであり、地層化全体は神

それをワタシはコトバとよぶ。

ぴったりしたコトバにでくわしたことがないということだ

とどめをさすヤツラに

あの悪臭をはなつくイモノの胸やけから

ヤツラがまだノドまであがってこない

コトバの激流から

ヤツラをどんなコトバで名づけよう

ワタシの名づけきれないコトバたち

ワタシが捜しているのは、コトバを名づけるコトバである。コトバはイメージを固定する。イメージを固定するコトバは、オオキナカオをしている。ワタシはそれに、がまんできない。コトバそのものを固定するコトバがほしい。つまり、コトバを殺すコトバがほしい。ワタシが求めているのは、いわばコトバの死である。それは、イメージをコトバから解放するためである。地獄の凍った沼のなかで、亡者たちのナミダは寒気で凍りつき、メをかたくとざしてしまった。ワタシは、ナミダが自由にながれることを求めている。

Mais d'abord il faut fermer la bouch	= But first stop talking
et continuer de pleur,	and get on with your weeping,
les yeux bien ouverts,	with eyes wide open
pour que le précieux liquide	that precious liquid
se perde librement (159)	may spill freely (125)

だがまずクチをとざして

ナミダをながしつづけなければならない

メをしっかりあけて

たいせつなナミダが

自由にあふれるように

の裁きの全体制であった)

クチをとじることは、コトバを遮断することである。ナミダを凍結させないように。しかし、ワタシはつけくわえる。

Du reste pas une larme,	= Besides not a tear,
pas une,	not one,
je risquerais plutot de rire. (159)	I'd be in greater danger of mirth.
	(125)

もつともナミダなんかありやしない
ひとしずくも
わらってしまいそう。

自由なナミダのイメージも、コトバによって生みだされるかぎり、凍結はまぬがれない。凍結を避けるためには、イメージをつぎつぎと変えていくしかない。こういう調子だと、体系だったおおきなオハナシなどできるはずもない。

Et rouverte ce sera,	= And when they open again
qui sait,	it may be to hear a story,
pour dire une histoire,	tell a story,
au vrai sens des mots,	in the sense of the words,
du mot dire,	the word hear,
du mot histoire,	the word story,
j'ai bon espoir,	I have high hopes,
une petite histoire,	a little story,
allant et venant	coming and going
aux être vivants	with living creatures
sur une terre habitable	on a habitable earth
bourrée de morts,	crammed with the dead,
une brève histoire (159)	a brief story (125-6)

そしてクチはふたたびひらくだろう

たぶん
ひとつのオハナシをはなすため
コトバのほんとうの意味で
はなすというコトバの
オハナシというコトバの
ワタシはしっかり望みをもっている
ちいさなオハナシ
死者をつめこんだ居住地を
いったりきたりしている生きものたちのいる
みじかいオハナシ

ここで問題となっているのは、「小さなオハナシ」・「短いオハナシ」をつくることである。「小さい」とか「短い」というのは、量的な問題ではないはずである。オハナシの歴史の一部を振りかえりながら、しばらくこの問題を考えてみたい。ベケットがジョイスの流れをくむものであることは見てきたが、ジョイスはフローベルの流れをくむものである⁴⁶。フローベルのしたことは、なにだろうか。フローベルの未完の『紋切型辞典』についての蓮実重彦の論説は、たいへん興味深い。ポイントになる点を、参考にさせてもらう。(番号は筆者が任意につけたものである。)

(1) 知は、物語によって顕在化し、また物語は知によって保証されもするわけだ。... ところで、フローベルが十九世紀の半ばに構想を得た辞典は、まさに、こうした知と物語との補完的な関係を断ち切ることにあったのだ。⁴⁷

(2) 『紋切型辞典』の唯一の主題は、人がいかにして現代的な言説から自由になるかということである。そしてその試みが、現代的な言説の批判といったものによっては達成しえないだろうという点こそ、『紋切型辞

⁴⁶ Saing I No More, p.128

典』の著者があらかじめ口にすることをみずから禁じた結論なのである。⁴⁸

(3) 知と解説との安定した関係から逸脱するほかはないと二人のもと書記は、かくして、すでに誰かが口にした文句ばかりを改めて書き写すという非-生産的な言葉の運動に埋没することになるだろう。『紋切型辞典』とは、二人の独身者が筆記すべき既存の言葉の、ほんの一部でしかないわけだ。... ここに、筆者が二度介在していることに注目しよう。書記たちは、すでに書き写されていた自分の言葉ではない言葉を、改めて書き写すのだ。⁴⁹

(4) 心の鏡としての小説という概念は、スタンダールによってより広い芸術一般の理念にまで高められ、幾つかの絵画論や演劇論の中に「自然の忠実な模写」という視点となって現われたのち、やがて『赤と黒』のエピグラフの一つに、サン=レアルの言葉として引かれるあの名高い「小説とは、道にそって移動させる一つの鏡である」という一行に凝縮することになる。... 内面に推移し外界に生起する現象を写しだす鏡の表面がより繊細で複雑な光と影までも反映しうるようになったとはいえ、この言説は現代に対する有功性を欠落させていたとしかいえない。というのも、この鏡には絶対に映らないものが世界には存在し、しかもそれが、1830年を中心にして、社会の構造そのものを変容せしめるかたちであたりに氾濫しはじめるからである。

小説という鏡に絶対に写らないもの、それはほかでもない、言葉だ。みずからの生の条件そのものにかかわるその出来事を、鏡としての小説は捉える機能を持っていないのだ。それを無理に映しだそうとするなら、鏡は

⁴⁷ 『物語批判序説』、pp. 18-9

⁴⁸ 同上、pp. 33-4

⁴⁹ 同上、pp. 38-9

自分自身の上にそり返り、砕け散るほかないだろう。⁵⁰

(5)『紋切型辞典』はあくまで鏡が砕け散ったあとにかたちづくられる物語の断片からなっている。⁵¹

(6) もはや知っていることを未知の存在に向けて語るのではなく、既知のものたちが、知っているということを確認しあうために語るのである。そして彼らが語るものは… 国民的な話題として共有されたものについてである。「問題」とは、まさしくそれなのだ。「問題」は、きまって他者の問題なのである。というよりむしろ、「問題」とはどんな場合も他者の言葉だというべきかもしれない。⁵²

(7) いかなる分類原理もない断片的な物語の羅列…⁵³

(8) 拡散し、散在することこそが、現代的な言説にふさわしい唯一の「問題」のあり方なのだ。ある「問題」を解決することで何ごとかが確かな輪郭におさまリ、それを中心にした構図をかたちづくる視界が晴れわたるといった事態は現代には起こりえない。すべての「問題」は同じ資格で戯れあい、その戯れの運動が「問題」体系のおさまりがちな階層的な秩序を不断に攪拌する。だから、どこから始めようとそれはとりあえずの始まりでしかないし、何で終わろうと、その終りは決して終局的な結論とはなりがたい。⁵⁴

これだけの断片的な引用のなかにも、これまで見てきたことがおおきくまとめられていることに気がつく。現代の問題はコトバと他者の問題であること、書くという作業は書き写す（他者の書いたコトバを書き写すことも他者の語るコトバを聞き伝えることも自己準拠でないという点では同じ）という非-生産的な作業であること、書かれることは体系におさまらない断片的で散在的（樹木状

⁵⁰ 同上、 pp.84-5

⁵¹ 同上、 p.106

⁵² 同上、 p.108

⁵³ 同上、 p.132

⁵⁴ 同上、 p.139

ではなくリゾーム状)なものになること、など。「小さなオハナシ」「短いオハナシ」は現代の状況から生まれてくるものである。ここでさらに、現代という時代はどのような時代なのか、ほりさげてみたい。現代を「資本主義と分裂症」の時代としてとらえたドゥルーズとガタリは、『反オイディプス』をつぎのように書きはじめている。

Ça⁵⁵ fonctionne partout, tantôt sans arrêt, tantôt discontinu. Ça respire, ça chauffe, ça mange. Ça chie, ça baise. Quelle erreur d'avoir dit *le* ça. Partout ce sont des machines, pas du tout métaphoriquement: des machines de machines, avec leurs couplages, leurs connexions.C'est ainsi qu'on est tous bricoleurs: chacun ses petites machines. Une machine-organe pour une machine-énergie, toujours des flux et des coupures.(7)

ソレはいたるところで活動している。ときにはとどこおることなく、ときには中断しながら。ソレは呼吸し、ソレは熱くなり、ソレはたべる。ソレはクソをし、ソレはセックスをする。こういったものを<エス>と呼んだのは、なんというマチガイ。いたるところで、こういったものは機械なのである。まったく隠喩的にそうなのではない。機械の機械であって、たがいに連結し、接続している。...だから、ヒトはすべて器用な存在である。ひとりひとり、自分の小さな機械。ひとつのエネルギー機械に対し、ひとつの器官機械。いつ

⁵⁵ 本書を和訳(『アンチ・オイディプス』)した市倉宏祐は、「訳者あとがき」で、この *ça* の解釈について英訳と独訳を比較している。英訳では *ça* は一般の指示代名詞で、*le ça* だけは *the id* として精神分析のエスと解釈されている。独訳では *ça* は *es* となっていて指示代名詞がフロイトのエスかはっきりしないが、*le ça* は *Es* として後者と解釈される。しかし氏は、*ça* も *le ça* もフロイトのエスと捉えている。(516-20) このエスは、『岩波 哲学・思想辞典』で次のように説明されている:「...エスの部分はフロイトが<超自我>と呼んだものに当たる。超自我は主体が無力であった系統発生的・個体発生的な現実の状況に由来し、エディプス・コンプレックスを通過する際に親との同一化によって決定され、内面化された価値規範を担う場所となる。」(154) 本書全体が、このようなエディプス・コンプレックスによる精神分析に対する「反」の姿勢でつらぬかれているのだから、筆者も氏の解釈をとりたい。

も流れと中断がある。

機械と機械がうまく組みあっている例として、〈分裂者の散歩〉(la promenade du schizophrène) が取りあげられている。分裂者レンツは、家にいるときは社会のなかに自分を位置づけることを強制されるが、散歩のときは自然と一体になることができるのである。

Lentz s'est mis avant la distinction homme-nature, avant tous les repérages que cette distinction conditionne. Il ne vit pas la nature comme nature, mais comme processus de production. Il n'y a plus ni homme ni nature, mais uniquement processus qui produit l'un dans l'autre et couple les machines. Partout des machines productrices ou désirantes, les machines schizophrènes, toute la vie generique: moi et non-moi, exterieur et interieur ne veulent plus rien dire. (8)

レンツは、ニンゲンとシゼンが区別される前のトキに、このような区別の条件となる座標のできる前のトキに身をおいている。カレはシゼンをシゼンとしてではなく、生産の過程として体験する。もうそこには、ニンゲンもシゼンもない。ただあるのは、一方のなかに他方を生産し、機械と機械を接続する過程だけである。いたるところに、生産スル機械、欲望スル機械、分裂症ノ機械、同種の生命のすべてがある。ワタシとワタシでないものとか、外と内とか、もうなんの意味ももたない。

このような分裂者の生産機械は、資本主義のなかで生みだされたものであるが、資本主義と分裂者はどのような関係にあるのだろうか。

... la *machine capitaliste*, en tant qu'elle s'établit sur les ruines plus sou moins lointaines d'un Etat despotique, se

trouve dans une situation toute nouvelle: le décodage et la déterritorialisation des flux ... Le décodage des flux, la déterritorialisation du socius forment ainsi la tendance la plus essentielle du capitalisme. Il ne cesse de s'approcher de sa limite, qui est une limite proprement schizophrénique. Il tend de toutes ses forces à produire le schizo comme le sujet des flux décodés sur le corps sans organes — plus capitaliste que le capitaliste et plus prolétaire que le prolétaire....le capitalisme, dans son processus de production, produit une formidable charge schizophrénique sur laquelle il fait porter tout le poids de sa répression, mais qui ne se reproduit comme limite du procès ... Le capitalisme instaure ou restaure toutes sortes de territorialités résiduelles et factices, imaginaires ou symboliques, sur lesquelles il tente, tant bien que mal, de recoder de tamponner les personnes dérivées des quantités abstraites.

(41-2)

(大意) <資本主義機械>は、専制君主「国家」の廃虚の上に生まれたものであるかぎり、まったく新しい状況のなかにある。流れを脱体系化し、脱領土化したものである。流れの脱体系化と社会共同体の脱領土化は、こうして資本主義のもっとも本質的な傾向をつくりだす。資本主義はその分裂症的な極限に近づくことをやめない。それは器官ノナイカラダ⁵⁶の上に、脱体系化した分裂者を生みだそうとする。資本主義は、その生産過程のなかで、おそろしい爆

⁵⁶ 12ページで説明したが、生産するものでも生産されるものでもなく、はじめからあるもの、消費されないもので、本書のなかでくりかえしもちいられる概念である。

菓をつくりだす。しかし、過程の極限としてみずからを再生産することをやめないで、想像的であれ象徴的であれ、あらゆる種類の残余の人工的な土地をつくりだすか取りもどす。その上で、抽象的な量で派生するすべてのヒトビトを再体系化し刻印をおすのである。

資本主義は、脱体系化・脱領土化の極限をめざしながらも、みずからの崩壊をふせぐため、人工の領土（国家、故郷、家庭など）を復活させ、ヒトをそこにとどめようとする。しかし分裂者は、資本主義の体系化と刻印をのがれるため、生産する欲望機械として機能しつづける。機械は、ふたつの機能をする。

Elle fonctionne comme machine à couper le jambon: les coupures opèrent des prélèvements sur le flux associatif. Ainsi l'anus et le flux de merde qu'il coupe Bref, toute machine est coupure de flux par rapport à celle à laquelle elle connectée, mais flux elle-même ou production de flux par rapport à celle qui lui est connectée. (43-4)

機械は、ハムを切る機械のように機能する。切断は、つながった流れから採取の働きをする。こうして、コウモンとそれが切断するクソの流れ..... つまり、すべての機械は、それがつながっている機械との関係では切断であるが、それにつながっている機械との関係では流れそのものであり、あるいは流れの生産である。

このような「流れ一切断」は、ひとつの全体に統合することはできない。現代人は、分裂者として、つながりの寄せ集めのなかに生きているのである。

Nous somme à l'âge des objets partiels, des briques et des restes. (50)

ワタシたちは、部分的なモノ、レンガ、余リモノの時代に生きている。

このような時代にあっては、体系だった大きなオハナシはつくりようもない。

7. 第7章の解体

Ai-je tout essayé,	= Did I try everything,
bien fouine partout,	ferret in every hold,
...	...
j'amerais savoir	I'd like to be sure
si j'ai tout fait,	I left no stone unturned
avant de me porter manquant,	before reporting me missing
et d'abandonner. (161)	and giving up. (127)

ワタシはナニモカモ試してみたか

ドコモカシコモ捜してみたか

...

すっかり捜しまくったかどうか知りたいもんだ

自分がゆくえ不明と

あきらめてしまうまえに

自分捜しをしているとき、資本主義がもちだすニンゲンのモデルがカオをだす。

alor qu'il y a X,	= when there's X,
paradigme du genre humain,	that paradigm of human kind,
se mouvant à volonté,	moving at will,
avec joies et peines,	complete with joys and sorrows,
peut-être une femme et des enfants,	perhaps even a wife,
des ascendants certainement,	and brats
une carcasse à l'image de Dieu	forebears most certainly,

et une tete contemporaine,	a carcass in God's image
mais surtout doué de mouvement,	and a contemporary skull,
c'est surtout ca qui frappe,	but above all endowed
au portrait si facile,	with movement,
et a l'âme si instructive,	that's what strikes you above all,
que vraiment,	with his likeness so easy to take,
parler de soi,	and his so instructive soul,
alors qu'il y a X (163)	that really,
	no, to talk of myself,
	where there's X (128)

X⁵⁷ というものがいながら
 X はジンルイの模範
 すきなように動いている
 よろこびも苦勞ももって
 たぶん妻も子もいて
 先祖はもちろんのこと
 神のすがたに似た骨組み
 時代にあったオツム
 だがなによりも生まれつき運動能力にすぐれ
 それがなにより感心するところ
 気さくなカオ
 ためになるヒト
 まったく
 自分のことをしゃべるなんて
 X というものがいながら

⁵⁷ 分裂者と対称的な典型的ニンゲン像を表す恣意的な記号で、未知なものを表す記号ではない。

これは資本主義の用意する領土にふさわしいニンゲン像で、それがワタシにつきつけられてくる。

non, heureusement

= no, what a blessing

que je ne parle de moi,

I'm not talking of myself,

assez,

enough

sale perroquet,

vile parrot

je te tuerai. (103)

I'll kill you. (128)

いや、さいわいワタシは

自分のことなどしゃべっちゃいない

たくさんだ

いやなオウムめ

殺すぞ。

ここでも、否定による自己消去が行われている。しゃべっているのはオウムであって、ワタシではないという。同じ繰り返しにしても、エコーには情動が作用しているが、オウムの繰り返しは意味をもたない。オシャベリ機械は、クソを切断するコウモンのように、つぎつぎと意味のないコトバをおくりだす。このオシャベリ機械はべつの機械へとつながっていく。いまワタシは、すわって、待っている。東南駅のアカリの消えた三等待合室。最終便は、出てしまった。ヨアケの始発便を、待っている。行き先のあてもなく。ユビは、キップをつまんでる。生涯有効なキップ。テが<接合部>(synapse)の働きをすることは1章で触れたが、ユビも同じ働きをしている。抽象的なイメージを、領土化された現実世界と結びつけている。背すじをのぼしたワタシは、そこで回想機械となっていく。

Que de souvenirs,

= What thronging memories,

ca c'est pour me faire croire

that' to make me think

que je suit mort,

I'm dead,

je l'ai dit cent mille fois.

Mais les mêmes reviennent,

tels les rais d'une roue qui tourne,

toujours les mêmes,

et se ressemblant tous,

comme des rais. (163-4)

I've said it a million times.

But the same return,

like the spokes of

a turning wheel,

always the same,

and all alike,

like spokes. (128)

なんとおおくの思い出だ

ワタシが死んでるとワタシに思いこませるため

10万回もいったことだ。

だがおなじ思い出がもどってくる

回転する車輪のスポークのように

いつもおなじ

ミンナ似てる

スポークのように

しかし、この機械によって生みだされる思い出は、ベケットが *Proust* で述べている〈意志的な記憶〉(voluntary memory)⁵⁸ではない。ワタシが回想機械を操作しているのではないからである。ワタシはむしろ、機械によって生みだされるのである。『反オイディプス』に、次のような説明がある。

...le sujet, produit comme residu à ôté de la machine, appendice, ou pièce adjacente à la machine, passe par tous les états du cercle et passe d'un cercle à l'autre. Il n'est pas lui-même au centre, ccupé par la machine, mais sur le bord, sans identité fixe, toujours décentré, *conclu* des états par lesquels il passe. (27)

⁵⁸ *Proust*, John Calder, 1965. p. 32

主体は、機械のかたわらにある残リカス、機械の付属物あるいは隣接物として生みだされ、円のあらゆる状態を通過して、ほかの円へと移っていく。主体そのものは、中心にいてのではなく、中心は機械によってしめられ、ほとりにいて、さだまった自己同一性をもたず、いつも中心からずらされ、通過する状態からく引きだされてくる>。

それでは、この章でワタシが捜しているワタシとはいったいナニモノだろうか。さまざまな状態を通過する過程の余剰としてさまざまなワタシが生みだされてくる。ワタシは、ひと通りではありえない。第5章の解体のなかで、ユウレイたちがそれぞれ<ワタシの一面> (a me) をしゃべっているのを見たが、状態に応じて<さまざまなワタシ> (mes) がいる。自己同一性をもったワタシなど存在しないと知りながら、ヨルの待合室に硬直した姿勢ですわっているワタシはもはやワタシではないと捜査リストからはずして、またほかを捜そうとする。つまりワタシのやっていることは、可能性を実現することではなく、可能性をつくそうとしているだけではないか。ドゥルーズとガタリは、これまで参照してきた『反オイディプス』と『千の高原』でベケットの作品をよく取りあげているが、ドゥルーズは *L'épuisé*⁵⁹ でもつばらベケットを取りあつかっている。l'épuisé は英語の the exhausted に当たるが、exhaust [外へ (ex) 水をくみだす (haust)] から連想されるように、使イ尽クサレタモノ、疲レハテタモノで、ここでは散ラバッタ自分を捜すことに万策尽キタモノを表わしている。この本のなかで、ドゥルーズはベケットの網羅性を強調している。

... toute l'œuvre de Beckett sera parcourue de series exhaustives, c'est-à-dire épuisantes (60)

ベケットの全作品は網羅的、つまりすべてを汲みつくす連続につ

⁵⁹ Quad; et, Trio du fantome; - que nuages - ; Nacht und Traume/ Samuel Beckett; traduit de l'anglais par Edith Fournier. Suivi de *L'épuisé*, Minuit, 1992

らぬかれることになる

この章では、*Watt* におけるような執拗な可能性の列挙はないが、68 ページの引用文では「ナニモカモ試し、ドコモカシコモ捜してみたか」自問されている。英文の引用にある *ferret* という動詞は、もともと白イタチのことで、「白イタチを使ってウサギなどを穴から狩りだす」という執拗な追求を表している。しかし、不可能と知りながら可能なことを汲みつくそうとするこの執拗さは、情熱的なものではなく、覚めたメで行われるゲームのようなものといっている。

8. 第8章の解体

C'est un flot ininterrompu,	= It's an unbroken flow
de mots et de larmes,	of words and tears,
...	...
mes mots sont mes larmes,	my words are my tears,
mes yeux ma bouche (167-8)	my eyes my mouth (131)
コトバとナミダの	
とだえることの無い流れ	
...	
ワタシのコトバはワタシのナミダ	
ワタシのメはワタシのクチ	

第6章の解体のなかで、なんとかしてナミダの流れをコトバによって凍結させまいとするワタシのモクロミを見てきた。しかしいま、ナミダは凍結することなく流れつづける。コトバも流れつづけている。メも凍結によって閉ざされことなく、コトバを出すクチのように、流れをつくりだしつづけている。この流れはどうしたことだろう。ワタシにナニカおきたのだろうか。

c'est toujours le même murmure,	= it's for ever the same murmurs,
ruisselant,	flowing,
sans hiatus,	unbroken,
comme un seul mot sans fin	like a single endless word
et par conséquent sans signification,	and therefore meaningless,
car c'est la fin qui donne,	for it's the end gives
la signification aux mots. (168)	the meaning to words. (131)

いつもとおなじツブヤキ

流れていく

とだえることなく

ただひとつのコトバのように

だから意味もなく

コトバに意味をあたえるのは

終わりのないからだ。

コトバはナミダを凍結させるとき、みずからも凍結してしまうのだろうか。あるいは、コトバが停止するとき、コトバが意味をもって、そのためにコトバは凝固してしまうのだろうか。それを避けるために、コトバは流れつづけようとしているのだろうか。

Non, l'avoir dit be convainc	= No, to have sais so convinces me
du contraire	to the contrary
...	...
voilà la beauté toute negative	ah if no were content to cut
de la parole,	yes's throat
dont malheureusement	and never cut its own (133)
les négation bubissent le même sort,	
en voilà la laideur (171)	

いや、そういってしまったために

逆のことを確信する

...

これが発話のまったく否定的なウツクシサ

ところが否定語もまったく同じ目にあう

なんというミニクサ

否定語も否定のウキ目にあう。それなら、ワタシが求めていた「コトバを殺すコトバ」は、否定語として存在しているではないか。「コトバの死」は成立しているではないか。上の引用文の終りの3行は、英文では、「ああ、ノーがイエスのノドをかき切って、みずからのノドをかき切らなければいいものを」となっていて、否定語が否定されないことを願っている。これはベケット特有の〈自己消去の撞着文体〉(the self-canceling, oxymoronic style)である⁹⁸。断定的に〈être〉でいい切れなくて、矛盾したことも対立したことも〈et...et...〉とリゾーム状につないでいくしかないのである。矛盾も対立も包む共存平面を見出すことが問題なのである。

ここでベケットの言語について、ドゥルーズの論を参考にして考えてみたい。彼は *L'épuisé* で、ベケットの言語を三つに分類している。

Appelons *langue I*, chez Beckett, cette langue atomique, disjonctive, coupée, hachée, où l'énumération remplace les propositions, et les relations combinatoires, les relations syntaxiques: une langue des noms. Mais, si l'on espère ainsi épuiser le possible avec des mots, il faut non moins avoir l'espoir d'épuiser les mots mêmes: d'où la nécessité d'un autre méta-langage, d'une *langue II* qui n'est plus celle des noms, mais celle des voix, qui ne procède plus avec des atomes

combinables, mais avec des flux mélangeables. Les voix sont les ondes ou les flux qui pilotent et distribuent les corpuscules linguistiques. Quand on épuise le possible avec des mots, on taille et on hache des atomes, et, quand on épuise les mots memes, on tarit les flux. C'est ce problème, d'en finir maintenant avec les mots, qui domine à partir de *L'In-nommable* ... Pour épuiser les mots, il faut les rapporter aux Autres qui les prononcent, ou plutôt les émettent, les sècretent, suivant des flux qui tantôt se mélangent et tantôt se distinguent. Ce second moment, très complexe, n'est pas sans rapport avec le premier ... Il y a donc une *langue III* qui ne rapporte plus le langage à des objets énumérables et combinables, ni à des voix emettrices, mais à des limites immanentes qui ne cessent de se déplacer, hiatus, trous ou déchirures ... « Hiatus pour lorsque les mots disparus. Lorsque plus mèche. Alors tout vu comme alors seulement. Désobscurci. Désobscurci tout ce que les mots obscurcissent. Tout ainsi vu non dit »⁶¹. Ce quelque chose de vu, ou d'entendu, s'appelle Image ... (65-70)

(大意) この原子的、分離的、切斷的、途切れとぎれの言語が、ベケットの[言語 I]である。そこでは、数えあげることが命題にとってかわり、組み合わせの関係が統合の関係にとってかわる。これは、名詞の言語である。しかし、このようにコトバで可能なことを数えつくそうと望むなら、コトバそのものを空っぽにすることを望まなければなら

⁹⁸ *Saying I No More*, p.141

⁶¹ *Cap au pire*, p.53

ない。そこで別のメタ言語⁶²が必要となる。この[言語 II]は、名詞の言語ではなく、コエの言語で、組み合わせ可能な原子によってではなく、混合可能な流れによって作用する。コエは、言語の粒子をみちびき分配する波あるいは流れである。コトバで可能なことを数えつくすとき、ヒトは原子を切りきざむ。そして、コトバそのものを空ッポにすると、流れを涸らす。もうコトバと手を切ってしまうことが『名づけきれないもの』以降の問題である... コトバを空ッポにするためには、それを発する「ホカノヤツラ」に、あるいはむしろ、ときには混ざりあいときにははっきり区別できる流れにしたがいながらコトバを発し分泌する「ホカノヤツラ」に、コトバを関連づけなければならない。たいへん複雑なこの第二の要因は、第一の要因と無関係ではない。... だから、数えられるものや組み合わせられるものにも、コトバを発するコエにも、言語を関連づけない[言語 III]が存在する。これは、移動することをやめない内側の境界に、空白や穴や裂け目に、言語を関連づける... 「コトバが消えてしまったための空白。もうお手上げのとき。そのときすべては、ただそのトキとして見られ。ヤミはうすれ。コトバが暗くしていたすべては明るくされ。すべては言われずに、見られる」。見られたり聞かれたりするこのナニカは、視覚的であれ聴覚的であれ、「イメージ」と呼ばれる。

『不在の書』は、それが書きはじめられる前年から書きつづけられている『名づけきれないもの』の課題をひきついでいることは述べたが、ドゥルーズによれば、これはベケット言語 II — コエの言語の時期である。第7章までの解体で、コトバの問題とみえていたものが、第8章ではコエの問題へと移っている。

⁶² 自分が発する言語に対し、ホカノヤツがしゃべる言語 — ヨソの言語、自分にとって外国語のような言語の意味で用いられている。

ナミダは凍結せずに自由に流れるほうが、ワタシにとって望ましいことであつた。凍結するか流れつづけるか、それはコトバの働きによる。コトバが否定語によって凝固するか流れるか、それはコエの働きによる。問題はコエをなんとかすることだ。コエはワタシの自己準拠のコエではなく、ヨソから聞こえてくるコエなのだから。

je ne suis ici	= here I am
qu'une poupee de ventriloque,	a mere ventriloquist's dummy,
je ne sens rien,	I feel nothing,
je ne dis rien,	say nothing,
il me tien dans ses bras	he holds me in his arms
et il fait remuer mes levres	and moves my lips
avec une ficelle,	with a string,
avec un hamecon (170-1)	with a fish-hook (133)

ココでワタシは
腹話術師のニンギョウにすぎない
アイツはワタシをウデにだき
ワタシのクチビルを動かす
ヒモで
釣り針で

ワタシに押しつけられるこのコエをなんとかするという事は、コエを涸らすことである。

dans l'espoire d'user une voix,	= hoping to wear out a voice,
d'user une tête (168)	to wear out a head (132)

コエを使いきり

アタマを使いきるという望みをもって

この<使いきる>(user, wear out)は、ドゥルーズの言うところの<空ッポに

する >(épuiser, exhaust) とおなじ意味だろう。そして、それは流れを<涸らす> (tarir, drain) ことになるだろう。コエを発するアイツのコエを使いきるために、ワタシはあやつられるままにクチビルを動かしている。ところで、アタマを使いきるということは、どういうことだろう。第1章から見てきた群れの仲間タチはどうなるのだろうか。仲間のなかにはいろんな思い出もふくまれていた。思い出は「コレ性」をもった「如」とし現れた。そのことと、アタマを空っぽにするということはどうかわるのだろうか。ミンナはどうなっているのだろうか。ワタシの仲間としてのアタマの行方を、ひとつの例としてみてみよう。

ou ai-je donc la tête,	= what's the matter with my head,
j'ai dû la laisser en Irlande,	I must have left it in Ireland,
dans un estaminet,	in a saloon,
elle doit y être encore,	it must be there still,
le front sur le zinc,	lying on the bar,
c'est tout ce qu'elle méritait.	It's all it deserved. (133)

(171)

ワタシのアタマはどうなった
きっとアイルランドにおいてきた
居酒屋に
きっとまだソコにある
カウンターにうつぶせに
似つかわしいことだ。

アタマは、まるで回想機械から切断されたクソのように、ゴロンと居酒屋のカウンターにころがっている。思い出は直観される瞬間は如^{じよ}であるが、意識の対

象となるとき、ひとつの客体 — 〈ボール〉⁶³ となってしまう。球体であるボールは、隣接するものと最小限の点で接しているにすぎない。次つぎ生みだされていく仲間たちの「即カズ離レズ」の関係を表わすのに最適のイメージである。この章でもうひとつ、ゴロンと生みだされた仲間をみておきたい。またすぐ否定され置きざりにされるにしても、見事なボールである。

Mais que vois-je,	= But what is this I see,
et avec quoi,	and how,
un baton blanc	a white stick
et un cornet acoustique,	and an ear-trumpet,
...	...
voyons un peu ca,	let me look closer at this,
j'y suis peut-être enfin.	it's perhaps me at last.
...	...
un chapeau cloche	a bowler hat
qu'hélas on dirai la dérissioire	which seems to my sorrow
synthese de tous ceux	a sardonic synthesis of all those
qui ne me sont jamais allés et,	that never fitted me and,
a l'autre extrémité,	at the other extremity,
pareillement louches,	similarly suspicious,
des bottines jaunes,	a complete pair of brown boots,
lacerees et baillantes.	lacerated and gaping.
C'est insignes,	These insignia,
si j'ose dire,	if I may so describe them,
avacent de concert,	advance in concert,

⁶³ ボール(balle, ball)のイメージは、ベケットの作品のなかでよく用いられている。しかしこのイメージを取りあげた評者を、寡聞にして知らない。別の機会に扱いたい。

comme reliées par le traditionnel	as though connected
excipient humaine,	by the traditional human excipient,
...	...
je saurais que ce nest pas moi,	I would know it was not me,
je me saurais ici,	I would know I was here,
mendient dans une autre silence,	begging in another dark,
un autre noir,	another silence,
un autre aumone,	for another alm,
celle d'être ou bien de cesser,	that of being or ceasing,
encore mieux,	better still,
sans avoir ete.	before having being.
Et la main vainement vieille	And the hand old in vain,
lacherai l'obole	would drop the mite
et les vieux pieds repartiraient,	and the old feet shuffle on,
vers une mort encore plus vaine	towards an even vainer death
que celle de n'importe qui. (172-4)	than no matter whose. (134-5)

だが見えてくるのはナニだ

どういうふうに

白いツエと

ラッパ形補聴器

...

もっとよく見てみよう

ついにワタシかもしれない。

...

なさないことにワタシに似つかわしくなかったものすべての

こっけいな総合といえる山高帽と

反対のはしには

おなじようにうさんくさく

ボロボロであんぐりクチをあけた茶色のブーツ。

これらのクンショウが

そういつてよければ

いっしょになって進んでいく

まるで伝統的ニンゲンの結合剤でつなげられたように

...

それはワタシではなかったとわかるだろう

ワタシはココにいたのだと

別の暗やみのなかで

別の沈黙のなかで

モノゴイをしながら

別のホドコシをもとめて

存在するというホドコシ

あるいは存在をやめるという

ずっとよいのは

存在をもたないというホドコシ

空しく老いたテは

わずかなホドコシをこぼし

老いたアシはトボトボと

ダレよりも

もっと空しい死にむかい

第1章の解体から見てきたことは、ワタシは「一」ではなく「多」であるということであった。カラダでさえ、テやアシやメやミミなどが、統一体としてでなく、それぞれ勝手にやっている。まさに、仲間たちはボールのように、ゴ

ロゴロ寄り集まっている。あるいは、散らばっている。その基盤にあるのは、11 ページで触れた「器官ノナイカラダ」である。これは、〈イメージをもたないカラダ〉(le corps sans image)⁶⁴である。このカラダの上に、いろんなイメージが直観的に生みだされては、それが意識の対象となるとき切断されていく。生産機械は、このカラダの上に、あの典型的ニンゲン像Xを押しつけようとする。このような生産機械は、知のコエを発する〈国家装置〉(l'appareil d'Etat)⁶⁶ といっている。しかし、カラダはいつもこれに抵抗している。せめてニンゲンらしく山高帽やブーツがむりにはりつけられるが、器官ノナイカラダはすべての押しつけに苦痛を感じる。そして、苦痛のタメ息をもらす⁶⁵。ここで老人のモノゴイは、地下鉄という穴の入口での、コエが押しつけ固定するイメージから自由になるという — 不在になるというホドコシのモノゴイである。

9. 第9章の解体

Si je disais,	= If I said,
Là il y a une issue,	There is a way out there,
quelque part il y a une issue,	there's a way out somewhere,
le reste viendrai. (175)	the rest would come. (136)
もしワタシが	
ソコに出口がある	
ドコカに出口があるといえ	
あとはうまくいくだろう。	

⁶⁴ *Anti-Œdipe*, p. 14

⁶⁵ 「欲望スル機械と器官ノナイカラダのあいだに、明らかなタタカイがおこる。… 音声のコトバに対し、器官ノナイカラダは息や叫びを対抗させる。」(*L'Anti-Œdipe*, p.15)

⁶⁶ *Mille Plateaux*, p. 434

⁶⁷ *Mille Plateaux*, p. 397

「出口」というコトバが、この章で 12 回繰り返えされ、ひとつの<リトルネロ> (ritournelle) ⁶⁷ となっている。同じ直観が反復されるとき、たとえ判断の対象として切断されていっても、反復はひとつの<領土的風景> (paysages territoriaux) を生みだす。それがリトルネロの作用である。

ワタシが脱出しようとしているココは、どんな場所だろうか

si j'y suis,	= if I'm here,
et non plus la,	and no longer there,
allant et venant,	coming and going,
devant le cimetiere,	before the graveyard,
dans la perplexité. (180)	perplexed. (139)

ワタシがココにいるとすれば
もうアソコにいないとすれば
墓地のまえを行ったりきたり
途方にくれて。

どうやら、墓地のまえらしい。「墓地」というコトバが、この章では 5 回繰り返えされる。このコトバも、リトルネロとなっている。

c'est ici ma tombe,	= here are my tomb
ici ma mère,	and mother,
ce soir c'est ici,	it's all here this evening,
je suis mort et vais naissant,	I'm dead and getting born,
sans avoir fini,	without having ended,
sans pouvoir commencer,	helpless to begin,
c'est ma vie.	that's my life.

Comme c'est raisonnable	How reasonable it is
et de quoi donc me plains-je,	and what am I complaining of?
de ne plus faire les cent pas,	Is it because I'm no longer
devant le cimetière,	slinking to and fro
en me disant,	before the graveyard,
Pourvu que cette comédie dure,	saying,
le temps de pouvoir finir,	God grant I'm buriable
serais-ce la mon grief,	before the curtain drops,
c'est possible. (178)	is that my grievance,
	it's possible. (137-8)

ココにワタシのハカと

ハハ

こんやはココにそろってる

ワタシは死んでいて生まれようとしている

おわりもせず

はじめることもできず

これがワタシの人生だ

なんと理にかなったこと

なんの文句があるというのか。

おわりが可能となるまでは⁶⁸

この喜劇がつづくようにと

つぶやきながら

墓地のまえを行ったりきたりしていないのが

不満だというのか

⁶⁸ 英文は、「ワタシが埋葬可能となるまでは、芝居の幕がおりないように」と訳せる。

⁶⁹ *Mille Plateaux.*, p.513

ありうることだ。

ココにはハカとハハの胎のイメージがある。ワタシは死んでハカにいる。同時に、胎のなかから生まれようとしている。ハカにしても胎にしても、地上ではなく地下のイメージである。ワタシは〈地下生活者〉(l'homme du sous-sol)⁶⁹となっている。その場所は、〈穴のある空間〉(un espace troue)⁷⁰である。これは、定住者や遊牧民の場に対し、冶金職人の場である。穴は坑道でつながり、坑道は〈脱出線〉(une ligne de fuite)⁷¹となっている。たいへん興味深いことに、ドゥルーズとガタリは、カインをこの地下の穴と結びつけている。

Le signe de Cain est le signe corporel et affectif du sous-sol, traversant a la fois la terre striée de l'espace sedentaire et le sol nomade de l'espace lissé, sans s'arreter a aucun, le signe vagabond de l'itinérance, le double trahison du metallurgiste en tant qu'il se detourne de l'agriculture et de l'elevage. Faut-il réserver le nom de Caintes ou Quentites, à ces peuples metallurgiques qui hantent le fond de l'Histoire?⁷²

カインのしるしは、身体的情動的な地下のしるしであり、定住空間の線条化された領土と平滑な遊牧地を同時に横断し、どちらに停止することもない。移動する流浪のしるしであり、農業からも牧畜からも顔をそむけているかぎり、冶金職人の二重の窃盗あるいは二重の裏切りである。カイン一族の名を、歴史の底に出没するこれらの冶金職人たちにとっておかなければならないのではなかろうか。

⁷⁰ *ibid.*, p.516. この書を和訳した宇野邦一ほかは、これを「多孔空間」と訳している。

⁷¹ *ibid.*, p.513

⁷² *ibid.*, p.516

⁷³ 『創世記』 4 : 15

あのカインが神から受けたしるし⁷³が、地下のしるしであるということは、たいへんな卓見である。カインにとりつかれ、カインに従おうとするアベルであるワタシの新しい一面が見えてくる。

Mais qu'est-ce que je fait,	= What am I doing now,
j'essaie de me situer (181)	I'm trying to see where I am
	(139)

いまワタシはナニをしている

自分の居場所を確かめようとしている

しかし、ワタシには自分の居場所がわかっていない。ワタシは坑道の、あるいは胎道のどこかで迷っている。ワタシはいつたいどこへ出ていこうというのか。

si seulement je pouvais dire,	= if only I could say,
Là il y a une issue,	There's a way out there,
tout serait dit,	there's a way out somewhere,
ce serait le premier pas,	then all would be said,
du long voyage faisable,	it would be the first step
destination tombe,	on the long travelling road,
a faire dans le silence,	destination tomb,
petit pas irrévocable	to be trod without a word,
après petit pas,	tramp tramp,
dans les longs couloirs d'abord,	little heavy irrevocable steps,
puis un plein air mortier,	down the long tunnels at first,
à travers jours et nuits (177)	through the days and nights (137)

ソコに出口があると

そういえさえしたら

すべてがいわれてしまうだろう

それが最初の一步となろう
沈黙のなかではじまる
ハカ行きの
実行可能なながい旅の一步と
一步いっぽ引きかえせない小さなアユミ
はじめは長いトンネルをぬけ
それからこの世の大気のなかへ
ヨルもヒルもおして
もしワタシのいるところが墓地だとしたら、ハカからハカへながい旅をするとい
うのは、どういうことだろう。『反オイディプス』の助けをかりることとする。

Le schizo sait partir: il a fait du départ quelque chose d'aussisimple que naitre et mourir. Mais en même temps son voyage est étrangement sur place. Il ne parle pas d'un autre monde, il n'est pas d'un autre monde: même se déplacent dans l'espace, c'est un voyage en intensité, autour de la machine désirante qui s'érige et reste ici. Car c'est ici qu'est le désert propagé par notre monde, et aussi la nouvelle terre, et la machine qui ronfle, autour de laquelle les schizos tournent, planetes pour un nouveau soleil. (156)

(大意) カレは出発することを、生まれることや死ぬこととおなじほどカン
タンなことにしてしまった。分裂者は、出発することを知っている。
しかし 同時に、カレの旅は奇妙にもその場での旅である。ほかの世
界のことは話さない。空間を移動しながらも、それは強度の旅であ
り、設置されてココにとどまる欲望機械の回りをまわる旅である。
ココこそが、ワタシタチの世界に広がる砂漠であり、またあたらし
い大地であり、うなりをあげる機械であり、分裂者たちはあたらし

い太陽に対する惑星のようにそのまわりをまわるのであるから。

ここで分裂者の「その場での強度の旅」について考えてみたい。強度はどこで始まるのだろうか。発話行為が、加速の $d+\infty$ と減速の $d-\infty$ から成り立っていることはすでに触れたが、その速度の組み合わせによって3つの発話行為がある。この段階では第1と第2の発話行為を取りあげ、第3については11章の解体のなかでで見ることにする。

1. 「偶然性のユニット」(“les modules de contingence”) ⁷⁴

このユニットは、準拠のセット ($d+\infty$) を感覚の領土 ($d-\infty$) に集中させ、その領土に達する。これは基本図の F—T 間の平滑化である。

2. 「絶対的決定可能性の单子」(“les monades de déterminabilité absolue”) ⁷⁵

偶然の亀裂は、亀裂片となり、〈局面〉(ϕ) をつくりながら移行していく。局面の切断 $d-\infty$ と局面の移行 $d+\infty$ の両極は、局面の重なりの中で $d\pm\infty$ として強度となっていく。局面は移行して、ひとつの共存平面 — 〈カオス界〉(chaosmos) に達するが、決定可能性 $d\pm\infty$ はこの平面のなかで、〈スプレー〉(un aérosol) のように〈浮遊状態〉(l'état de suspension) を保っている。基本図の Φ —U 間で2重の平滑化が行われるが、これはそのひとつである。この状態のなかで、新しい様式が生まれる。

Entièrement séparés et, cependant, ne cessant de s'apparier, ces deux pôles chaotiques et chaosmotiques de la déterminabilité promeuvent de nouvelles modalités de proximité: 1) d'ordre spatial, qui peut être infiniment distancié au sein d'une même circonscription infinitésimale; 2) d'ordre temporel, par lissage

⁷⁴ Cartographies Schizoanalytiques, p.1

⁷⁵ *ibid.*, pp.1-2

detemps futurs et de temps passés infiniment éloignés;
3) d'ordre énergétique, avec les « capitaux d'effets » enserres
dans des « bassins » foncièrement hétérogènes. Du fait des
l'extensité ($d+\infty$ séparée par $d-\infty$) à l'intensité ($d\pm\infty$), la
stochasticité « originelle » se trouve comme creusée et
chargée de nouvelles verstus transversalistes ...⁷⁶

(大意) 完全に分離しながらも一対となって、決定可能性のカオスとカオス
界のふたつの極は、近接の新しい様式を促進させる。1) 空間の次元
の近接。無限小の同じ区域のただなかで無限に隔たっていることを
可能にする。2) 時間の次元の近接。無限に離れた未来の時と過去
の時の平滑化による。3) エネルギーの次元の近接。完全に異質
の要素からなる « 鉢 » のなかに閉じ込められた « 効果の蓄積 » を
伴う。延長 ($d-\infty$ によって分離された $d+\infty$) が強度 ($d\pm\infty$) へ移行
する。

つまり、「その場での強度の旅」は、一個所にいても、無限の空間と無限の時間
のなかを行き来するものである。さらに別の表現を借りると、次のようにもい
える。

... le Moi, c'est le monde tout entier, je suis tout ça! Pas plus
que le cosmos, je ne me reconnais de limite.⁷⁷

「ワタシ」、それは全世界である。ワタシはすべてだ。宇宙と同じよ
うに、ワタシは限界を知らない。

「その場での強度の旅」はカオス界での出来事なので、その無限性はワタシに
とまどいを与える。強度 $d\pm\infty$ のなかで、ワタシはゆれている。墓地のまわり

⁷⁶ *ibid.*, p.192

⁷⁷ *ibid.*, p.265

をまわる旅は、〈穴のある空間〉のなかのアナからアナへの移動である。des-
tination というコトバが使われていて、これは「決定された行き先」を意味す
るが、この旅はどこかに行きついておわりというものではなく、動きがとまら
ないように、「出口、出口」と繰り返しながら欲望しつづける運動そのものが問
題となっている。「出口があるといえ、あとはうまくいくだろう」という思い
は、〈つきまとうリトルネロ〉(ritournelles obsédantes)⁷⁸ となって4回も繰
りかえされる。しかし、「あとはうまくいくだろう」の「あと」とはナニか。ワ
タシには答えられない。

Et les oui et non	= And the yeses and noes
ne veulent rien dire,	mean nothing
dans cette bouche,	in this mouth,
ce sont comme des soupirs	no more than sighs
ponctuant une peine (175)	it sighs in its toil (136)
そしてイエスもノーも	
なんの意味もない	
このクチのなかで	
苦痛からもれる	
タメ息にすぎない	

〈分別〉(raisonne)とのせめぎあいが、機械的に繰り返される⁷⁹。しかし、ここ
に生まれるタメ息のようなイエスとノーは、〈意味作用のないリトルネロ〉(les
ritornelles a-signifiantes)⁸⁰ である。バフーチン (Bakhtin) が〈ウメキはも
はや助けを必要としない〉(la priere n'a plus besoin de secours)⁸¹ という
きのウメキと同じだからである。それは、〈ワケのわからない問い〉(une

⁷⁸ *ibid.*, p.12

⁷⁹ *Novelles et Textes pour Rien*, p.175

⁸⁰ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.309

⁸¹ *ibid.*, p.309

question incomprise, a question not understood) への返答だからである。
しかし、分別とのせめぎあいのなかで、ワタシの思いは機械的ではあっても多
様にゆれている。この多様性は、ナニだろうか。

Quelle variété	= What variety
et en même temps	and at the same time
quelle monotonie,	what monotony,
comme c'est varié	how varied it is
et en même temps comme c'est	and at the same time how,
comme dire,	what's the word,
comme c'est monotone.	how monotonous.
Comme c'est mouvementé	What agitation
et comme c'est en même temps	and at the same time
calme,	what calm,
que de vicissitudes	what vicissitudes
au cœur de quel inchangeant. (176)	within what changelessness.

(137)

なんという多様性
そして同時に
なんという単調さ
なんとさまざま
そして同時になんと
どういったらいいか
なんと単調。
なんと波乱にみち
そして同時に

なんとおだやか

なんという不動のなかに

なんという変化。

この多様性と不動性を検討することをおして、群れの問題をさらに深めてみたい。『千の高原』のなかで、フロイトが接した〈オオカミ男〉(l'Homme aux loups) が取りあげられている。⁸²

... on ne peut pas être un loup, on est toujours huit ou dix loups, six ou sept loups. Non pas six ou sept loups à la fois, à soi tout seul, mais un loup parmi d'autres, avec cinq ou six autres loups. Ce qui est important dans le devenir-loup, c'est la position de messe, et d'abord la position du sujet lui-même par rapport à la meute, par rapport à la multiplicité-loup, la façon dont il y entre ou n'y entre pas, la distance à laquelle il se tient, la manière dont il tient et ne tient pas à la multiplicité. (41)

(大意) ヒトは1匹のオオカミではいられない。ほかのオオカミたちのなかの、5匹か6匹といっしょの、1匹であるということ。オオカミになることで、重要なことは、集団の位置、そしてなによりも群れに対する、オオカミの多様性に対する主体自身の位置、主体がそこに入出入りするしかた、群れに対してとる距離、多様性に対してとる態度である。

第5章で現われたユウレイたちも、第6章のガイコツの大集団も、オオカミと同じ群れである。ほかの仲間たちも、それぞれ群れの領域をもっている。この群れはすべて、器官ノナイカラダの上に存在している。

⁸² オオカミの群れの多様性を、フロイトは理解しなかった。

... le Loup, c'est la meute, c'est-à-dire la multiplicité apprehendée comme telle en un instant, par son rapprochement et son éloignement de zéro — distances chaque fois indécomposables. Le zéro, c'est le corps sans organes de l'Homme aux loups. (44)

オオカミ、それは群れである。つまり、そういうものとして一瞬のうちに把握される多様性、ゼロへの接近と遠ざかりによって、そのたびに分解不可能な距離によって把握される多様性である。ゼロ、それはオオカミ男の器官ノナイカラダである。

多様でありながら単調であり、変化に富みながら不動であるのは、この器官ノナイカラダを基盤としているからである。強度ゼロは $d-\infty$ の状態で、「ゼロへの接近と遠ざかり」は強度 $d\pm\infty$ の問題である。ワタシの旅の強度は、ハカ群の多様性へのかかわりかたによってきまる。

Lignes de fuite ou de déterritorialisation, devenir-loup, devenir-inhumain des intensités déterritorialisées, c'est cela, la multiplicité. Devenir loup, devenir trou, c'est se déterritorialiser, d'après des lignes distinctes enchêvtrées ... Un loup, mais aussi un trou⁸³, ce sont des particules de l'inconscient, rien que des particules, des productions de particules, des trajets de particules, en tant qu'éléments de multiplicités moléculaires. (45)

(大意) 脱出線あるいは脱領土化線、オオカミ生成、脱領土化された強度の非ニンゲン生成、それがつまり多様性である。オオカミになること、アナになること、それははっきりしたもつれた線にしたがって自ら

⁸³ pores (毛穴)や anus (肛門) も、多様体として扱われている。

を脱領土化することである。1匹のオオカミ、ひとつのアナ、それは無意識の粒子、分子的多様性の要素としてのただの粒子、粒子の生産、粒子の旅である。

「非ニンゲン生成」は、〈非人称化〉(dépersonnalisation) とかかわっている。ワタシは個として存在しているのではなく多として、群れとして存在しているということは、第1章からのリトルネロである。この9章でをのがれるため墓地の脱領土化をはかって、ハカからハカへと無意識の粒子の旅は、定住化(領土化)がつづく。作品のなかで、ワタシは名を与えられていないが、どのような多様体とかかわるかによって、ワタシは名をもつことができるようになる。

Or le nom propre ne designe pas un individu: c'est au contraire quand l'individu s'ouvre aux multiplicités qui le traversent de part en part, à l'issue du plus severe exercice de depersonnalisation, qu'il acquiert son véritable nom propre. Le nom proper est l'appréhension instantanée d'une multiplicité. Le nom propre est le sujet d'un pur infinitif compris comme tel dans un champ d'intensité ... L'Homme aux loups, vrais nom propre, intime prénom qui renvoie aux devenirs, infinitifs, intensités d'un individu depersonalise et multiplie. (51)

(大意) 固有名詞は、個人を示すものではない。逆に、個人が自分の真の固有名詞を獲得するのは、自分を貫く多様性にみずからをひらいたときである。固有名詞は、多様性の瞬間的把握である。固有名詞は、ひとつの強度の場でそのようなものとして理解された純粋な不定詞の主語である。オオカミ男、真の固有名詞、生成、不定詞、非人称化され多様化された個人の親密なファーストネーム。

ハカというアナ群とのかかわりのなかで移動をはかるワタシは、アナ男と呼

べる。この章のおわりに、第1章で見た星が現われる。ワタシは活器官ノナイカラダの上にいるが、天空ノカラダともかかわることができるのである。

et y aller,	= and the way to get there,
et passer a travers,	and pass out.
et voir les belles choses	and see the beauties
que porte le ciel,	of the skies
et revoir les etoiles. (181)	and see the stars again. (140)

ソコへ行く

越えて行く

天空の

美しいものを見る

星たちをもういちど見る。

ここで四つの不定詞が使われている。その主語としてのワタシは、ここで星男となっている。アナのなかにいても、思いは限りなく天の上や地獄の底にまで及ぶ。

10. 第10章の解体

Abandonner,	= Give up,
mais c'est tout abandonne,	but it's all given up,
ce n'est pas recent,	it's nothing new,
je ne suis pas recent. (183)	I am nothing new. (141)

捨てること

だがすべては捨てられている

いまにはじまったことじゃない

ワタシはあたらしいモノじゃない。

〈器官機械〉(une machine-organe) はバラバラになって、それぞれ機能している。

la tête est en retard,	= the head has fallen behind,
sur le rest,	all the rest has gone on,
et son anus la bouche,	the head and its anus the mouth
ou bien elle continue toute seule,	or else it has gone on alone,
toute seul ses vieilles erres,	all alone on its old prowls,
chiant sa vieille merde.	slobbering its shit
et la ravalant,	and lapping it back
reprise sur les babines,	off the lips
comme du temps	like in the days
où elle se croyait un morceau.	it fancied itself.
Seulement le cœur n'y est plus,	But the heart's not in it any more,
ni appétit. (183-4)	nor is the appetite what it was.

(141)

ほかのものからおくれてしまった
アタマと
アタマの肛門であるクチは
それでもひとりでつづけてる
むかしのミチをただひとり
ふるいクソをたれながら
クチビルで訂正して
なめながら
クソが自分をひとかたまりと信じていた
むかしのよう。

ただココロはもうそこにはない

むかしのような食欲もない。

クチは、〈食ベル機械、肛門機械、オシャベリ機械、呼吸機械〉(une machine à manger, une machine anale, une machine à parler, une machine à respirer)⁸⁴である。どれかひとつの働きをすることもあれば、同時にいくつかの働きをすることもあり、すべての働きをすることもある。ここでは、肛門機械とオシャベリ機械として、コトバとイメージと生みだしつづける。生みだされたコトバとイメージは、切断され、クソのように捨てられていく。それをクチビルで訂正しようとしても、すでに意欲を失っている。「食欲」がないということは、「欲望」を失っているということである。欲望機械のエネルギーは〈リビドー〉(Libido)とよばれているが⁸⁵、ほかの機械との新しい〈組ミ込み〉(agencement)によって、補給されていくはずである。新しく関わってくるのは、テの機械である。やさしいテはワタシのアタマをうしろからささえ、ひとさしユビでメをおさえ、なかユビでハナをふさぎ、おやユビでミミをとじる。だが、完全ではなく、聞こえる程度に。残りの4本のユビで、アゴとシタを操作する。窒息するほどではなく、しゃべれる程度に。このテの動きは、〈美容師〉(le coiffeur, the hair-dresser)のテのようだと説明されている。しかし、美容師のテは、まるで胎児をひきだす産婆のテのような動きをしている。このテは、フランス語では単に代名詞 *elles* でまとめられているが、英語では‘this first aid’ (この応急手当て)と表現されている。イマは猶予のトキだが、この「応急手当て」がなかったら致命的であつたろうという。テはワタシに連動しているだけでなく、ほかの仲間たちに対しても作動している。テが〈接合部〉(synapse)の働きをしていることはこれまでに見てきたが、ここでもバラバラになった器官機械をなんとかまとめようとしている。そして、まったく〈別の指タチ〉

⁸⁴ *L'Anti-Œdipe*, p. 7

⁸⁵ *ibid.*, p. 345

(autres doigts, a different gang) あるいは<別の触手たち> (autres tentacules, other tentacles) あるいは<別のやさしい吸盤たち> (autres bonnes ventouses, other charitable suckers) も作動している。

Et à côté,	= And perhaps,
peut-être qu'à côté et tout autour	beside me and all around,
on frotte d'autres âmes,	other souls, are being licked
tombées en syncope,	into shape,
âmes malades,	souls swooned away,
d'avoir trop servi,	or sick,
ou de n'avoir pu servir,	with over-use,
mais aptes encore au service,	or because no use could be
ou décidément à jeter,	found for them,
de la mienne pâles semblables.(185)	but still fit for use,
	or only to be cast away,
	pale imitations of mine. (142)

そして横で
たぶん横とまわりで
ほかのタマシイたちが磨きをかけられている
記憶喪失のモノや
病んだタマシイたち
働きすぎたのモノや
働くことはできなかったが
まだ使いものになるモノのや
あるいはただ捨てられるだけのモノや
青白いワタシに似たモノたち。

指たちがタマシイたちに磨きをかけているということは、タマシイにカタチを

あたえようとしているということだろう。英語の ‘lick(ed) into shape’ という表現は、熊が生んだ子をなめてカタチをつくるというイメージからきているといわれるが、やはりカタチづくりに関係している。タマシイがカタチをもつということは、カラダをもつということだろう。しかしいつも、まちがったカラダが与えられる。生まれようとする群れのなかにあるピッタリのカラダが用意されるのを待っている。

car les vivants sont tous servis. = for the living have no room
(186) for a second.(142)

生きたカラダはどれもふさがっているから。

それは、〈埋葬用のカラダ〉 (le bon corps tombal, the true sepulchral body) (186, 142) である。タマシイたちがカラダを与えられるのは、〈死のトキ〉 (l’heure de leur mort, the hour of their death) (185, 142) である。それは空ナルモノが流浪をやめて、大地に帰着するトキである。指タチの応急手当てがなかったら致命的だが、しかし指タチにカラダを与えられてやはり死ぬことになる。だから死をまぬがれる道はないことになる。このようなく二重ばさみ、ダブル・バインド〉 (un double-pince, un double-bind) ⁸⁶ からの脱出線はないのか。

Non, pas d’âmes,	= No, no souls,
pas de corps,	or bodies,
ni de naissance,	or birth,
ni de vie,	or life,
ni de mort,	or death,
il faut continuer	you’ve got to go on
sans rien de tout cela,	without any of that junk,
tout cela est mort de mots,	that’s all dead with words,

tout cela c'est trop de mots (186)

with excess of words (142)

いや、タマシイだの

カラダだの

誕生だの

人生だの

死だのなしだ

そんなガラクタなしで

つづけなければならない

そんなものはみんなコトバで死んでる

コトバの氾濫で

コトバに対する不信とタタカイが続いていく。しかし、アイツとの関係に変化がおきている。ワタシはいつのまにか、アイツと同じことをしている。

il n'aura rien fait,

= he'll have done nothing,

rien que contenuer,

nothing but go on,

à quoi faire,

doing what,

à faire ce qu'il fait, sans arrêt,

doing what he does,

c'est à-dire,

that is to say,

je ne sais pas,

I don't know,

à abandonner,

giving up, that's it,

j'aurai continue,

I'll have gone on

à abandonner,

giving up,

n'ayant rien eu,

having had nothing,

n'étant pas là. (187)

not being there. (143)

アイツはナニもしなかっただろう

つづけることのほかはナニも
 ナニをつづける
 いましていることをすることを
 休むことなく
 つまり
 ええと
 捨て去ることを
 ワタシはつづけてきただろう
 捨て去ることを
 ナニももつことがないということを
 存在することがないということを
 アイツもワタシも、続けている。所有を捨てることを、存在を捨てることを、
 不在になることを。

11. 第11章の解体

Et je suis encore en route,	= And it's still the same
par oui et par non,	old road I'm trudging,
vers un encore à nommer,	up yes and down no,
pour qu'il me laisse la paix,	towards one yet to be named,
pour qu'il ait la paix,	so that he may leave me in peace,
pour qu'il ne soit plus,	be in peace,
pour qu'il n'ait jamais été (189-90)	have never been (144)

それでワタシはまだ途上
 イエスといいながらノーといいながら
 まだ名づけなければならないモノに向かって

アイツがワタシをやすらかにしておいてくれるように

アイツがやすらかになるように

アイツがもういなくなるように

アイツがけっしていなかったかのようにになるように。

コトバが名づけきれないモノであるように、アイツも名づけきれないモノである。ワタシの旅は、その名づけきれないモノに向かっている。それは、お互いに離れるためである。ワタシとアイツの距離は、限りなく近く、限りなく遠い。距離は、強度としてある。

L'ajouter au répertoire,	= Add him to the repertory,
voilà,	there we have it,
et l'exécuter,	and excute him,
comme je m'exécute,	as I execute me,
morceau par morceau mort (190)	one dead bar after another (144)

アイツをレパートリーに加えること

それがいい

そしてアイツを演奏するのだ

ワタシがワタシを演奏するように

死の楽章をつぎつぎと

ワタシのレパートリーは死の楽章である。アイツをレパートリーに加えて、自分を演奏するように、演奏する。excuser と execute は、「演ずる」あるいは「処刑する」ことを意味するコトバでもある。アイツに対するワタシのかかわりは、強度を増している。一日中演奏あるいは演技あるいは処刑が続いていても、なぜかいつも夕方である。

comme se fait-il que	= why is it that,
ce soit toujours le soir,	why is it always evening,

...

C'est le temps
qui n'en peut plus
à l'heure de la sérénade,

...

et le temps dévore toujours
mais pas moi,
voilà,

c'est pour ça que ça reste le soir,
pour que j'aie le meilleur devant moi,
la longue nuit noir où dormir (190)

...

It's time
that can't go on
at the hour of the serenade,

...

but time devours on,
but not me,
there we have it,

that's why it always evening
to let me have the best to
look forward to,
the long black night to
sleep in (145)

どうしていつも

夕方なのか

...

セレナードの時間になると
トキは食べすぎてもう限界

...

トキはいつもむさぼり食う

ワタシをではない

そうなのだ

だからいつも夕方なのだ

ワタシがいちばんいいものがもてるように

眠るためのながく黒いヨルがもてるように

89-90 ページで2種類の発話行為について触れたが、保留にしていた第3の発

話行為についてここで考えてみたい。基本図 $\Phi-U$ 間でおこる 2 重の平滑化のひとつは、局面の切断 $d-\infty$ と局面の移行 $d+\infty$ の両極が、局面の重なりの中で $d \pm \infty$ の強度となって〈カオス界〉に達するものであった。もうひとつの捉え方は、 $F-\Phi$ 間の〈クロノス〉(Chronos) 的時間の流れと $T-U$ 間の〈アイオーン〉(Aion) 的時間の流れが $\Phi-U$ 間で交差した〈接合状態〉(synapse) である。クロノスとアイオーンについて、*Cartographies Schizoanalytiques* を『分裂分析的地図作成法』として和訳した宇波彰・吉沢順の訳注を引用させていただく。

* クロノスは、「ギリシャ神話の神。天空神ウラノスと大地の女神ガイアのあいだに生まれる。子供たちを迫害するウラノスを退治して神々の王となるが、今度は自分の子供たちに王権を奪われるのを恐れ、子供たちを次々と飲み込んでしまう。しかし結局は、子供のひとりゼウスによって退治される。クロノスは時の神であり、ガタリは一次元的で一様に流れる物理的な時間を表すのに《クロノスの》という語を用いる。」(294)

* アイオーンは、「人間の一生や、宇宙の一周期など、存続の特定の期間を表す語だが、転じて永遠を意味するようになり、グノーシス派で重視された。」(294)

このような背景をもつクロノス的な $d+\infty$ とアイオーン的な $d-\infty$ が接合して、 $d \pm \infty$ の強度をもつ〈カオス相互浸透〉(chaosmose)⁸⁷ を生みだす。この接合状態は、〈豊かな瞬間〉(moments féconds)⁸⁸ となる。ワタシがワタシを演奏したり演じたり処刑したり、アイツを演奏したり演じたり処刑したりする夕方は、まさにクロノスが永遠のトキと接合するトキである。この接合のなかで、ワタシとアイツは交換可能になっている。強度が強まれば、ドッチがドッチかわか

⁸⁷ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.1

⁸⁸ *ibid.*, p.215

⁸⁹ 『自覚に於ける直観と反省』、『西田幾多郎全集』6, p.15

らなくなる。これはまさに西田の言う「主客の未だ分かれな、知るものと知られるものと一つ」⁹⁰になった直観によって統一された状態である。ガタリはこの〈豊かな瞬間〉を、〈禅の悟り〉(Satori Zen)⁹⁰の瞬間に喩えている。西田はこの状態を反省して、さらに知的直観による意識への統一へと向かう。ベケットも自分を捜しているという点では、群れというまとまりを求めているといえるが、〈豊かな瞬間〉が考察の対象となるとき、主客はまたバラバラになってしまう。

et quel est ce con	= and who is this clot
qui ne sait où aller,	who doesn't know where to go,
qui ne peut s'arrêter,	who can't stop,
qui se prenait por moi	who takes himself for me
et por qui je me prenais (193)	and for whom I take myself (146)

このマヌケはダレ

どこへ行くかもしれない

とどまることもしない

自分をワタシととりちがえ

ワタシが自分ととりちがえていたアイツはダレ

強度が弱まれば、アイツとワタシははぐれてしまう。

je l'ai perdu	= I have lost him
et il m'a perdu (193)	and he has lost me (146)

ワタシはアイツとはぐれた

アイツもワタシを見失った

カオス浸透性をそのままそのようなもの—「如」として受け入れ「イエス」といえば悟りであろうが、ワタシはふたたびコトバとのたたかいのなかで別のコ

⁹⁰ *Cartographies Schizoanalytiques*, p.217

トバを探している。

un nouveau non,
qui annule tous les autres,
tous les vieux non (195)

新しいノー

ほかのすべてを取り消すための

古いノーをすべて

この「古いノー」とはナニか。

qui m'ont plongé ici,
au fond de ce lieu
qui n'en est pas un,
qui n'est qu'un temps
pour l'heure eternal,
qui s'appelle ici,
et de cet etre
qui s'appelle moi
et n'en est pas un,
et de cette voix impossible
tous les vieux non
qui pendant dans le noir
et se balancent
comme une echelle de fumée (195)

古いノーはワタシをココに突き落とした

このドン底に

ココとよばれていても

場所ではなく

= a new no,
to cancel all the others,
all the old noes (147)

= that buried down here,
deep in this place
which is not one,
which is merely a moment
for the time being eternal,
which is called here,
and in this being
which is called me
and is not one,
and in this impossible voice
all the old noes
dangling in the dark
and swaying
like a ladder of smoke (147)

永遠のトキの一瞬にすぎない

ワタシとよばれていても

ワタシではない

この存在のなかに

このありえないコエのなかに

すべての古いノーは

暗やみのなかにぶらさがり

煙のはしごのように

ゆれている

このような古いノーがワタシを突き落とすドン底 — この下降は、Φ—U 間の
〈カオス界〉(chaosmos) から F—T 間の〈カオス〉(chaos) への逆もどりである。
それに対して、新しいノーは、ナニをするというのか。

un nouveau non,

= a new no,

qui ne se laisse dire qu'une fois,

that none says twice,

qui ouvre sa trappe et me lampe,

whose drop will fall

ombre et babil,

and let me down,

dans une absence moins vaine

shadow and babble,

que d'existence. (195)

to an absence less vain

than inexistence. (147)

新しいノー

それは二度とはいわせない

揚げ床をひらいてワタシを飲み込む

影もオシャベリも

存在しないというほどむなしくはない不在のなかへと。

「存在しない」ということは「非在」だろう。「非在ほどむなしくない不在」と
は、どういう状況だろうか。存在はしているが、イマは留守をしているという

ことだろうか。確かにワタシたちの仲間は、不在になることがよくある。ワタシ自身も自分を見失うことがある。

dommage,	= what a shame,
dommage que je sois nulle part,	what a shame I'm not
comme testicle,	appearing anywhere,
ou comme con (191)	as testicle,
	or as cunt (145)

困った

ワタシがどこにもいないなんてなんということだ

睾丸としても

女陰としても

このような不在は、新しいノーのせいだろうか。そんなノーが起こることを、ワタシは信じているのだろうか。

Oh je sais	= Oh I know
que ça ne se passera comme ça (195)	it won't happen like that
	(147)

ああワタシにはわかっている

コトはそんなふうにかかるものじゃない

新しいノーがオオキナカオをしないように、一度は否定してみるが、二度とは否定しない。この新しいノーが、実はこれから重要な働きをしてくるのである。一時的に行方不明のワタシは、〈マイナス1の平方根のように〉(comme la racine carrée moins un, like the square root of minus one) (190,145) 半回転してもどってくる。

Mais j'y arrive,	= But peekaboo
coucou me revoilà (191)	here I am again (145)

でもワタシはまたココに

イナイイナイバアでもういちど

ワタシはもどってくる。たとえ一時的な不在であっても、不在の後には、存在の跡が気配として思い出のなかに残されているものである。ささやかな思い出のなかで、ワタシたちの群れのひとつの器官としての心臓が、印象的に描かれている。

des sanglots faits mucus

= sobs made mucus

en provenance du cœur (192)

hawked up from the heart (146)

粘液となったススリ泣キ

心臓からせりあがって

このイメージは強烈なコレ性をもっている。あいかわらず直観によるイメージがバラバラに現われてきているが、この不在の後に残される存在の跡という視点が見えてきたことで、散ッタモノたちの統一の場というものが、まだおぼろげではあるが予測されてくる。

12. 第12章の解体

que dire de cet autre,

= what's to be said

qui divague ainsi,

of this latest other,

à coups de moi à pourvoir

with his bubble of homeless mes

et de lui dépourvus,

and untenanted hims,

cet autre sans nombre

this other without number

ni personne (199)

or person (150)

なんといったらいいものか

この別のヤツ

住むところのないワタシたちと

住むもののいないアイツラを使って

タワゴトをいっている

数も人称もないヤツ

この章では、表現と内容の関係が、住居と住人というかたちで、巧妙に取り扱われているように見える。シャベツテいるのは数も人称もない「別のヤツ」である。上の引用文の「住むもののいないアイツラ」は空ッポのカラダを、「住むところのないワタシたち」はカラダのないタマシイを連想させる。さらにカラダは表現するコトバ、タマシイは表現されることを待っているモノ、と置き換えて考えられるのだろうか。アイツのカラダとワタシの関係とそれについてシャベツテいるヤツの働きを、順に見ていきたい。

(1) 月も星もない冬のヨルなのに、なぜか明るい。

qu'est ce qui l'eclaire,	= what makes them light,
cette impossible nuit,	this impossible night,
cet impossible corps,	this impossible body,
c'est en lui mon souvenir,	it's me in him remembering,
de la vraie nuit,	remembering the true night,
c'est mon songe,	dreaming
de la nuit sans lendemain (197)	of the night without morning (149)

ナニが照らしているのか

このありえないヨルを

このありえないカラダを

アイツのなかで思い出しているワタシだ

ほんとうのヨルを思い出している

明けることのないヨルを

夢みながら

ヨルとアイツのカラダに光りをあてているのは、アイツのカラダのなかでヨル

を思い出しヨルを夢みているワタシなのだ。

(2) アイツのなかにいるワタシ、そのワタシにシャベッテいるアイツ。

et qui me parle ainsi,	= and who's this speaking in me,
et qui me nie ainsi,	and who's this disowning me,
comme si j'avais pris sa place,	as though I had taken his place,
comme si j'avais usurpé sa vie (198)	usurped his life (150)

ワタシにこんなふうにシャベッテいるコイツはダレ

ワタシとこんなふうに縁を切ろうとしているコイツはダレ

まるでワタシがアイツの場所を奪い

アイツの人生を横領したみたいに

このシャベッテいるヤツはカラダの持ち主のようである。カラダに住みつこう
としているワタシを、まるで不法進入者であるかのように、追い出そうとする。

(3) ミンナはワタシをアイツのなかにすべりこませようとする。

Y arrivera-t-on,	= Will they succeed
à me glisser en lui,	in slipping me into him,
mémoire et rêve de moi,	the memory and dream of me,
en lui encore vivant (198)	into him still living (150)

ミンナはワタシをうまく

アイツのなかにすべりこませられるだろうか

ワタシの思い出と夢を

まだ生きているアイツのなかに

ワタシの意思とは別に、ミンナはワタシをアイツの生きたカラダのなかにすべ
りこませようとする。ミンナとは、ダレなのか。ワタシを形づくろうとするモ
ノたちだろう。

(4) アイツとワタシの生死はどうかかわっているのだろうか。

n'y suis-je pas déjà,	= aren't I there already,
-----------------------	---------------------------

depuis toujours,	wasn't I always there,
repandu comme un remords,	like a stain of remorse,
et serait-ce là,	is that
ma nuit et ma contumace,	my night and contumacy,
au secret de ce mourant,	in the dungeons of this moribund,
et sa mort mon dernier délai,	and from now till he dies
pour avoir vécu (198-9)	my last chance to have been (1 50)

ワタシはもうソコにいるのではなからうか

いつもいたのではなからうか

悔恨のシミのように

これはワタシのヨルであり判決拒否であろうか

この死にかけたヤツの独房のなかで

アイツの死ぬときがワタシの猶予期間の終り

生をまっとうするための

瀕死のアイツの独房に身をひそめているワタシにとって、アイツの死ぬトキが
自分も死ぬトキである。

(4) カラダは、アイツのカラダだけではない。

et des corps partout,	= and bodies everywhere,
ployés,	bent,
arrêtés,	fixed,
où je dois avoir tout autant	where my prospects must be
de chances,	just as good,
tout aussi peu,	just as poor,
qu'en ce premier venu. (199)	as in this firstcomer. (150)

いたるところにカラダがある

曲がって

固定して

ワタシにはよい機会がある

機会がないのと同じくらい

この最初のヤツに入りこむのに

(6) アイツのなかに宿るということは、やはりアイツと運命を共にするとい
うことだ。

nul n'a jamais attendu,

= none ever waited

pour mourir,

to die

que je vive en lui,

for me to live in him,

pour pouvoir mourir avec lui (199)

so as to die with him (150)

ダレも決して待ってくれたことはない

死ぬのを

アイツといっしょに死ねるよう

アイツのなかで生きるのを

(7) アイツなしで生きられるのだろうか。

Mourons vite,

= Quick quick let us die,

sans lui,

without him,

comme dans la vie,

as we lived,

pendant qu'il en est temps,

before it's too late,

avant de n'avoir pas vécu. (199)

lest we won't have lived. (150)

さあ早く死んでしまおう

アイツなしで

ミンナで生きてきたように

ちょうどいいときに

死にそこなわないうちに。

以上7つの引用から、アイツのカラダと ワタシの関係について3つの仮説をた

ててみたい。

① アイツのカラダは、ワタシの思い出と夢を宿らせるものであるということ。それも、ヨルの思い出、ヨルの夢を。しかも、ホンモノのヨルの。だれも住んでいない家は「空き家」であるが、ヨルの思いが入居することによって、いわば電灯がつけられ、明るさが生じる。

② アイツのカラダに宿ることは、アイツと生死を共にするということ。ここでは、生きているカラダと死にかけているカラダがあり、カラダが死ぬときワタシも死ぬ。むしろ、いっしょに死ぬことを望んでいる。しかし、カラダのほうは拒否反応を示す。カラダが死ぬということは、「空き家」がこわれるということだろうか。前章では、タマシイが死んだカラダを与えられるということは、埋葬の備えがされるということであったが、住人が住居と共にこわされるということは、それがそのままハカになるということだろう。そうであれば、住居であるカラダが住人を拒否するということは、そのような住人によって専有されハカに変えられてしまうことへの抗議と考えられる。

③ アイツなしで生きてきたように、アイツなしで死ぬこともあるということ。一生「宿ナシ」の人生である。それは、住所不定の流浪の人生だろう。どこかで死んで、地表浅く埋葬され、やがて風化し、だれからも記憶されることなく消え去っていく。

実際このような仮説がたてられるものかどうか、検討してみたい。まず、この章の解体のはじめに引用した文に対する、カツツの言及を見ておきたい。

The “untenanted hims,” which present language as a fillable structure or space, and the “homeless mes,” with their vision of language as swarming elements trying to fill the subject, correspond well to two of the modalities of Beckettian narration: that of the voice bloated with words forcing themselves out in its utterance, and that of the voice trying

to fill up and exist in the words that it, unbelieving, utters. What must be noted is the homology between the phantasm of being reamed with words and that of the inability to fill them, assume them. The hinge separating and linking the two is the reversal of the sense of space and substance, or more precisely, the articulation of “outside” and “inside.” But if a missed encounter between language and subjectivity is sketched in both these figures, subjectivity—as a discrete “substance” capable of existing outside of language and deixis—is also rejected. We have no metaphysical attempt to recover the subject’s “truth” beyond the spoken and the speaking tongues.⁹¹

(大意)「住むもののいないアイツラ」は満たすことのできる構造あるいは空間としての言語、「住むところのないワタシたち」は主体を満たそうと群がる要素としての言語。なんとか発話しようとコトバでふくれあがっているコエの様式と、自分の発しているコトバを満たしそのなかに滞在しようとしているコエのふたつ様式である。このふたつを離したり結びつけたりするチョウツガイは、空間と実体の意味、「外」と「内」の接合の逆転である。しかし、もし言語と主体性のあいだの失われた出会いがこれらの比喩表現で表されるとしたら、主体性は—言語や直示の外で存在できる分離した「実体」として—拒否されることになる。

このようなカッツの見解は、筆者のたてた①アイツのカラダはワタシの思い出と夢を宿らせる場である②アイツのカラダはワタシの定住を拒否する③アイツ

⁹¹ *Saying I No More*, p.144

なしの「宿なしの」人生もあるという3つの仮説を全面的に否定してしまう。カッツは、アイツは空ッポの「場」でワタシは定まった場をもたない「モノ」であるという捉え方はしない。アイツもワタシも、〈指示対象に結びつかない直示の標識〉(deictic markers untethered to referents)を表していると考え⁹²。カッツは“him”も“me”も、文法的な視点から捉えている。

“Untenanted him” suggests a word, “him,” that is *empty*, that *holds nothing*. The implication seems obvious: the pronoun *him*,” the third person, when stated, refers to no one. There is no *actual* person referred to — there is no him, only “him.” ... If an “unenanted him” is an *empty* “him,” a “him” not filled out by a referent, what is a “homeless me”? It is a “me” which apparently has no fixed place; no site to anchor it, to house it. This could mean that the “me” is the subject, without a pronoun in which to lodge itself. However, as “me” is a deictic pronoun, a homeless “me” is not a “me” at all. The “me” cannot be thought in terms of homelessness, of enunciatry exile. Its meaning comes entirely and only from its lodging in an actual or hypothetical voice.⁹³

(大意)「住むもののないアイツ」は、空ッポでナニももっていない“him”というコトバを暗示している。しかし、3人称の代名詞“him”は、述べられるとき、ダレも指示しない。指示される「現実の」ヒトはいない — アイツはいなくて、“him”だけがある。もし「住むもののいないアイツ」が「空ッポの」“him”、指示対象に満たされていない“him”であるなら、「住むところのないワタシ」はナニだろう。

⁹² *ibid.*, p.143

⁹³ *ibid.*, p.143

明らかに定まった場、腰を落ちつけて住まう地所のない“me”である。“me”はみずから宿る代名詞のない主体ということになってしまふ。しかし、“me”は直示代名詞なので、宿ナシ“me”は全く“me”などではない。“me”は宿ナシ、発話的に追放サレタモノという視点から考えることはできない。

ベケット自身、存在を文法的な視点から捉えることがある。36 ページでは、ワタシをアイツの文法上の格の存在として捉えていたし、ここではアイツを「数も人称もないヤツ」と表現している。しかし、“me”は直示代名詞なので、宿ナシ“me”は考えられないといえるのだろうか。ワタシは主体群として、群れのひとりとして存在していることはずっと見てきたが、行方不明になることもあった。それに、ワタシが〈主体のなかに宿ること〉(to lodge itself in the subject)を求めている⁹⁴というのは、どういうことだろうか。72 ページで見たように、主体は「機械のかたわらにある残りカス」であった。それが固定された層になることがある⁹⁵。そのときは、主体に宿るどころか、脱主体化(désubjectivation)が課題となってくる。しかし、カツツのいうように、アイツとワタシの関係を空間と実体、外と内という関係で捉えることは、訂正しなければならない。筆者の3つの仮説をどのように訂正するか、ドゥルーズとガタリの論を参考に「ワタシのウチ」という問題から考えてみたい。

Tout agencement est d'abord territorial. La première règle concrète des agencements, c'est de découvrir la territorialité qu'ils enveloppent, car il y en a toujours une: dans leur poubelle ou sur leur banc, les personnages de Beckett se font un territoire. Découvrir les agencements territoriaux de

⁹⁴ *ibid.*, p.144

⁹⁵ *Mille Plateaux*, p.197

quelqu'un, homme ou animal: «chez moi». ⁹⁶

すべての組ミ込ミは、まず領土的である。組ミ込ミの最初の具体的な規則は、それが包む領土を発見することである。領土はいつもあるものだ。ベケットの人物たちは、ゴミ箱のなかにもベンチの上にも領土を作りだす。ヒトでも動物でもいい、ダレカの領土的組ミ込ミを発見すること。つまり、「ワタシのウチ」。

「ある場所に住む」ことを「ある場所を領土化する」と捉え直してみたい。すると、その場所が「ワタシのウチ」となる。ダレカあるいはナニカとの組ミ込ミによって領土化が行われるが、これはふたつの軸によって作用する。ひとつの軸は、内容と表現にかかわるものである。

... c'est que l'expression y devient un *système sémiotique*, un régime de signes, et le contenu y devient un *système pragmatique*, actions et passions. C'est la double articulation visage—main, geste—parole, et la présupposition réciproque entre les deux. Voilà donc la première division de tout agencement: il est à la fois, et inséparablement, d'une part agencement machinique, d'autre part agencement d'énonciation. Dans chaque cas il faut trouver l'un et l'autre: qu'est-ce qu'on fait et qu'est-ce qu'on dit? Et entre les deux, entre le contenu et expression, un nouveau rapport s'établit ... ⁹⁷

(大意) 表現はそこで「記号体系」、記号の体制となり、内容は「語用論的体系」、行動と熱中になる。それはカオーテ、身振り—コトバという2重の分節で、ふたつは相互に前提しあっている。だからここに、組

⁹⁶ *ibid.*, p. 629

⁹⁷ *ibid.*, p. 629

ミ込ミ全体の最初の分割がある。それは同時に分かちがたく、ひとつは機械状の組ミ込ミでもうひとつは発話行為の組ミ込ミである。どんな場合でも、両方を見つけないといけない。つまりナニをしているのか、ナニをいっているのか。このふたつのあいだ、内容と表現のあいだには新しい関係が生まれる。

もうひとつの軸は、脱領土化にかかわるものである。

Mais l'agencement se divise aussi d'après un autre axe. Sa territorialité (contenu et expression compris) n'est qu'un premier aspect, l'autre aspect étant constitué par les *lignes dédeterritorialisation* qui le traversent et l'emportent. Ces lignes sont très diverses: les unes ouvrent l'agencement territorial sur d'autres agencements, et le fait passer dans ces autres ... Les autres travaillent directement la territorialité de l'agencement, et l'ouvrent sur une terre excentrique, immémoriale ou à venir ... D'autres encore ouvrent ces agencements sur des machines abstraites et cosmiques qu'ils effectuent ... Le territoire n'est pas moins inséparable de la dédeterritorialisation que le code ne l'était du décodage. Et c'est suivant ces lignes que l'agencement ne présente plus d'expression ni de contenu distincts, mais seulement des matières non formées, des forces et des fonctions destratifiées.⁹⁸

(大意) しかし、組ミ込ミはまた別の軸によって分かれる。その領土性は(内容と表現も含めて)、第1面にすぎない。別の面が脱領土化の線によって構成され、その線がこれを横断し運んでいく。線はたいへん多様

⁹⁸ *ibid.*, p.630

で、あるものは領土的組ミ込ミをほかの組ミ込ミへと開き、通過させる。ある線は組ミ込ミの領土性に直接働きかけ、それを風変わりな太古のあるいは未来の領土へと開いていく。またある線はこれらの組ミ込ミを、それが作動させる抽象的で宇宙的な機械へとひらいていく。符号が脱符号化と不可分であるように、領土は脱領土化と不可分である。これらの線によって、組ミ込ミはもはや表現と内容を別のものとして示すことはしない。

以上の考察をもとに、先の3つの仮説を次のように訂正することとする。

①「アイツのカラダはワタシの思い出と夢を宿らせる場」という仮説の訂正。場所だけでなく、トキも領土化される。ワタシは、ヨルを領土化し、ヨルを「ワタシのウチ」とする。そして、脱領土化の線は果てしなく過去にも未来にも広がっていく。ヨルは、アイオーンという永遠のトキにもっともかかわりのあるトキである。そこで、思い出と夢が広がっていく。

②「アイツはワタシの定住を拒否する」という仮説の訂正。カラダがワタシを拒否するといふときのカラダは「器官ノナイカラダ」であり、ワタシは固定した層となった主体と考えることができる。

Nous ne cessons d'être stratifiés. Mais qui est ce nous, qui n'est pas moi, puisque le sujet non moins que l'organisme appartient à une strate et en dépend? Nous réponds maintenant: c'est le CsO⁹⁹, c'est lui, la réalité glaciaire sur laquelle vont se former ces alluvions, sedimentations, coagulation, plissements qui composent un organisme — et une signification et sujet. C'est sur lui que pèse et s'exerce le jugement de Dieu, c'est lui qui le subit. C'est en lui les organes, entrent dans ces rapports de composition qu'on

appelle organisme. Le CsO hurle: on m'a fait un organisme!

on m'a plie indûment! on m'a vole mon corps! ¹⁰⁰

ワタシたちは層化されつづけている。しかし、ワタシたちとはダレのことだ。ワタシではない。有機体が層に属し層に頼っているように、主体もそうだからである。いまなら答えられる。ワレワレとは、器官ノナイカラダである。このカラダは氷河のような現実で、有機体 — それに意味づけや主体 — を形成する沖積土、堆積、凝固、褶曲、後退がその上に生じる。神の裁きが下され圧迫するのは、このカラダの上なのだ。裁きを受けるのはこのカラダ。このカラダのなかで、器官は有機体と呼ばれる構成との関係にはいる。器官ノナイカラダは叫ぶ。ヒトはワタシを有機体とした！ヒトはワタシを不当に折りたたんだ！ヒトはワタシからワタシのカラダを盗んだ！

ワタシがワタシたちとしてでなく主体として凝固するとき、器官ノナイカラダからカラダを奪ってしまうことになる。ワタシは神の裁きの手下となる。器官ノナイカラダを生かし、ワタシがその上で生きるためには、ワタシはワタシを脱主体化しなければならない。そういう意味では、ワタシはむしろ空っぽにならないといけない。

③ 「アイツなしの宿ナシの人生もある」という仮説の訂正。ダレともナニとも組ミ込ミができないときは、領土も層もできない。領土をつくっては脱領土化し、層をつくっては脱層化しながら、生きていく。領土も層もないまま生きていくことはできない。

... hors des strates ou sans les strrates, nous n'avons plus ni formes ni substances, ni organisation ni développement, ni contenu ni expression. Nous sommes désarticulés, nous ne

⁹⁹ Corps sans Organes (器官ノナイカラダ)

¹⁰⁰ Mille Plateaux, p.197

semblons même plus soutenus par des rythmes. Comment la
matière non formée, la vie anorganique, le devenir non
humain seraient ils autre chose qu'un pur et simple chaos?¹⁰¹

(大意) 層の外あるいは層なしでは、ワタシタチはもはや形も実体も、組織
も発展も、内容も表現ももたない。ワタシタチは分解し、リズムに
支えられることさえなくなる。形のないモノ、非器質性の生命、非
ニンゲン生成のように、純粹で単純なカオス以外のものでいられる
だろうか。

アイツがカインにしるジョイスにしる、ヨソ者ではなく、ワタシタチのひとり
である。だから、「アイツなしで」は、アイツを層としてその上に生きるのでは
なく、仲間として共に生きるということになるだろう。そうすれば、「住むもの
のないアイツラ」も「住むところのないワタシタチ」も「オシャベリするアイ
ツ」も同じ共存平面に生きる仲間として捉えられる。共存平面という場が、西
田の言う「場」に近づいていくのが次第に明らかになっていく。

しかし、現実の問題として、ワタシも仲間の器官タチも老いていくことを忘
れてはならない。

avouez que vous déchoyez, = confess you're not
vous finirez par montera the man you were,
à bicyclette. (200) you'll end up riding a bicycle. (150)

オマエは老衰すると認めたらどうだ

結局、自転車に乗ることになる。

凝固して定着しないためには、自転車という回転機械に組み込まれて、回転し
続けなければならない。

¹⁰¹ *ibid.*, p.629

13. 第13章の解体

En voilà des ballons,
qu'il filent,
ce sont les derniers. (203)

ほらコエの風船タチが
飛んでいく
これが最後の風船タチだ

英語は埋め忘れたわけではない。ベケットはこの部分を英訳していないのである。この章は終章にふさわしく、去っていくコエの描写で貫かれている。このようなコレ性をもったイメージを、ベケットはどうして英訳からはずしたのだろうか。コエはいろいろ思案にくれて、すんなり消えていくことができないでいるからだろう。コエの3つの思案について見てみたい。まず、去っていく自分に対する憐れみがただよっていることについての自問。

Faut-il s'y arrêter,	= it wonders should it stop
Se demander d'où elle sort,	and wonder
Elle se le demande,	what pity is doing here
et si ce n'est pas un petit espoir	if it's not hope of gleaming,
qui luit, mechamment,	another expression,
parmi les trâitres cendres,	evilly among the imaginary
autre expression (203)	ashes (153)

立ちどまって

この憐れみがどこから出てくるのか思案しなければならないものか
コエは自問している

油断のならない灰のなかで

意地悪く輝いているかすかな望みではなかろうかと

これもひとつの言い回し

コエはひとつの願いをもっている。どんな願いかは、コエの思案を検討したあとで取り扱うことにするが、この憐れみはその願いの実現にまだかすかな望みの火種を残しているのかと、コエは自問を続ける。

Et-ce possible,	= Is it possible,
est-ce là enfin la chose possible,	is that the possible thing
que s'éteigne ce noir rien	at last,
aux ombres impossibles,	the extinction of this black nothing
là enfin la chose faisable,	and its impossible shades,
que l'infaisable finisse	the end of the farce of making,
et se taise le silence,	and the silencing of silence,
elle se le demande (204)	it wonders (154)

可能だろうか

ついに可能なことだろうか

ありえない陰のなかのこの黒い無が終わることが

作りだすという不可能なことが終わり

沈黙がクチをつぐむということが

コエは自問する

コエの仕事は、発話行為だけではない。沈黙も言説性をもっている。沈黙がクチをつぐむということは、言説性をもたなくなるということである。そのようなありえないことが、可能となるトキがくるのかどうか、コエは自問を続ける。

qui donc le silence hurlant est	= whose the screaming silence
plaie de oui et conteau de non,	of no's knife in yes's wound,
elle se le demande. (205)	it wonders. (154)

沈黙の遠吠えが

イエスの傷口でありノーのナイフであるのはダレか

コエは自問する

hurlant という形容詞は「わめいている、どなっている」という意味では、ベケットの英訳 *screaming* でもよいが、筆者は物足りなさを禁じることができない。コトバをもたないドウブツがナニかを訴えるときの「遠吠えしている」という日本語は、状況を表わすのにピッタリのように思われる。遠吠えこそは、まさに自己準拠のコエである。コエにならない訴えが、ノーという否定語をつきつけられるとき、その訴えは傷つく。その傷口をもつ存在はダレなのか、コエ自身ではないのか、コエは自問を続ける。

次に、このコエはナニを願っているのか見てみたい。

<i>elle veut faire une main,</i>	= it wants to make a hand,
<i>enfin,</i>	or if not a hand
<i>quelque chose,</i>	something
<i>quelque part,</i>	somewhere
<i>qui laisse des traces,</i>	that can leave a trace,
<i>de ce qui se passe,</i>	of what is made,
<i>de ce qui se dit,</i>	of what is said,
...	...
<i>seul la voix est,</i>	there nothig but a voice
<i>bruissant et laissant des traces.</i>	murmuring a trace.
<i>Des traces,</i>	A trace,
<i>elle veut laisser de traces,</i>	it wants to leave a trace,
<i>oui,</i>	yes,
<i>comme en laisse l'air</i>	like air leaves
<i>parmi les feuilles,</i>	among the leaves,

parmi l'herbe,	among the grass,
parmi le sable,	among the sand,
c'est avec ça qu'elle veut	it's with that it would
faire une vie (202)	make a life (152)

テをつくりたいのだ

要するに

ナニかを

どこかに

跡が残せるものを

起こっていることの

語られていることの

...

ただコエだけがある

ざわめいて跡を残して

跡

コエは跡を残したいのだ

そうだ

風が跡を残すように

木の葉のなかに

草のなかに

砂のなかに

そういうもので人生をつくりたいのだ

コエが願っていることは、跡を残すことである。風が通りすぎるとき、跡を残すように。跡に残るのは、無ではない。空白である。非在ではなく、不在である。コエが残そうとしたワタシとワタシタチの跡はナニか、それはワタシやワタシタチとコエとの関係にかかわる問題である。

cette voix qui est silence,
ou moi,
comme savoir,
de mon moi de trois lettres,
ce sont là des songes,
des silences qui se valent,
elle et moi,
elle et lui,
moi et lui,
et tous les nôtre,
et tous les leurs,
et tous les leurs (205)

沈黙であるこのコエ

それはワタシ

どうしてわかる

文字通りワタシのワタシ¹²

ミンナ同じ夢

同じ沈黙

コエとワタシ

コエとアイツ

アイツとワタシ

ワタシタチ一行^{いっしゅう}

アイツラ一行

アイツラ一行

= that voice which is silence,
or it's me,
there's no telling,
it's all the same dream,
the same silence,
it and me,
it and him,
him and me,
and all our train,
and all theirs,
and all theirs (154)

¹² 直訳は、「3文字のワタシのワタシ」。英訳にはない。

コエもワタシも ワタシたちもアイツもアイツたちも、結局、同じ夢、同じ沈黙の存在。これが『不在の書』の大団円だ。しかし、仲間たちが一堂に会することはない。散ったままの仲間である。それでも、基本図の U の「世界の散らばり」のドコかを転々とボールのように転がっているはずである。

mais de qui,	= but whose,
songes de qui,	whose dream,
silence de qui,	whose silence,
vieille questions,	old questions,
dernieres questions,	last questions,
de nous qui somme songe et silence,	ours who are dream
mais c'est fini,	and silence,
nous somme finis,	but it's ended,
qui ne fûmes jamais,	we're ended,
il va ner plus rien y avoir là,	who never were,
où il n'y eut jamais rien,	soon there will be nothing
dermières images. (205)	where there was never anything,
	last images. (154)

だがダレの

ダレの夢

ダレの沈黙

古い問い

最後の問い

夢であり沈黙であるワタシたちの

でも終わりだ

ワタシたちは終わりだ

ワタシたちはいたことはなかった

もうナニもなくなるだろう

ナニもなかったところには

最後のイメージ。

ここまできたら、なんの理屈もつけずに、「夢であり沈黙であるワタシたち」が如として感じられるかどうかの問題である。ワタシたちの終わりが、実感できるかどうか。「ワタシたちはいた」と同じ強度で、「ワタシたちはいなかった」がコレ性をもってくるかどうか。「イロンナコトがあった」という思い出が、「ナニもなかった」という不在感と釣り合うかどうか。この最後のイメージが、風の通った跡として残るかどうかである。

le cœur n'y est pas,

= the heart is gone,

la tête n'y est pas,

the head is gone,

personne ne sent rien,

no one feels anything,

ne demande rien,

asks anything,

ne cherche rien,

seeks anything,

ne dit rien,

says anything,

n'entend rien,

hears anything,

c'est le silence.

there's only silence.

Ce n'est pas vrai,

It's not true,

si, c'est vrai,

yes, it's true,

c'est vrai et ce n'est pas vrai,

it's true and it's not true,

c'est le silence

there is silence

et ce n'est pas le silence,

and there is not silence,

il n'y a personne

there is no one

et il y a quelqu'un,

and there is someone,

rien n'empêche rien. (205)

nothing prevents anything.

(154)

心臓はいなくなった
アタマはいなくなった
ダレもナニも感じない
ナニもたずねない
ナニも探さない
ナニもいわない
なにも聞かない
沈黙だけ
それはホントウじゃない
いやホントウだ
ホントウでありホントウでない
沈黙があり沈黙がない
ダレもいなくてダレカがいる
ナニもナニをもさまたげない。

「あれか／これか」の断定的選択でもなく、「あれでもない／これでもない」の全面否定でもなく、「あれでもあり／これでもある」というイエスとノーの共存平面が生まれている。これは基本図のΦ—U 間にあるカオス界での出来事である。

ミンナ散ってしまったあとの虚空。しかし、この虚空にはなんとさまざまな跡が残っていることだろう。沈黙のコエがエコーしていることだろう。跡は気配として、感じられ想像され思い出される。

ワタシと仲間タチが、その後の作品のなかでどのように扱われているか検討するまえに、『不在の書』についてまとめておきたい。

14. 『不在の書』のまとめ

ベケット自身、この作品をどのように捉えていたのだろうか。伝記によると¹³、1974年秋、ロンドンのBBCラジオのスタジオB16で、『不在の書』の録音が行われていた。ある日、予告もなくベケットがスタジオに入ってきて、ディレクターのマーティン・エスリン (Martin Esslin) を驚かせる。エスリンは次のように回想している。

Beckett sat in the back and said to me: "He's still doing it too emphatically, it should be no more than a murmur." So I stopped it and Pat came in and he told him too: "More of a murmur," until finally the engineer said: "If it comes any more of a murmur, there's nothing there." In order to explain it to Pat, Sam said: "You see this is a man who is sitting at an open window on the ground floor of a flat. He is looking out into the street and people are passing a few yards away from him but to him it is as if it were ten thousand miles away, "So it was a description of schizophrenic withdrawal symptoms.

Esslin then told them about one of the BBC producers... Normally one of the sanest of men, one day he was in the bank cashing a check and the next thing he knew, he was sitting in a corner crying. Later he described the experience as being as if the whole world had disappeared and as if he was entirely divorced from reality. "He had ever written a little pamphlet about this when he got cured ... And Sam

¹³ *Damned to Fame*, pp.534-5

became fascinated and said: 'This is fascinating. Can you give me the title of this pamphlet? This is exactly what I was about.'

(大意) ベケットは、「まだ強すぎるよ。ただのツブヤキでなくちゃ」と注文をつけている。「これ以上ツブヤクようにすると、ナニも聞こえませんかよ」という技師に、ベケットは説明した、「これはアパートの一階の通りに面した窓辺にすわっているオトコなんだ。ヒトビトはすぐ近くを行き来しているが、このオトコにとってはまるで1万マイル先のことのように見えるんだ。」つまりこれは、分裂者の禁断症状の描写だったわけだ。

そのときエリソンは、BBC 製作者のひとりのことを話した。ある日銀行にいたとき、気がついてみると隅っこにすわりこんで泣いていた。あとで彼はそのときの経験を、まるで全世界が消えてしまって自分がすっかり現実から切り離されてしまったようだったと説明している。この経験を書いた小冊子にベケットはひじょうに関心をしめして言った、「これはスゴイ話だ。これこそボクが取り組んでいたことなんだ。」

現実からの遊離が問題となっている。現実と自分の間に空白がある。自分が現実のなかでは、不在となっている。これは BBC の製作者が癒されたような癒しの問題ではなく、ベケットにとっては実存の実態として引き受けなければならない状況であった。

次の例もベケットにとって癒しの問題としては解決されないものであることを示している。1934 年から 1935 年にかけて 2 年間、ベケットは療法士ビオン (Bion) から精神分析を受けた。

Some further digging into his past still had to be done,

with Bion's help. But he was clearly convinced that his physical problems were caused in part by his own attitude of superiority and an isolation from others that resulted from a morbid, obsessive immersion in self. It is easy to see how what he called his mother's "savage loving" might have contributed to this attitude. By setting him on a pedestal as a child, she had fostered his sense of superiority, while at the same time smothering him claustrophobically and demanding conformity to her own rigid (and for him unacceptable) standards and values ... Implied is the pessimistic suggestion that, although therapy might well uncover the traumatic events of childhood, it does not necessarily heal wounds that have been inflicted on the psyche.¹⁴

(大意)ビオンの助けをかりて自分の過去の掘り起こし、自分の身体的問題は部分的に病的妄想的な自己没頭からくる自分の優越的態度や他者からの孤立から生じたものであることを、はっきり確信していた。彼が母親の「野蛮な愛情」と呼んだものが、彼にどのように影響したかということは明白である。しかし、療法は子供時代の精神的外傷を残す出来事をあばいてはくれるものの、ココロに受けた傷を必ずしも癒してくれるものではないという悲観的な思いが暗示されている。

このようなフロイト流の精神分析は、ドゥルーズやガタリが還元的な方法として退けてきたものである。現実との距離感を優越感のせいになしたり、母親の押

¹⁴ *Damned to Fame*, pp.174-5

しつけを権力のコエと重ねあわせたり、分析中にもったく胎にいるという異様な思い出> (some extraordinary memories of being in the womb)¹⁵を、直接作品中の<ハハのなかにいる>という表現と結びつけることは、筆者も避けたい。チチやハハの思い出は、そのまま如実なコレ性をもつものとして受け入れたい。還元的に、つまり原因結果的に作品の解釈に利用すると、ベケットの世界の創造性は色あせてしまうからである。

分裂は個人的な問題であるだけでなく、時代の問題である。資本主義が、専制的な制度からの脱出として生まれたとすると、既存の様式の破壊と革新というその精神は必然的に分裂へと向かう。自己分裂を避けるために、資本主義はあたらしい統一の様式を生みだす。個人は意識的な存在である限り、意識する自己と意識される自己とさらにその関係を意識する自己と限りなく分裂していく。そのうえ、資本主義の押しつける枠組みからの自己疎外がある。このような背景のなかで、ベケットは作家としてロゴスの問題に直面しなければならない。ロゴスもひとつの権威として、立ちはだかる。ベケットの直観する原体験は、ロゴスの枠では捉えきれないものである。しかも、書きコトバというロゴスを用いて、分裂した自己のさまざまなイメージを定着させるという矛盾のなかで、不可能なたたかいをつづけなければならなかった。その道程は、矛盾したもの全体を内に含む「場」の論に行きついた西田幾多郎の歩みと類似したところがある。それは「仲間」の論といってもいい。さまざまに分裂した自己を、共存平面という場で捉えることである。それは散ッタモノタチの不在の痕跡の場である。コトバそのものも不在となるようにするたたかいは、どう進行していくのか、さらに考察していくこととする。

¹⁵ *ibid.*, p.171

II. 『仲間』、解体

ベケットは『不在の書』の英訳を1967年に終え、戯曲、ラジオドラマ、テレビドラマ、映画のシナリオを次つぎと発表した。10年後に英語で *Company*¹ を書きはじめ、書きながら同時に仏訳 *Compagnie*² をすすめていった。英語版は1979年、仏語版は1980年に出版された。宇野邦一がこれを和訳し、1990年、『伴侶』³ として出版された。日本では『伴侶』として^{かいしき}膾炙しているが、筆者はこれを『仲間』と訳したい。「伴侶」は異性も含むコトバであるし、「連れ」では旅を連想させるし、前章でワタシタチを仲間として捉えてきたその延長として、『仲間』としたい。そうすることによって、『不在の書』で扱われた仲間の問題が、10年後の作品にどのように継続されているか、あるいは変更されているか検討していきたい。59の断章からできているが、番号がうたれているわけではなく、1行空きで区切りがされているだけである。今回は断章ごとにではなく、「創りだされる仲間たち」、「仲間たちの仲間度」の2点から全体をテーマごとに解体していくこととする。

1. 創りだされる仲間たち

A voice comes

to one in the dark.

Imagine.

= Une voix parvient

à quelqu'un dans le noir.

Imaginer.

¹ *Company*, John Calder. 1980

² *Compagnie*, Minuit. 1980

³ 宇野邦一訳『伴侶』、書肆山田。1990

To one Une voix parvient
on his back in the dark. à quelqu'un sur le dos dans le noir.

• • •

Only a small part of what is said Seule peut se vérifier
can be verified. une infime partie de ce qui se dit.

As for example	Comme par exemple
when he hears,	lorsqu'il entend,
ou are on your back in the dark.	Tu es sur le dos dans le noir.
Then he must acknowledge	La il ne peut qu'admettre
the truth of what is said.	ce qui se dit.

• • •

And in another dark	Et dans autre noir
or in the same	ou dans le même
another	un autre.
devising it all for company.	Imaginant le tout pour compagnie.
Quick leave him. (7-8)	Vite motus. (7-8)

ひとつのこゑが
闇のなかのダレカにとどく。
想像すること。

ダレカに

闇のなかであお向きになっているダレカに。

いわれることのわずかしかな
確認できない。

たとえば

聞こえてくるとき
オマエは闇のなかであお向きになっていると。
そのときアイツは認めるしかない
いわれることを。
...
そして別の闇に
あるいは同じ闇に
別のヤツ
すべてを仲間と想像しながら。
シー。⁴

これは作品の冒頭部である。コエがいる。コエがオマエと2人称で話しかけるダレカがいる。ダレカはコエに対しては2人称の闇キテであるが、語りのなかでは3人称で語られる。コエが押しつける思い出を、アイツは「ワタシ」の思い出として引き受けることがある。あとで闇も仲間だとわかってくる。別の闇もある。それに、「すべてを仲間と想像している」別のヤツがいる。ヤツは3人称で語られる。ココで、カレラは「ダレの仲間たちか」ということが問題となる。『不在の書』では、このような問題がおこることはなかった。ミンナ対等だったからである。仲間のダレカがオオキナカオをしたりモデルになろうとすることを拒むことだけが問題であった。しかし『仲間』では、仲間はミンナ創りだされていくモノであるから、ダレが創りだすのかということが問題となってくるのである。ダレが仲間たちを創りだすのか途中では混乱することが多いが、最後になってははっきりしてくる。

⁴ 前章と同じように、テキストの配列を詩のように並べかえた。今度は英語のほうが先に書かれたので、引用は英語・フランス語の順に並列し、私訳の日本語をつけ加えておく。引用文の途中で1行空きがあるのは、断章の区切りのためである。以下同様。

But with your face upturned	= Mais le visage renversé
for good labour in vain	pour de bon peineras en vain
at your fable.	sur la fable.
Till finally you hear	Jusqu'à ce qu'enfin tu entendes
how words are coming to an end.	comme quoi les mots touchent
With every insane word .	à leur fin.
a little nearer to the last.	Avec chaque mot insane
And how the fable too.	plus près du dernier.
The fable of one with you	Et avec eux la fable.
in the dark.	La fable d'un autre avec toi
The fable of one	dans le noir.
fabling of one with you	La fable de toi
in the dark.	fabulant d'un autre avec toi
And how better in the end	dans le noir.
labour lost	Et comme quoi vaut
and silence.	tout compte fait
And you	peine perdue
as you always were.	et toi tel que toujours.

Alone. (88-9)

だが動転したカオをして
空しく取り組むことだろう
作り話に。

ついにコトバが終わろうとしているのが聞こえるまでは。
つまらぬコトバを重ねるたびに
終わりに近づく。

Seul. (87-8)

それといっしょに作り話も。

オマエといっしょにいるヤツの作り話

闇のなかで。

オマエといっしょにいるヤツの作り話をしているアイツの作り話

闇のなかで。

それで結局ましというもの

ムダ骨おって

沈黙して。

そしてオマエは

いつものとおり。

ひとり。

最後に残るのはアイツひとり。アイツがミンナを創りだし、聞キテとしての自分をも創りだすモノであるから、創りだされたモノはアイツの仲間ということになる。

Deviser of the voice

= Inventeur de la voix

of its hearer

et de l'entendeur

and of himself.

et de soi-même.

Deviser of himself

Inventeur de soi-même

for company.

pour se tenir compagnie.

Leave it at that.

En rester là.

He speaks of himself

Il parle de soi,

as of another.

comme d'un autre.

Himself he devises too

Il s' imagine soi-même aussi,

for company.

pour se tenir compagnie.

Leave it at that.

En rester là.

Confusion too is company La confusion elle aussi tien
up to a point. (34) compagnie

Jusqu'à un certain point. (33)

コエを創りだすモノ

聞キテを創りだすモノ

自分を創りだすモノ

自分自身を

仲間として創りだすモノ。

ほっておけ。

アイツは自分を

別のヤツのことみたいに話す。

自分のことを話しながらいう

アイツは自分のことを

別のヤツのことみたいに話すと。

アイツはまた自分を仲間として創りだしていると。

ほっておけ。

混乱もまた仲間

ある程度までは。

『不在の書』では、コエは「オマエタチはココにとどまることはできない」と命令する権威のコエであった。ココでは創られたモノとして、聞キテであるアイツにかかわることが仕事で、ふたつの特徴がある。ひとつは、同じ過去をアイツに語るそのクドサである。

As if willing him by this dint = Comme pour l'amener à tout force
to make it his. à la faire sien.

To confess,

A avouer,

Yes I remember.

Oui je me rappelle.

Perhaps even to have a voice.	Voire peut-être à avoir une voix.
To murmur,	A murmurer,
Yes I remember.	Oui je me rappelle.
What an addition to company	Quelle contribution
that would be!	à la compagnie
A voice in the first person	ce serait.
singular. (20-1)	Une voix à la première personne
	du singulier (20)

まるで無理やり

アイツに過去を自分のものとさせるように。

ああワタシは覚えているよと

白状させるように。

そのうえコエまでもたせるように。

つぶやかせるように

ああワタシは覚えているよと。

なんと仲間の役にたつことやら。

1 人称単数のコエ。

コエがアイツに押しつける過去は、誕生のときのこと、幼年時代、少年時代、青年時代、老年時代のことと一生にわたっている。これらの思い出が仲間に大きく役立っている。次の項で扱うが、仲間度が高いことになる。『不在の書』では、思い出は原素材として登場してきて、押しつけられたものではなかったが、ココでは作られたコエを媒介として持ち込まれる。

コエのもうひとつの特徴は、その単調さである。このコエは改善されなければならない。どのようにかは、仲間度を高める問題として、次項で扱うこととする。

コエの聞キテであるアイツも自らが創りだしたモノである。その特徴は、動

キノナサである。どのように改善されるかは、これも次項の問題であるが、その方法をひとつだけみておきたい。仲間がどのように創りだされていくかといういい見本である。

Might not the hearer	= N'y aurait-il pas moyen
be improved?	de bonifier l'entendeur?
Made more companionable	De le rendre d'un commerce
if not downright human.	plus agreable
Mentally perhaps there is room	sinon franchement humain.
for enlivenment.	Côté mental puet-être place
...	peu un peu plus d'animation.
But physically?	...
Must he lie inert to the end?	Mait côté physique.
Only the eyelids stirring	Lui faut-il gesir inerte
on and off	jusqu'au bout?
since technically they must.	Seules les paupieres
...	qui se remuent de temps en temps
Might he not cross his feet?	puisque techniquement il le faut.
...	...
A hand.	Ne pourrait-il pas croiser
Some movement of the hands?	les pieds?
A clenching	...
and unclenching.	Un mouvement quelconque d'une main?
Difficult to justify	Une crispation.
Or raised to brush away a fly.	Une déscrispation.
But there are no flies.	Difficilement deféndable.
Then why not let there be?	Ou levée pour chasser une mouche.

The temptation is great.	Mais il n'y a pas de mouches.
Let there be a fly	Alors qu'il y en ait.
For him to brush away	Pourquoi pas?
A live fly mistaking him	La tentation est forte.
for dead	Qu'il y ait une mouche.
Made aware of its error	Une mouche vivante le tenant
and renewing it incontinent.	à tort pour mort.
What an addition to company	Instruit de son erreur
that would be? (37-8)	et la renouvelant aussitôt.
	Quelle contribution à la compagnie
	ce serait. (36-7)

聞キテはもっとよくなるものか

もっと仲間らしく

実にニンゲンらしくとはいわないまでも。

精神的な面はたぶん

活発になる余地はある。

...

だが身体的な面はどうだろう。

終わりまでじっとしていなければならないものか。

マブタだけは動いてる

トキドキ

機能上動くことになっているので。

...

アシは組めないものか。

...

なんらかのテの動きはないものか。

握りしめたり

ゆるめたり。

うまくいきそうもない。

あるいはハエを追い払うために立ち上がるのは。

だがハエがいない。

じゃあハエを存在させよう。

その気になってくる。

ハエを一匹存在させる。

アイツが追い払えるように。

一匹のハエ

アイツを死んでると思いこむ。

まちがいに気づいても

どうしようもなく

またまちがう。

なんと仲間の役にたつことやら。

創られた不活発なアイツの仲間度を高めるために創られる一匹のハエも、高い仲間度をもってくる。仲間は必要に応じて創られていくのがわかる。

2. 仲間タチの仲間度

The test is company.	= En tenant compte de la teneur
Which of the two darks	en compagnie.
is the better company.	Lequelle des deux noirs
Which of all imaginable positions	est plus apte à tenir
has the most to offer	compagnie?
in the way of company.(35)	Laquelle postures imaginables

à le plus a offrir
en matiere de compagnie? (34-5)

仲間度を考慮しながら。⁵
ふたつの闇のどちらが
仲間に適しているだろう。
考えられるかぎりの姿勢のうち
どれがいちばん役に立つだろう
仲間という点で。

この仲間度を考慮しているのは、創りだすものであるアイツである。アイツは聞キテとして闇のなかにいる。アイツは闇のなかでほとんど動くこともしないが、創りだすモノとして少しでも仲間度が高まるようにと自分の姿勢をあれこれ検討している。そして、どれだけ仲間に役立つかという視点で、仲間タチを創りだし、さらに改善していく。

もう一度コエを、仲間度から見直してみることとする。コエの特徴は、クドサと単調サであることは見てきたが、コエはどのように改善されていくのだろうか。コエの改善はコエひとりの問題ではなく、聞キテであるアイツの改善と切り離しては考えられない。アイツの消極的な精神を活発にしていくためには、コエの協力が必要である。

Yet a certain activity of mind	= Il faut cependant
however slight	comme contribution à la
is a necessary complement	compagnie
of company.	une certain activité d'esprit
...	si faible soit-elle.

⁵ 英語では、「吟味するのが仲間」と訳せるし、フランス語の直訳は「仲間性の濃度（あるいは仲間性含有量）を考慮しながら」となる。

The voice alone is company ...
 but not enough. tel que La voix à elle seule tien compagnie
 Its effect on the hearer mais insuffisamment.
 is a necessary complement. (11) Son effect sur l'entendeur
 est un complément nécessaire. (10-1)

しかしなんらかのアタマの働きが
 どんなにわずかであっても
 仲間にとって
 必要な補足。

...
 コエだけが仲間だが
 それだけでは不十分
 聞キテに対する効果が
 必要な補足。

アイツの仲間度を高めるために、聞キテに対するコエの効果が求められている。

How far more companionable = Combien plus apte à tenir
 such an organ compagnie
 than it initially in haste imagined. serait un tel organe
 How far more likely que celui au départ
 to achieve its object. (45-6) hâtivement imaginé.
 Combien mieux en mesure
 d'atteindre son but. (46-7)

このような器官は
 ずっと仲間らしくなるもんだ
 はじめに急いで想像されたものよりは。
 目的を達するのにずっとふさわしく。

その目的の達成度が仲間度となる。ヤツはまるで、生産力を高めるために社員を改善していく工場主のような役割を演じている。だが、社長室に居座っているわけではなく、闇のなかで生活し、横たわったり這いまわったりしている。工場主というより、創造主である神といったほうがいいかもしれない。あるいは、自らも創られたモノとしては、神の子としてのイエスといってもいいかもしれない。被造物といっしょに生きているイメージとして捉えることができる。

コエは改善されているようだが、聞キテとしてのアイツの精神的・知的・身体的改善は進むのだろうか。その変化をたどってみたい。

Let the hearer be named H.	= Que l'entendeur s'appelle H.
Aspirate.	Aspiré.
...	...
So inapt to feel.	Si peu apte a sentir.
Asking nothing better	N'aspirant dans la mesure
in so far as he can ask anything	où il peut aspirer
than to feel nothing.	qu'à ne rien sentir.
Is it desirable?	Est-ce souhaitable?
No.	Non.
Would he gain thereby	gagnerait-il
in companionability?	en tant que compagnie?
No.	Non.
Then let him not be named H.	Alors qu'il ne s'appelle plus H.
Let him be again as he was.	Qu'il soit à nouveau
The hearer .	tel que toujours.
Unnamable.	Sans nom.
You. (42-3)	Tu. (42-3)

聞キテを H という名にしてみよう。

氣息音。

...

感じることは全くむいていない。

ナニか願えるとして

ナニも感じないことしか願わないのだから。

望ましいことだろうか。

イヤ。

仲間という点でアイツは得をすることがあるだろうか。

イヤ。

じゃ H という名はやめよう。

またもやいつもどおり。

名なし。

ただのオマエ。

そもそも、アイツには自らの改善の願いなどないのではないか。それは仲間の
ためにならないし、アイツ自身の得にもならない。仲間タチを創りだしていく
アイツの想像力は、聞キテの改善のために空マワリしているのではなかろうか。

Wearied	= Vidé
by such stretch of imagining	par un telle debauché d'imagination
he ceases	il cesse
and all ceases.	et tout cesse.
Till feeling the need	Justqu'au moment
for company again	où repris par le besoin de compagnie
he tells himself	il s'engage
to call the hearer M at least.	a appeler entendeur M tout
For readier reference.	au moins.
Himself some other character.	Pour faciliter le repérage.

W. (59)

Soi-même d'un autre caractère.

W. (58)

このような想像力の濫用で空っぽになり

アイツは停止

ミンナ停止。

仲間が必要となり

自分にいいきかせて

とにかく聞キテを M と呼ぶことにするまで。

指示を容易にするため。

自分自身は別の大文字。

W。

聞キテを H から M に呼びかえて、それでコトはうまくいくのだろうか。

His unnamability.

= Son innommabilité.

Even M must go.

Même M doit sauter.

So W reminds himself

Ainsi W se rememore

of his creature

sa créature

as so far created.

telle que créée jusqu'ici.

W?

W?

But W too is creature.

Mais lui aussi est créature.

Figment.

Chimère.

...

...

Devised deviser

Imaginant imaginé

devising it all for company.

imaginant le tout

n the figment dark

pour se tenir compagnie.

as his figments. (63-4)

Dans le même noir chimérique

que ses autres chimères (62-3)

アイツの名づけにくさ。

M だって消えなければならない。

こうして W は思い出す

自分が創りだしたものを

これまで創りだされたモノとして。

W は？

だがアイツもまた創りだされたモノ。

幻想。

創りだされた創りだすモノ

スベテを仲間として創りだしながら。

ほかの幻想と同じような

幻想的な闇のなかで。

スベテが幻想のなかで創りだされた幻想ではあるが、それにしてもアイツの仲間度が高まらないのは、どうしたことだろう。

Would it be reasonable	= Est-ce raisonnable
to imagine the hearer	d'imaginer l'entendeur
as mentally quiet inert?	en état d'inertie mentale parfaite?
Except when he hears.	Sauf aux moments où il entend.
That is when the voice sounds.	C'est-à-dire aux moments
For what if not it and his breath	où la voix se fait entendre.
is there for him to hear?	Car qu'est-ce qui lui
Aha!	est donné d'entendre à part
The crawl.	la voix et son souffle à lui?
Does he hear the crawl?	Aha!
The fall?	La reptation.
What an addition to company	Entend-il la reptation?

were he

La chute?

but to hear the crawl. (69-70)

Quelle contribution à la compagnie

ce serai

s'il pouvait entendre la reptation.(69)

理にかなったことだろうか

聞キテが知的にまったく

停止してしまったと想像することは。

聞いているときをのぞいて。

つまりコエが聞こえているときをのぞいて。

コエと自分の吐息しか聞こえるものはないのだから。

ああ。

這い歩く音か。

アイツに這い歩く音が聞こえるのか。

倒れる音か。

なんと役立つことだろう

仲間にとって

這い歩きの音が聞こえたら。

アイツに活気をあたえるモノはないのか。音がダメなら、〈視覚〉(sight, la vue)

は。それでもダメなら、〈味覚〉(taste, le gout) は。それでもダメなら...

Smell?

= L'odorat?

His own?

Son odeur à lui?

Long since dulled.

Depuis longtemps assumée.

And a barrier to others

Et barrage à d'autres

if any.

s'il y en a.

Such as might have once emitted

Par exemple à un moment

a rat long dead.

donne d'un rat depuis longtemps mort.

Or some other carrion.	Ou de quelque autre charogne.
Yet to be imagined.	Encore à imaginer.
Unless the crawler smell.	A moins que le rampant ne sente.
Aha!	Aha!
The crawling creator.	Le crateur rampant.
Might the crawling creator	Serait-il raisonnable d'imaginer
be reasonably imagined to smell?	que tout en rampant
Even foul than his creature.	le créateur sente?
...	Encore plus fort que sa créature.
To wonder what in the world	...
can be making that alien smell.	A s'étonner de
Where in the world	cette odeur étrangère.
those wafts of villanious smell.	De qui ou de quoi mon Dieu
How much more companionable	ces bouffées nauéeabondes?
could his creator but smell.	Comme il gagnerait
Could he but smell his creator	comme compagnon
Some sixth sense? (72)	si seulement son créateur
	pouvait sentir.
	Si seulement il pouvait
	sentir son créateur.

Un sixième sense quelconque? (71-2)

嗅覚か。

自分のニオイか。

ずっとおなじみ。

ほかのニオイはしめだし

もしあるとして。

たとえばずっとまえに死んだ

ネズミのニオイ。

あるいはなにかの腐肉のニオイ。

もっと想像しなくては。

這いまわるモノが臭わないとしたら。

ああ。

這いまわる創りだすモノ。

這いまわる創りだすモノが臭うと想像することは

理にかなったことだろうか。

創りだされたモノよりも強烈に臭うとは。

...

この異様なニオイは

いったいナニだろうと驚いてしまう。

いったいどこからくるのだろう

このムカムカするニオイは。

なんと仲間に役立つことか

アイツを創りだしたモノが臭うとしたら。

アイツのニオイがかけるとしたら。

第六感か。

創りだすモノが創りだされるモノと同じ共存平面におり、創りだされるモノよりも強烈な悪臭をはなつ。ナニか臭ってくる。第六感で。

God is love.

= Dieu est amour.

Yes or no?

Oui ou non?

No. (73)

Non. (72)

神は愛なり。

イエスかノーか。

ノー。

ベケットには、全面肯定のイエスは書けないだろう。しかし、このノーは全面否定の古いノーではなく、イエスかノーかという問いのたて方を否定する新しいノーと受けとめることができる。聞キテの誕生を神の子イエスの死とのかかわりから見ると、このような捉え方が可能となってくる。ベケットの誕生は1906年4月13日とされているが、伝記には次のように説明されている。

His birth certificate records the date as the thirteenth of May, not April. And his father registered the event on June 14 — a month later, it is argued, than he would, or at least should, have done, if the birth had been in April. So it has been claimed that Beckett deliberately created the myth that he was born on Friday the thirteenth — and a good Friday at that: a fitting date for someone so conscious of the Easter story and so aware of life as a painful Passion.⁶

(大意) 誕生証明書を見ると、4月ではなく5月13日と記録されている。

父親は6月14日に登録している。ベケットは意図的に4月13日誕生という神話を創りだしたのだといわれている。この日は、聖金曜日で、復活祭の物語を特に意識し人生を苦痛に満ちた受難として特に意識していたモノにふさわしい日付けであった。

聖金曜日はイエスが十字架にかけられて死んだ日であり、3日後の日曜日が復活祭として記念されている。ベケットが自分の誕生神話を作品に使うということは、ベケット流の信仰告白である。コエは聞キテに向かい、4度にわたってその誕生の日を語っている。

①

⁶ *Damned to Fame*, p.23

You first saw the light	= Tu vis le jour
at Easter	le jour de Pâques
and now. (19-20)	et maintenant. (19)
オマエは日の目を見た	
復活祭の日に	
そしてイマ。	

②

You first saw the light of day	= Tu vis le jour
the day Christ died	le jour où Sauveur mourut
and now. (20)	et maintenant. (19)
オマエは日の目を見た	
キリストが死んだ日に	
そしてイマ。	

③

You were born	= Tu naquis
on an Easter Friday ⁷	un vendredi saint
after a long labour. (46-7)	au terme d'un long travail. (47)
オマエは生まれた	
聖金曜日に	
難産のすえ。	

④

You first saw the light	= Tu vis le jour
and cried at the close of the day	au soir du join
when in darkness Christ	où sous le ciel noir

⁷ “on Good Friday” でなければならない。フランス語では、「聖金曜日」となっているので、これは著者の誤解である。復活祭は日曜日なのだから、語自体も撞着している。

at the ninth hour

à la neuvième heure

cried and died. (77)

le Christ cria et mourut. (76)

オマエは日の暮れに

日の目を見て産声をあげた

闇のなかで⁸

午後3時⁹

キリストが叫んで死んだ日に。

①の復活祭の日の誕生と②③④の聖金曜日の誕生とは、明らかに矛盾している。

141 ページで、「混乱もまた仲間」という表現がでてきたが、これは意図的な混乱だろうか。仲間度を高めるために混乱を気晴らしに使用するほどの裁量が、コエにあるのだろうか。コエを創りだすのはアイツだから、それはアイツの裁量ということになる。アイツはさらに、自分である聞キテの改善を続ける。

The need eyes closed

= Le besoin les yeux fermés

the better to hear

pour mieux entendre

to see that glimmer shed.

de voir lueur répandue.

Or with adjunction

Ou avec adjonction

of some human weakness

de quelque humaine faiblesse

to improve the hearer.

d'améliorer l'entendeur.

For example

Telle une démangeaison

an itch beyond reach of the hand

par exemple hors de portée

or better still within

de sa main

while the hand immovable.

ou encore mieux à portée

An unscratchable itch.

de sa main inerte.

⁸ 四つの福音書に共通して、イエスが十字架にかけられた日の昼の12時からイエスが息をひきとる3時まで全地が暗くなったことが書かれている。

⁹ 宇野訳では「9時」になっているが、明らかに誤訳である。

What an addition to company
that would be. (77-8)

Une démangeaison ingratable.
Quelle contribution
à la compagnie ce serait. (76-7)

もっとよく聞こえるように

メをとじて

発散するかすかなヒカ리를思い描くことが必要。

あるいはなにか

ニンゲンの弱さを加え

聞キテを改善することが必要。

たとえば

テの届かないカユミ

あるいはもっといいのは

テの届く範囲のカユミだが

テが動かない。

かけないカユミ。

なんと役立つことだろう

仲間にとって。

かけないカユミが、聞キテに背負わされる。十字架のように。仲間度を高めることは、楽になることではなく、むしろニンゲンの弱さを加えられ、どうしようもない弱点をもつことなのである。このようないわば十字架を背負って、這いまわり、転び、また這いまわる姿は、イエスの十字架の道行きを思わせる。だがイマ、聞キテはあお向きに横たわっている。聖金曜日、イエスが死んだ日の夕方、ヨセフというヒトが、イエスの遺体を引きとり、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って作った墓のなかに収めた¹⁰。イマの聞キテの姿勢には、岩のな

¹⁰ 『マタイによる福音書』 27:59-60、 『マルコによる福音書』 15:46、 『ルカによる福音書』 23:53、 『ヨハネによる福音書』 19:40-1.

かに葬られたイエスの姿が重なり、イエスの死の疑似体験が読みとれる。

If only with a sheet.	= Ne fût-ce que d'un linge.
Naked.	Nu.
Ghostly in the voice's glimmer	Spectrale à la leur du la voix
that bonewhite flesh for company.	cette chair d'une blancheur
Head resting	d'os comme compagnie.
mainly on occipal bump aforesaid.	La tête resposdant
Legs joined at attention.	pour l'essential sur la bosse
Feet splayed ninety degrees.	occipitale précitée.
Hands invisibly manacled	Le pieds ecartes a angle droit.
crossed on pubis.(80)	Les jambes jointes au garde-à-vous
	Les mains aux menottes invisible
	jointes sur le pubis. (79)

一枚の布切れでだけでも。

ハダカで。

コエのかすかなヒカリのなかでユウレイのように

この骨のように白い肉体を仲間として。

アタマはだいたい

つきでた後頭部のコブを下にして。

アシは気をつけの姿勢でくつついて。

アシの先は直角にひらき。

テは見えない手錠で

恥骨の上に組まれ。

金曜日に死んだイエスは、日曜日に復活する。この作品に、イエスの死の疑似体験は描かれているが、復活の兆しは見えない。しかし...

When as you sometimes do	= Quand tu rouvres lex yeux
--------------------------	-----------------------------

to void the fluid

le noir s'éclaircit. (84)

you open your eyes

dark lessens. (85)

オマエがメをあけると

闇は明るくなる。¹¹

闇にも輝きがあり、コエにもヒカリがあるように、スベテが創りだされた幻影として消え去ってしまうように見えるとき、後には不在の跡としてチラチラするヒカリが残されているのである。

3. 『仲間』のまとめ

この書では、「創りだすモノ」が問題となっている。思い出という過去と夢という未来を現在の世界として統一的に生きるためには、西田の言うポエシス的な作用が必要である。ポエシスは制作を意味するギリシャ語 *ποίησις* であるが、西田の論では、「決定せられたもの即ち作られたものから作るものへ」¹²の動きを示している。それは「作るものを作るとしてイデヤ的」¹³な働きである。ベケットはそのようなイデヤ的存在として、仲間を創りだすモノを創りだしている（作家の創作として筆者は創の字を用いることとする）。創りだされるモノが生き生きと表出されるように、創りだすものはなんとか仲間度を高めようとしている。コエも創られた仲間として創りだすモノに用いられている。聞キテは、かけないカユミを十字架のように負い、横たわっている。テを恥骨の上に組み、座禅ならぬ臥禅の姿勢をとる。そのありさまは、ロゴスと

11 英語では、「流動体を空っぽにするため/ ときどきやるように/ オマエがメをあけると/ 闇がうすれる」と訳せる。

12 「絶対矛盾的自己同一」、『西田幾多郎全集』9, p. 159

13 同上, p. 186

してのイエスの死を連想させる。それはさらに、ロゴスとしてのコトバのたどる道を予測させる。西田の言うように、個は「自己否定に於いて自己を有つ」¹⁴としたら、コトバは自己否定によって逆に自己の仲間度を高めることになるだろう。

14 同上, p.175

III. 『見ちがい言いちがい』、解体

Vus n'importe comme

= Seen no matter how

N'importe dit. (38)

and said as seen. (31)

いいかげんに見られ

いいかげんに言われる。¹

ベケットは、1979年、フランス語で *Mal vu mal dit*² を書きはじめ、1980年には英訳 *Ill Seen Ill Said*³ を開始した。1981年には、仏語版と英語版の両方が出版された。日本では、宇野邦一訳『見ちがい言いちがい』⁴によって、1991年に紹介された。偶然の「見まちがい」や「言いまちがい」ではなく、意図的な行為として描かれているので、筆者も宇野訳のタイトルを使わせていただく。前章で扱った『仲間』とこの作品と、次章で取りあげる『さらにまちがうために』はベケットの後期三部作といわれている⁵。『仲間』では、アイツは自分を聞キテとして創りだし、さらにコエやほかの仲間タチを創りだしながら、そういうふうに創りだす自分を創りだしていった。語リテは存在しながら、姿を見せることはなかった。『見ちがい言いちがい』では、語リテはカメラのレンズのようなメとなって、明暗の世界を視覚的に捉えていく。捉えたモノを、コトバで表現していく。そのメの不確かさとコトバの不確かさが作品のタイトルとなっている。仲間として登場してくるのは、オンナである。『不在の書』では、オ

¹ この章でも、引用文は詩のように配列しなおし、フランス語と英語を並列し、私訳を付しておく。以下同様。

² *Mal vu mal dit*, Minuet. 1981

³ *Ill Seen Ill Said*, John Calder, 1981

⁴ 宇野邦一訳『見ちがい言いちがい』、山田書肆。1991

⁵ 高橋康也監修『ベケット大全』、p. 255

ンナとして登場してくるのは、ハハでありカルヴェおばさんでありネエヤのビ
ビイであり、食屍鬼たちであった。『仲間』で登場してくるオンナは、コエが伝
えるハハだけであった。この『見ちがい言いちがい』で登場してくるのは老い
たオンナだけで、老女と呼ぶことにする。この老女とそれをめぐる仲間たちが
どのように見まちがわれ言いまちがわれるかたどってみたい。

1. 3つの視線

① 闇を見透かすイイカゲンな視線

La voilà donc	= There then she sits
comme changée en pierre	as though turned to stone
face à la nuit.	to the night.
Seule tranchent sur le noir	Save for the white of her hair
le blanc de cheveux	and faintly bluish white
et celui un peu bleuté	of face and hands
du visage et des mains.	all is black.
Pour un œil n'ayant pas	For an eye having
besoin de lumière	no need of light
pour voir. (8)	to see. (7-8)

それで老女は

石になったみたい

ヨルにむかって。

闇にうきでるのは

カミの白

カオとテの青みがかった白。

見るために

ヒカリを必要としない

視線に対し。

しかし、この視線は確かなものだろうか。

N'ayant nul besoin de lumière	= Having no need of light
pour voir	to see
L'œil se dépêche.	the eye makes haste.
Avant qu'il fasse nuit.	Before the night falls.
C'est ainsi.	So itself belies.
Ainsi qu'il se dément.	Then gluttoned —
Puis assouvi —	then torpid under its lid
puis assoupi sous sa paupière	makes way for unreason.(23)
champ libre à la déraison.(27)	

見るために

ヒカリを必要としないのに

メはいそぐ。

ヨルがこないうちに。

こんな調子だ。

こうしてメはあやまる。

こうして自ら満足し —

そしてマブタの下でまどろみ

不合理な世界をひらく。

この闇を見透かす視線は、いそぐ必要もないのにいそいで見まちがうか、自らの闇にまどろみ不合理な世界を持ちこんでくるイイカゲンなメである。

Zone première	= First zone
plutôt plus étendue déjà	rather more extensive
qu'à première vue mal vue	that at first sight ill seen
...	...

L'œil reviendra
sur lieux de ses trahisons.

(31-2)

the eye will return
to the scene of its betrayals.

(26-7)

第一の地帯は³
もっと広がった
最初に見ちがえたトキよりも
...
メはもどっていく
見ちがえた場所へ。

この視線は、見ちがえては、見直し、また見ちがいをつづけていく。

② 老女の遠い視線

Vite alors
la vieille à peine remise
du coucher de Vénus
vite à l'autre fenêtre
voir surgir l'autre merveille.
Comme de plus en plus blanche
à mesure qu'elle s'élève blanchit
les cailloux de plus en plus.
Raide debout visage et mains
appuyes contre la vitre
longement elle
s'émerveille. (10)
金星が沈むのを見るとすぐ

= Quick then still
under the spell of Venus
quick to the other window
to see the other marvel rise.
How whiter and whiter
as it climbs
it whitens more and more
the stones.
Rigid with her face and hands
against the pane
she stands
and marvels long. (9)

³ 老女の小屋の北には、円形の地帯が広がっていて、手前は砂利で、向こうは牧草地となっている。

老女は反対の窓へ

もうひとつのすばらしいモノを見るために。

月はのぼるにつれ

ますます白くなり

砂利をますます白く見せ。

カオとテを窓ガラスに押しつけ

ぎこちなく立ちながら

ながいこと見とれている。

老女の小屋の屋根は円錐形で天井はなく、その屋根の東側と西側に窓がついて、空を見上げるふたつのメのような働きをしている。老女の視線も同じような働きをしていて、遠いモノを見つめる遠視のメである。老女のまわりに仲間がふえてくるが、老女の視線はそれをどれだけ捉えているのだろうか。

En fait de bêtes

= In the way of animals

seuls des ovins.

ovines only.

...

...

Sans pâtre ils divaguent

Unshephered they stray

à leur guise.

as they list.

Des fleurs?

Flowers?

Attention.

Careful.

Seuls quelques crocus encore.

Alone the odd crocus still

Au temps de agneaux.

at lambing time.

Et l'homme?

And man?

...

...

Combien?

How many?

Un chiffre advienne que pourra.

A figure come what may.

Douze.

Twelve.

...	...
Elle lève les yeux du sol à ses pieds	She raises her eyes
et en voit un.	and sees one.
Ainsi de suite.	Turns away and sees another.
Toujours au loin.	So on.
Immobiles ou s'éloignant.	Always afar.
Jamais elle n'en vit venir vers elle.	Still or receding.
Ou elle oublie.	She never once saw one come toward her.

...	Or she forgets.
-----	-----------------

La voient-ils?

...

Assez. (11-2)

Enough. (10)

動物といえは

ヒツジだけ。

...

ヒツジ飼いはなくヒツジはさまよう

好きなように。

花はどうだろう。

気をつけて。

クロッカスだけがまだすこし。

子ヒツジの生まれるトキ。

オトコはどうだろう。

...

何人。

数などどうでも。

1 2 人。

...

老女は足元の地面からメをあげ

ヒトリを見る。

次つぎとヒトリずつ。

いつも遠く。

動かないか遠ざかる。

ダレカ近づいてくるのを見たことがない。

あるいは老女が忘れてしまう。

...

オトコたちには老女が見えるのだろうか。

もうたくさん。

ヒツジやクロッカスを掬えているのは、語リテの視線である。老女の視線は、地面にむいている。見つめているわけではなく、うつむいているだけである。メをあげても、12人のオトコたちがしっかり見えるわけではない。ダレカが遠く見えるだけである。どこまでも、遠い視線である。

Elle absence	= Weary of the inanimate
l'œil las de l'inerte	the eye in her absence
se rabat sur les douze.	falls back on the twelve.
Hors de sa vue	Out of her sight
comme elle de la leur.	as she of theirs.
Seule où qu'elle se tourne	Alone turn where she may
elle garde les yeux au sol.	she keeps her eyes on the ground.
Là où à ses pieds	On the way at her feet
le chemin s'est arrêté.	where it comes to a stop.
Soir d'hiver.	Winter evening.
C'est vague.	Not to be precise.
Les faits sont si anciens.	All so bygone.

Verse les douze donc	To the twelve then
l'œil veuf faute de mieux.	for want of better the widowed eye.
N'importe lequel.	No matter which.
Il se dresse au loin	In the distance stiff
de face face au couchant. (26-7)	he stands facing front
	and the setting sun. (22)

老女が不在で
 メは活気のないモノにあき
 1 2 人のオトコたちの上にとまる。
 カレラは老女には見えない
 カレラに老女が見えないように。
 ひとりどこかで振りむいても
 老女のメは地面をむいたまま。
 その足元で
 道がとだえる。
 冬の夕方。
 ばくぜんとしている。
 ずいぶん昔のこと。
 それから1 2 人にむかう
 もっとましなモノもなく
 ひとりぼっちのメは。
 どのオトコということもなく。
 ダレカ遠くに立っている
 夕日にむかって。

老女は不在になったり、また現われたりしている。老女が不在のときは、語りテの視線が漂っている。老女がどこかでメをあげるとしても、見えるのはオ

トコたちのダレカの遠い姿だけ。ここで、“l’œil veuf,” “the widowed eye”
という表現に注目したい。「ひとりぼっちのメ」と訳したが、これは「ヤモメの
メ」であり「ツレアイと別れているモノのメ」である。さらに、「仲間を失った
モノのメ」というほどまでに解釈できるのだろうか。老女と仲間のかかわりに
ついては、このあと2で考えることとする。

Un soir	= One evening
un agneau la suivit.	She was followed by a lamb.
Agneau de boucherie	Reared for slaughter
comme les autres	like the others
il s'en détacha	it left them
pour s'attacher à sa pas.	to follow her.
...	...
Se sait-elle suivie?	Does she see the white body
...	at her feet?
Voit-elle le corps blanc	Head haught
à ses pieds?	now she goes into emptiness.
Tête haute à présent	That profusion.
elle regarde dans le vide.	Or with closed eyes
Cette profusion.	sees the tomb. (36-7)
Où les yeux fermés	
voit la tombe. (45-6)	

食肉用に育てられたが
子ヒツジは群れを離れ
老女のあとについていった。

... 老女はあとをついてくるのに気づいているのか。⁴

...

老女に白いカラダが見えるのか

足元の。

アタマをあげ

虚空を見つめる。

なんと思いきって。

あるいはメをとじて

ハカを見る。

老女に子ヒツジの姿は見えていない。虚空を見つめる老女の視線の先には、
ナニがあるのだろうか。

Face aux autre confins

= Face to the further confines

que l'œil a beau se fermer

the eye closes in vain to see.

pour mal entrevoir.

At last they appear

Enfin ils paraissent

an instant.

un instant.

North

Au nord là

where she passes them always.

où elle les franchit toujours.

Shroud of radiant haze.

Brume dormante radieuse.

Where to melt into paradise. (28)

Où se fondre en paradis. (34)

メをとじても

うまく垣間見ることのできない

北の果てにむかって。

一瞬

⁴ 英訳にはこの文はない。

やっと思えてくる。

いつも境界を越えていく

北のほうに。

輝くモヤ。

天国と溶けあうあたり。

メをこらしながら、あるいはとじながら、老女がめざしているのは天国にあるハカのようなものである。

③ 監視するモノの視線

A l'imaginaire profane	= To the imaginary stranger
la mesure paraît inhabitée.	the dwelling appears deserted.
Surveillée sans relâche	Under constant watch
elle ne trahit aucune présence.	it betrays no sign of life.
L'œil collé à l'une	The eye glued to one
à l'autre fenêtre	or the other window
ne voit que rideaux noir.	has nothing but black drapes
Longuement immobile contre la porte	for its pains.
il écoute.	Motionless against the door
Rien.	he listens long.
Cogne.	No sound.
Personne.	Knocks.
Guette en vain la nuit la moindre lueur.	No answer.
Rentre enfin dans sons pays	Returns at last to his own
et avoue, Personne. (15)	and avows, No one. (12-3)

想像上のヨソモノ⁵には

⁵ フランス語の“profane”は、「信者でない俗人」を意味する。

アバラ家は空き家のよう。

ずっと監視され

ヒトの気配を見せない。

ひとつの窓もうひとつの窓とはりつくメに見えるのは

黒いカーテンばかり。

ドアに身をよせじっと

ながいあいだミミをかたむけ。

なんの音も聞こえない。

ノックをしても。

返事はない。

夜どおし空しく

わずかなアカリを探し。

やむなく故郷にもどり

白状、姿なし。

監視するモノはメをこらし、ミミをすませても、老女は不在である。故郷から遣わされたこの探偵のようなヨソモノあるいは俗人は、ナニモノだろうか。その故郷とは、ドコなのか。

2. 仲間の関係

Elle ne se montre qu'aux siene. = She shows herself to her own.

Mais elle n'a pas de siens.

But she has no own.

Si si elle en a un.

Yes yes she has one.

Et qui l'a elle. (15)

And who has she. (13)

老女は仲間にしか姿を見せない。

だが仲間はいない。

いやいやひとりいる。

ダレ。

老女のひとりの仲間とは、ダレなのか。

Qu'est-ce qui la défend?

= What is it defends her?

Même du sien.

Even from her.

Fait baisser le regard

Averts intent gaze.

dans l'acte d'appréhender.

Incriminate the dearly won.

Incrimine l'acquis.

Forbids divining her.

Retient de deviner.

What but life ending.

Elle sans défense.

Hers.

C'est la vie qui finit.

The other's.

La sienne à elle.

But so otherwise.

La sienne à l'autre.

She needs nothing.

Mais si différemment.

Nothing utterable.

Elle n'a besoin de rien.

Whereas the other.

De dicible.

How need in the end?

Mais l'autre.

But how? (16)

Comment avoir besoin à la fin?

Mais comment? (19)

老女を守っているのはナニか。

その仲間さえからも。

キビシイ視線をそらせるモノは。

やっと獲得したモノに罪を負わせるモノは。

老女の存在をつきとめるのを禁じるモノは。

老女は無防備。⁹

それは終わる人生。

老女の人生。

もうひとりの人生。

だがずいぶんちがっている。

老女はナニも必要としない。

いいあらわすことができるものはナニも。

いっぼうもうひとりのほうは。

最後にどんなに必要としているのか。

だがどんなに。

筆者はここで、無謀と見えるかもしれないが、思いきってキリスト教的なイメージを展開してみたい。

12人のオトコたちといえば、イエスの12人の弟子たち。子ビツジは、屠られるモノとしてのイエス。老女が存在をつきとめ訴えようとしているのは、弟子のひとりであるイスカリオテのユダ。老女を守り、自らのキビシイ視線をそらせ、愛するひとり息子を贖罪の死に定め、サタン¹⁰の働きをするユダに詮索を禁じるのは、神自身。老女は、イエスに七つの悪霊を追い出してもらい¹¹、イエスが十字架にかけられたときそれを遠くから見守り¹²、イエスが葬られたあとハカにむかってすわっていて¹³、そして3日後の日曜日の早朝ハカに行って復活したイエスに出会った¹⁴あのマグダラのマリア。これらのイメージがそのまま生なましく用いられているわけではないが、少なくとも影をおとしてい

⁹ 英訳にはこの文はない。

¹⁰ ヘブル語の שָׂטָן (satan) は、「訴えるモノ」を意味する。

¹¹ 『ルカによる福音書』8：2、『マルコによる福音書』15：40、『ヨハネによる福音書』19：35

¹² 『マタイによる福音書』27：56、『ヨハネによる福音書』19：35

¹³ 『マタイによる福音書』27：61、『マルコによる福音書』15：47

¹⁴ 『マタイによる福音書』28：1-10、『マルコによる福音書』16：9、『ルカによる福音書』24：10、『ヨハネによる福音書』20：1-18

といえるだろう。あるいは、古代ケルト族が信仰していたドルイド教 (druidism) の影、あるいはそのドルイド教がキリスト教と出会って生まれた混合の信仰の影があるといえる。老女の小屋の北にある円形的地帯の石柱は、アイルランドに残っている十字架に丸のついた石柱を思い起こさせるからである。特に、石ころと草のある風景は、筆者がアラン島の丘でメにした荒涼とした風景と重なってくる。聖パトリック (Saint Patrick) が建てたといわれる小さな教会の壁が残っているその丘は、大西洋の海鳴り¹²にさらされていた。

Un endroit l'attire.	= She is drawn to a certain spot.
Par moments.	There stands a stone.
Une pierre s'y dresse.	It it is draws her.
Blanche de loin.	Rounded rectangular block
Rectangle cintré	three times as high as wide.
trois fois plus haut que large.	Four.
Quatre fois.	Her stature now.
Sa taille à présent.	Her lowly stature.
Sa petite taille.	When it draws
Quand cela lui prend	she must to it.
elle doit y aller.	She cannot see it from her door.
Elle ne la voit pas du logis.	Blindfold
Elle saurait y aller	she could find her way.
les yeux fermers.	With herself she has no more converse.
Elle ne se parle plus.	Never had much.
Elle ne s'est jamais beaucoup parle.	Now none
A present plus du tout.	As had she the misfortune

¹² 「出かけて老女は海鳴りをきく」(F.21, E.17)

Comme si elle avait le malheur
d'être encore en vie.

Mais dans ces moments-là
à ses pieds la prière,
Emmenez-la.

...

Ils l'emmenent
et l'arrêtent devant.

Là comme en pierre elle aussi.

Mais noir. (13-4)

ひとつの場所が老女をひきつける。

ときおり。¹³

ひとつの石が立っている。

遠くから白く見える。¹⁴

それが老女をひきつける。

アーチ形の長方形。

高さは幅の3倍。

4倍。

老女のイマの背の高さ。

小さな背丈。

石がひきつけるとき

老女はそこへ出かけなくてはならない。

戸口から石は見えない。

メをとじていても道はわかるだろう。

to be still of this world.

But when the stone draws
then to her feet she prays,
Take her.

...

They take her
and halt her there before it.
There she too as if of stone
But black. (11-2)

¹³ 英訳にはこの文はない。

¹⁴ この文も、英訳にはない。

老女はもう自分と対話しない。

これまでもあまりしなかった。

いまはもうすっかり。

不幸にも老女は

まだ生きているよう。

だが石がひきつけるとき

アシに祈る

老女をつれていってやってくれ。

...

アシは老女をつれていき

石のまえにとまる。

そこで老女も石のよう。

だが黒く。

『不在の書』では、ワタシを運ぶのはアシだった。ここでまた、仲間のアシが復活している。しかし、アシが勝手に老女を運ぶのではなく、祈りによってアシは働く。祈っているのは、ダレだろう。老女が自分のことをワタシといえないで、彼女と指示しているのか。あるいは、老女以外のダレカの祈りか。行き先は、石である。石といえば、すぐ思い出されるのは教会の礎となったあのオトコである。石を表わす“*pierre*”は、イエスが12弟子のひとりペトロあるいはペテロ (*Pierre, Peter*) に与えた名前である。

あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはまたあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。¹⁸

¹⁸ 『マタイによる福音書』16:18-9 (新共同訳)

石が宗教的なイメージをもって仲間になっている。石は老女をひきつけ、動かす。アシが老女の動きを助ける。仲間同士の組ミ込ミがはじまる。さらに、ハカとクロッカスが、老女の不在にかかわってくる。

Periodes où elle disparaît. = Time when she is gone.

Longues périodes. Long lapses of time.

Au moment des crocus. At crocus time

ce serait en direction de it would be making for
la tombe lointaine. the distant tomb.

En tenant par la branche inférieure	Bearing by the stem
ou passée sur le bras	or round her arm
la croix ou la couronne. (19-20)	the cross or wreath. (16-7)

老女が不在になるトキ。

ながいあいだ。

クロツカスの時期には

遠いハカにむかうだろう。

• • •

下の茎をもつか

片ウデにかかえて

十字架か花輪を。

旧約聖書に出てくるクロッカス (חֶבְרַת, ch^abatstseleth) は、「さふらん」
(口語訳) とも「野ばら」(新共同訳) とも訳されている。

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ

砂漠よ、喜び、花を咲かせよ

野ばらの花を一面に咲かせよ。¹⁶

クロッカスは、早春に咲く花である。イエスの受難をいたみ、その死を悲しみ、その復活を喜ぶのにふさわしい花である。日本の讃美歌では、イエスの生涯を野のゆりにたとえ¹⁷、その復活をたたえるのに白百合を用いるが¹⁸、荒野に咲くクロッカス（さふらん、野ばら）こそふさわしい花である。

老女を運ぶアシは、時間がとまったように $d - \infty$ のこともあれば、老女が黒いスカートのすそをからげていそぐ $d + \infty$ のこともある。そのアシはストッキングをつけ、ブーツをはいている。

Avant d'être lâchées pour bas	= Before left for the stocking
les bottins ont le temps	the boots have time
d'être mal boutonnées.	to be ill buttoned.
...	...
En argent terni	of tarnished silver pisciform
il pend pisciforme par le crochet	it hangs by its hook
à un clou.	from a nail.
Il oscille sans cesse à peine.	It trembles faintly
(21-2)	without cease. (19)

ストッキングにとりかかるまえに
ブーツはゆっくりボタンをかけまちがわれる。

...

つや消しの銀の魚のかたちをして
ボタンは鉤で釘にかかっている。
魚のボタンはいつもかすかにふるえている。

¹⁶ 『イザヤ書』 35 : 1 （新共同訳）

¹⁷ 讃美歌 512 番

¹⁸ 讃美歌 496 番

この魚のかたちをしたボタンは、イエスを思い起こさせる。

ギリシャ語の魚 (ἰχθῦς) が、<イエス・キリスト・神の子・
救い主> (Ἰησοῦς χριστός, θεοῦ υἱός
σωτήρ) の各頭文字を合わせた語に相当することに深い関係が
あることは確かであり、キリスト告白の一形態であった。²²

ブーツの上に鉤で釘にかかってふるえている魚のかたちは、十字架上のイエスを思い起こさせる。それは、老女の足元の現象である。『不在の書』では、神とイエスへのノスタルジアは振り払われた。この『見ちがい言いちがい』では、神とイエスはむしろ仲間としてかかわってくる。死にむかう老女は、言い表わすことのできるものはナニも必要としないが、もうひとり死にむかうモノはナニかを必要としていた。このもうひとは、明らかにイエスである。イエスの死は、ナニを必要としているのだろうか。

3. ロゴスの死

Au lieu dit du crâne.

= At the place of the skull.

Un après-midi d'avril.

One April afternoon.

Descente faite. (72)

Deposition done. (57)

されこうべの場所。

4月のある午後。

降架完了。

『ヨハネによる福音書』は、「初めに^{ことば}言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」(新共同訳) とはじまっている。イエスの死は、コトバ (λόγος, Logos) の死である。

²² 『キリスト教大辞典』、pp. 122-3

イエスが十字架にかけられた場所は、ゴルゴタ (ゴルゴタ) であった。「されこうべの場所」として、3つの福音書に説明されている²⁰。もともとの意味は、「頭骸骨」である。

Déjà tout s'emmêle.	= Already all confusion.
Choses et chimères.	Things and imaginings.
Comme de tout temps.	As of always.
S'emmêle et s'annule.	Confusion amounting to nothing.
Malgré les précautions.	Despite precautions.
Si seulement elle pouvait n'être qu'ombre.	If only she could be pure figment. Unalloyed.
Ombre sans mélange.	This old so dying woman.
Cette vieille si mourante.	So dead.
Si morte.	In the madhouse of the skull
Dans le manicomie du crane et nulle part ailleurs.	and nowhere else. ...
...	Cooped up there with the rest.
Internée la avec le reste.	Hovel and stones.
Cabanon caillases et tout le bazar.	The lot.
Et le guetteur.	And the eye.
Comme tout serait simple alors.	Now simple all then.
Si tout pouvait n'être qu'ombre.	If only all could be pure figment.
Ni être ni avoir été ni pouvoir être. (24)	Neither be nor been nor by any shift to be. (20)
もうナニモカモ混乱している。	

²⁰ 『マタイによる福音書』 22 : 33、 『マルコによる福音書』 15 : 22、 『ヨハネによる福音書』

モノと幻想。

いつものように。

混乱して消えていく。

どんなに気をつけていても。

老女がただ純粋な影であってくれさえしたら。

まじりけのない影で。

この死にかけた老女が。

こんなに死んでいる老女が。

ほかのドコでもなく

されこうべ（頭蓋骨）の混乱（分裂病棟）のなかで。

...

そこにほかのモノといっしょに閉じこめられて。

小屋も砂利も。

ガラクタの仲間たちも。

見張っているメも。

そうすればどんなに単純になることか。

ミンナただの影でしかないとすれば。

存在することも存在したことも

存在の可能性もなくなれば。

「ミンナただの影でさえあってくれたら」という仮定法は、実際にはそうでないということである。混乱は、ドコにあるのだろうか。老女とその仲間たちがミンナ、狂ったアタマのなかの幻想 — 存在しない影であつたら、コトは簡単に割り切れるのだろうか。ゴルゴタの丘でのロゴスの死という歴史的現実、どう反映されてくるのだろうか。現実と幻想の混乱はどこから生じてくるのだ

ろうか。

A la reprise

la tête est sous la couverture.

...

Tant il est vrai que

réel et

— comme dire le contraire?

Enfin ces deux-là.

Tant vrai que

les deux si deux jadis

à présent se confondent.

Et qu'au compère

chargé du triste savoir que desarroi.

...

Tant il est vrai que

les deux sont mensonges.

Réel et

— comme mal dire contraire?

Le contrepoison. (49-50)

ふたたび

アタマは毛布の下。

...

確かに現実と

— その反対はナンというか。

確かにふたつは

もとはふたつであったが

= On resumption

the head is covered.

...

Such the confusion now

between real and

— how say its contrary?

...

That old tandem.

Such now the confusion

between them once so twain.

And such the farrago

from eye to mind.

...

Such equal liars both.

Real and

— how ill say its contrary?

The counter-poison. (40)

イマはこんがらがっている。

つまらないことしか知らない相棒のアタマに

メはもう困惑を合図するだけ。

...

確かにふたつともウソツキなのだ。

現実と

— その反対はどう言いちがえたらいいのか。

毒消し。

メが見ちがえて困惑し、メの相棒であるアタマがさらに言いちがえる。現実と反対のもの — それは「毒消し」として言い表わされる。見ちがえた「毒」をさらに言いちがえた「毒」— メもアタマもウソという毒を発するウソツキなのである。

Elle se perd.

= She is vanishing.

Avec le reste.

With the rest.

Le déjà mal vu s'estompe

The already ill seen bedimmed

ou mal revu s'annule.

ill seen again annulled.

La tête trahit

the mind betrays

les traître yeux

the treacherous eyes

et traître mot

and the treacherous word

leurs trahisons.

their treacheries.

Seule certitude la brume.

Haze sole certitude.

...

...

L'œil aura beau se fermer.

The eye will close in vain.

Il ne verra plus que brume.

To see but haze.

Même pas.

Not even.

Ne sera plus lui-même que brume.

Be itself but haze.

Comme la dire.

Vite comme la mal dire
avant qu'elle noie tout.

Lumière.

En un traître mot.

Brume lumière.

La grande enfini.

Ou plus rien à voir.

A dire. (60-1)

老女は消えていく。

ほかのモノといっしょに。

すでに見ちがえたモノはかすみ

もういちど見ちがえたものは消えていく。

アタマは

裏切るメを暴露し

裏切るアタマは

メの裏切りを暴露する。

モヤだけが確か。

...

メがいくら閉じてみてもムダ。

モヤしか見えはしないだろう。

いやモヤさえも。

メ自身がモヤになるだろう。

ナン言えればいいか。

いそいで、ナンと言いちがえればいいのか。

モヤがすべてをおおいかくしてしまわないうちに。

How can it ever be said.

Quick how ever ill said
before it submerges all.

Light.

In one treacherous word.

Dazzling haze.

Light in its might at last.

Where no more to be seen.

To be said. (48)

ヒカリ。

裏切る一語で。

まぶしいヒカリ。

ついに力強いヒカリ。

もう見えるモノはない。

言うことも。

流れは確実に、ひとつの方向にむかっている。メの見ちがい、メの相棒であるアタマによる言いちがいを少なくしていく方向である。老女は不在になり、幾冬かすぎ、またもどってくる。そのとき、この方向への変化はどこまで進行しているだろうか。

Bazardé tout le mal vu mal dit. = Scrapped all the ill seen ill said.

L'œil a changé.

The eye has changed.

Et son pisse-légende.

And its drivelling scribe.

L'absence les a changés.

Absence has changed them.

Pas assez.

Not enough.

Plus qu'à repartir.

Time to go again.

Où changer encore.

Where still more to change.

D'où trop tôt revenus.

Whence back too soon.

Changés pas assez.

Changed but not enough.

Estrangers pas assez.

Strangers but not enough.

A tout le mal vu mal dit. (65)

To all the ill seen ill said. (51)

見ちがい言いちがいはすべてポイと捨ててしまった。

メは変わった。

その相棒のたわいのないコトバも。

老女の不在がふたつを変えた。

だがじゅうぶんとはいえない。

もういちど出なおし。

まだ変えなければならぬところがある。

そこからもどるのが早すぎた。

ふたつはまだじゅうぶんヨソモノになっていない。

すべての見ちがい言いちがいに対して。

じゅうぶんではないといいながらも、見ちがい言いちがいをなくしていく方向に確かに進行している。その道は、メとアタマが自らのまちがいに対してヨソモノになる道 — 遠ざかる道である。さらにどう進むのか — あるいはどう遠ざかるのだろうか。

Mais voilà soudain	= But see
qu'elle n'est plu là.	she suddenly no longer there.
Ou soudain elle fut laissée.	Where suddenly fled.
Vite donc la chaise	Quick then the chair
avant qu'elle reparaisse.	before she reappears.
Longuement.	At length.
Tous les angles.	Every angle.
De quel seul mot	With what one word
en dire le changement?	convey its change?
Attention.	Careful.
Moindre.	Less.
Ah le beau seul mot.	Ah the sweet one word.
Moindre.	Less.
Elle est moindre.	It is less.
La même mais moindre.	The same but less.
D'où que l'œil s'y acharne.	Whencesoever the glare.
Vrai que l'éclairage.	True that the light.

Voilà que les mots eux aussi.	See now how words too.
Quelques gouttes au petit malheur	A few drops mishapazard.
et c'est la strangurie.	Then strangury.
Pour en mal dire le moin.	To say the least.
Moindre.	Less.
Elle finira par ne plus être.	It will end by being no more.
Par n'avoir jamais été.	by never having been.
Divine perspective.	Divine prospect.
Vrai que l'eclairage. (66-7)	True that the light. (52)

しかしほら

老女はふつといなくなる。

ふつとほっておかれたその場所に。

さあはやくイスを見て

老女がもどってこないうちに。

くわしく。

あらゆる角度から。

どんな一語で表わそう

この変化を。

慎重に。

もっと小さい。

ああなんと美しい一語。

もっと小さい。

同じイスだがもっと小さい。

どこからどんなににらんでみても。

ヒカリがある。

ほらコトバも。

なんとかひとことふたこと。

それから苦痛の発語障害。

最少のことをいう。

もっと少なく。

イスがもう存在しなくなることで終わりとなる。

けっして存在しなかったことで。

すばらしい展望。

ヒカリがある。

イスというひとつの物体が、だんだん小さく見えてくる。それを表現するコトバもだんだん少なくなってくる。ついに存在しなくなるまで、最小最少へとむかっていく。それが美しいコト、すばらしいコトとして捉えられている。行き先が見えてきた。この移行のなかで、ヒカリが見える。

Vite voir

= Quick see.

pour ne pas que la chaise détonne. How all in keeping

comme tout à son image.

with the chair.

Moindre minimement.

Minimally less.

Pas plus.

No more.

Bien parti pour l'inexistence

Well on the way to inexistence.

comme pour zero l'infini.

As to zero the infinite.

Vite le dire.

Quick say.

Et elle?

And of her?

En autant.

As much.

Vite la retrouver.

Quick find her again.

Dans ce c ur noir.

In that black heart.

Ce simili-cerveau. (69)

That mock brain. (54)

いそいで見て

スベテはそれらしくできているのに
 イスだけが場ちがいにならないうちに。
 ぎりぎりまで小さく。
 もうこれより小さくできない。
 非在にむかって。
 無限がゼロにむかうように。
 いそいで言って。
 それで老女はどうなっている。
 同じくらい小さく。
 いそいで老女を見つけて。
 あの黒いハートのなかに。
 あのにせものの脳。

<非在> (inexistence) と<不在> (absence) はどうちがうのだろうか。<不在>は<存在>とかかわっている。<存在>がなくなる<非在>に対し、<不在>はいままで存在していたものが他の場所へ移動することだろう。もとの場所から不在になるのであって、そこには<存在した跡>が残っているはずである。ベケットの場合、不在となったモノは、散ッタモノとしてどこかに存在しているはずである。

Absence	= Absence
milleur des biens	supreme good
et cependant.	and yet.
Illumination	Illumination
donc repartir cette fois	then go again
pour toujours	and on
et au retour plus trace.	return no more trace.
A la surface.	On earth's face.

De l'illusion.	Of what was not.
Et si par malheur encore	And if by mishap some left
repartir pour toujours encore.	go again.
Ainsi de suite.	For good again.
Jusqu'à plus trace.	So on.
A la surface.	Till no more trace.
A la surface.	On earth's face.
Au lie de s'acharner sur place.	Instead of always the same place.
Sur telle et telle trace.	Slaving away forever
Encore faut-il le pouvoir.	in the same place.
Pouvoir s'arracher aux traces.	At this and that place.
De l'illusion.	and what if the eye could not?
Vite des fois que soudain	No more tear itself
oui adieu à tout hasard.	away from the remains of trace.
Au visage tout au moins.	of what was never.
D'elle tenance trace.(74-5)	Quick say it suddenly can
	and farewell say
	say farewell.
	If only to the face.
	Of her tenacious trace.(58-9)

不在

最高の善

だがしかし。

ヒカリ

だから再出発を

いつまでも

もどっても跡はない。

地上には。

錯覚の跡は。

もし不幸にも跡があれば

再出発。

いつまでも。

前進。

跡がなくなるまで。

地上には。

いつも同じ場所にいるかわりに。

同じ場所でいつまでもあくせくするかわりに。

あれこの場所で。

それでもメができなかったらどうする。

残った跡から自分を引き離すことが。

錯覚の跡から。

さあいそいで言え

できると

別れを言え

サヨウナラと。

せめてカオにだけでも。

老女の執拗な跡を残すカオに。

この地上の跡が消えるまで、再出発をくりかえす。メとコトバは執拗な跡
— カオから自分を引き離し、そのカオに対してヨソモノとなるために、別れを
告げる。カオが不在となってしまうまで。ロゴスの死は、地上での足跡との決
別である。しかし、決別の完了まで、もがきはまだ続いている。降架完了にも
かかわらず。

4. 『見ちが言いいちがい』のまとめ

『仲間』では、ロゴスとしてのイエスの死が、ロゴスとしてのコトバのたどる道を暗示していたが、メもコトバといっしょに同じ道をたどることになる。

『見ちがい言いいちがい』で、コトバとメは、自分たちのウソを自覚しはじめたといえる。つまり、自己を自覚しはじめたのである。他を限定するモノから自己を限定するモノへと転じたのである。西田は、自己限定を、「場所が場所自身を限定することであり、見ることなくして見ることであり、即ちそれは直覚すること」²⁶としている。コトバとメは、仲間たちの散ッタ跡を錯覚の跡としてそれと決別しようとする。錯覚の跡にこだわる自己を否定していく。その自己否定は、錯覚を徹底するという仕方で行われていく。錯覚をギリギリまで押しすすめるという行為のなかで、自己限定が完成されようとしている。

²⁶ 「場所の自己限定としての意識作用」、『西田幾多郎全集』6、p. 94

IV. 『さらにまちがうために』、解体

A pox on bad.

わるいはクタバレ。

Mere bad.

ただのわるいは。

Way for worse.(21)

もっとわるくなるほうへ。

ベケットは、後期 3 部作の最後の作品 *Worstward Ho*¹ を、1981 年に書きはじめ、82 年に完成、83 年に出版した。ベケット自身はこの作品をフランス語に訳していない。ベケットの承諾を得て、エデス・フルニエ (Edith Fournier) が仏訳をはじめ、ベケットの死後、*Cap au pire*² として 1991 年に出版した。前作の『見ちがい言いちがい』の解体のなかで、188 ページに「見ちがい言いちがいをなくしていく方向に確かに進行している」と書き、190 ページに「ついに存在しなくなるまで、最小最少へとむかっている。それが美しいコト、すばらしいコトとして捉えられている」と書いた。今度の作品のなかでは、「最小最少への道」はさらに「最悪への道」として進行していく。これは、「見ちがい言いちがいをなくしていく方向」とは一見逆の方向に見えるが、行き先は同じである。「さらに見ちがえさらに言いちがえる」メとコトバにとって「最悪の道」とは、そのことをとおして自らがギリギリまで最小最少になることだからである。

1. メとコトバのたどる道

¹ *Worstward Ho*, John Calder. 1983. この作品の引用は、これまでと同じように詩のような配列にかえてある。

² *Cap au pire*, Minuit. 1991. この仏訳は、ベケット自身によるものではないので、英訳と並べて引用することはしない。

Say to be said.	言われるために言う。
Missaid.	言いまちがわれるため。
From now	これから
say for to be missaid. (7)	言いまちがわれるために言う。

See for be seen.	見られるために見る。
Misseen.	見まちがわれるために。
From now	これから
see for be misseen. (12)	見まちがわれるために見る。

前作では、メが見ちがえたモノを、コトバが暴露しながらも自ら言いちがえるというかたちで、メとコトバは関係していた。ココでは、言いちがうことが肯定され、見ちがうことが肯定されている。コトバの働きもメの働きも、本質的にまちがうということである。これからも、さらにまちがうために使われていく。ときに、コトバが消えて空白になることがある。そのとき、ナニが起るのか。

Blanks for when words gone.	コトバがなくなったトキの空白。
When nohow on.	なんとも進めなくなったトキの。
Then all seen as only then.	そのときスベテがただそのトキと
Undimmed.	して見られる。
All undimmed that words dim.	アイマイでなく。
All so seen unsaid. (40)	コトバがアイマイにするスベテが
	アイマイでなく。
	ナニも言われなく
	スベテがそのように見られる。

これは、79 ページに引用したドゥルーズの引用文と同じ個所である。フランス

語からの要約だが、これからの論を進める参考のため、その前後を含め要約では省略したところも入れて、もう一度引用してみる。

...だから、数えられるものや組み合わせられるものにも、コトバを発するコエにも、言語を関連づけない[言語 III]が存在する。これは、移動することをやめない内側の境界に、空白や穴や裂け目に言語を関連づける...「コトバが消えてしまったための空白。もうお上げのとき。そのときすべては、ただそのトキとして見られ。ヤミはうすれ。コトバが暗くしていたすべては明るくされ。すべては言われずに、見られる」。見られたり聞かれたりするこのナニカは、視覚的であれ聴覚的であれ、「イメージ」と呼ばれる。ただし、ほかのふたつの言語が縛りつけていたクサリからイメージを開放しなければならない。言語 I とともに想像すること（「理性でそこなわれた」組み合わせの想像力）も、言語 II とともにオハナシをこしらえたり思い出をこしらえたりすること（記憶でそこなわれた想像力）もいない...

ドゥルーズのいう、ベケットの言語 III — イメージの言語がいよいよはじまるのだろうか。あるいは、『不在の書』の第2章ではじまった「コトバを空ッポにする」という課題が最終局面をむかえるのだろうか。コトバがなくなって、スベテが如として見えはじめるのだろうか。筆者はイマ、ベケット理解の重要な地点にきているのを感じている。問題は上に引用されたドゥルーズの文と、次に引用する文がどうかかわるかということである。

Less.	もっと少なく。
Less seen.	もっと少なく見られる。
Less seeing.	もっと少なく見ている。
Less seen and seeing	もっと少なく見られ見ている。
when with words than when not.	コトバがないトキよりコトバと

コトバは消えたりもどったりしている。問題は、メにとって、コトバが空白のトキのほうがいいのか、コトバといっしょのトキのほうがいいのか、ということである。「いい」というのは、この場合、「もっと見まちがえる」ことができるかということである。ベケットの書いているメは、「閉じたメ」であることを忘れないようにしなければならない。コトバがなくなった空白のトキにその閉じたメに見えるモノは、ナニだろう。それは「開いたメ」が見ているモノ — つまり外の現実ではない。風景画家がメをこらして写生する外の風景ではない。

「閉じたメ」が見つめているのは、＜タマシイの風景＞ (soul-landscape³) である。それはそのままイメージかもしれないが、そのイメージが読者に伝わるためには、つまり読者が見たり聞いたりすることができるためには、コトバは欠かせないはずである。ギリギリのイメージを伝えるために、メだけではなくコトバも同時に必要なのである。ドゥルーズは勘違いをしていたのだ。先の引用の箇所には、199 ページに引用するコトバとメはゼロにはなれないという箇所にも彼は言及すべきであった。『さらにまちがうために』の流れのなかでは、このあと2で見るように、イマは散ッタモノタチの不在の跡にあって最小最少に見ることが課題となっている。さらにアイマイに見ることこそ、イマの課題なのである。メとコトバがいっしょになって、わるいをもっとわるくするために。そしてメは、コトバといっしょのときこそ、最小最少最悪へと近づくのである。コトバのほうは、どうだろうか。

The words too whosoever.

ダレのモノであれコトバも。

What room for worse!

もっとわるくなる余地がたっぷり。

How almost true

コトバがほんとうみたいに

they sometimes almost ring!

響きそうになることがある。

³ Watt, Grove Press. p.249

How wanting in inanity! (20)

なんと無意味不足なことか。

コトバはアタマからしみでてくる。そのコトバに欠けているのは、無意味である。コトバが最少になるということは、無意味になること、その限定の働きを失うことである。コトバとメがたどる最小最少最悪への道をもういちど確認しておく。

Worse less.

もっとわるくもっと少なく。

By no stretch more.

それ以下にならないまで。

Worse for want of better less.

もつとうまく少なくなることを

Less best.

必要としているもっとわるい。

No.

もっと少ないがいちばん。

Naught best.

イヤ。

Best worse.

ゼロがいちばん。

No.

最高にもっとわるい。

Not best worse.

イヤ。

Naught not best worse.

最高にもっとわるいではない。

Less best worse.

ゼロは最高にもっとわるいではない。

No.

もっと少ないが最高にもっとわるいである。

Least.

イヤ。

Least best worse.

もつとも少なく。

Least never to be naught.

最少が最高にもっとわるいである。

Never to naught be brought.

最少はゼロになることできない。

Never by naught be nulled,

けっしてゼロにはならない。

Unnullable least.

ゼロによって無になることはない。

Say that best worse.

無になることのできない最少。

With leastening words

それこそ最高に最悪という。

Say least best worse.

最少になるコトバで

For want of worser worst. 最少こそ最高にもっとわるくなるという。

Unlessenable least. もっとわるい最悪を必要として。

best worse. (31-2) もっと少なくなることのできない最少
最高にもっとわるくなること。

最小最少になることは、ゼロになることではない。無になることはできない。無になるギリギリのところが、最高の最悪なのである。コトバも限りなく最少になっていく。上の引用には、主語と動詞のそろった文はなく、最少の語が並んでいるだけである。そのスキマに見えてくるのが、ドゥルーズのいうイメージだろう。そのイメージを伝えるために、ギリギリ無意味になったコトバも必要なのである。そのイメージの実態をさらにつきつめてみることにする。

2. 場としての空^{くう}

Next so-said void.

次に空^{くう}といわれるモノ。

The so-missaid.

そう言いまちがわれたモノ。

That narrow field.

あの狭い野。

Rife with shades.

陰影がいっぱい。

Well so-missaid.

うまくそう言いまちがえられた。

Shade-ridden void.

陰影だらけの空^{くう}。

How better worse so-missay? (24-5) そう言いちがえることは

なんとよりうまく

もっとわるくなっていることか。

この空^{くう}の世界は、アイマイな世界である。そこに存在するのは、陰影だけ。このアイマイな陰影を見ちがえ言いちがうのは、仕方のないことのように思われるが、ココでは仕方のないこととしてではなく、そのアイマイさをゼロ寸前まで追いつめるために意図的に押しすすめる行為となっている。この場は、『不

在の書』第9章の解体で触れたカオス界である。91 ページに書いたように、カオス界では決定可能性 $d \pm \infty$ は〈スプレー〉のような〈浮遊状態〉を保っている。イマ、陰影タチはまさに浮遊している。しかしメとコトバは、強度 $d \pm \infty$ の無限の空間と時間と動きをもっと小さくもっと少なく限りなくゼロに近づけようとしている。

このせばめられた場は、『見ちがい言いちがい』の老女の小屋のまへの野を思わせる。その風景を最小にしていく過程で、不思議なヒカリが見えてきたが、あのヒカリはイマ、さらにアイマイになってココにある。

Say such dim light as never. ただこんなアイマイなヒカリは

On all. これまでなかったと言う。

Say a grot in that void. スベテの上に。

A gulf. あの^{くう}空のなかの空洞。

Then in that grot or gulf 裂け目。

such dimmest light as never. (16-7) そしてあの空洞か裂け目のなかに

これまでなかったような

いちばんアイマイなヒカリ。

^{くう}空のなかの空洞とか裂け目こそ、ドゥルーズのいうイメージのうまれてくる場所だろう。そこからもれてくるヒカリこそ、イメージの背景だろう。このうすあかりのなかに見えるのは、ナニの陰影なのか。

Void were not the one. あのひとりがいなければ空。

The twain. あのふたりづれが。

So far were not イマのところいなければ

the one and the twin. (17) あのひとりとあのふたりづれが。

このひとりあるいはふたりづれとは、ダレなのか。

3. 仲間 1 ・ 2 ・ 3

Something not wrong with one.	1 はわるくない。
Meaning —	つまり —
meaning! —	つまり —
Meaning the kneeling one.	つまりひざまずいているヤツ。
From now one for the kneeling one.	これから 1 というトキは
As from now two for the twain.	ひざまずいているヤツのこと。
Then as one plodding twain.	これから 2 というトキは
As now three for the head.	ひとりのようにトボトボ歩く
The head first said missaid. (20)	ふたりづれ。
	これから 3 はアタマのこと
	最初に言われて
	言いまちがえられたアタマのこと。

コトバを無意味にしようとしながら、meaning というコトバを使うことを、ベケットは躊躇している。躊躇しながら、3 度もドモル。3 種類の仲間について、ひとつずつみていくこととする。

① 仲間 1 — 老女の背中

Somehow again on back	どうにかまたもどる。
to the back alone.	背中だけに。
Nothing to show a wonan's	オンナの背中であることを示す
and yet a woman's.	ものはナニもない
Oozed from softening soft	それでもオンナの背中。
the word woman's.	やわらかくなるやわらかいモノからしみでてきた
The words old woman's.	オンナのモノというコトバ。
...	老女のモノというコトバ。
So better worse from now	...

That shade a woman's. (35)

だからこれから

もっとうまくもつとわるく

あの陰影はオンナの背中。

コトバが消えると「どうにも」(nohow)で、もどつてくると「なんとか」(somehow)である。「やわらかになるやわらかいモノ」は、アタマのこと。コトバは、アタマからしみだしてくる。仲間1は、背中だけ。カオもない、テもない。アタマもなく、腰から下もない。これは、「わるい」である。コトバは、「わるい」を「もつとわるい」に変えていく。老女のうなだれた背中のただの陰影に。しかし背中は、横たわっているのではなく、〈起きあがって〉(up)、見えないヒザをついている。185 ページでは、メが見ちがえアタマがさらに言いちがっていたが、イマはコトバが言いちがったことを「閉じたメ」が凝視している。

② 仲間2 — 老人と子供

Bit by bit

少しずつ

an old man and child.

老人と子供。

In the dim void.

アイマイな^{くう}空のなか。

...

...

Hand in hand

テにテをとって

with equal plod they go.

同じくトボトボふたりは行く。

...

...

Plod as one.

ひとりのようにトボトボと。

One shade. (12-3)

ひとつの陰影。

ふたりはとつぜん消えたり、とつぜんもどつてきたりする。老女の背中はいく起きあがって〉(up)ヒザをついていたが、老人と少年はいく立ちあがって〉(astand)いる。くじつと〉(at rest)立ちながら、くじつと〉歩いているひとつの陰影として。この「その場での旅」は、イメージのただよいとなっている。

③ 仲間 3 — アタマとメ

First back on to three.	まず 3 にもどる。
Not yet to try worsen.	まだもっとわるくしようというのではない。
There in that head	あのアタマのなか
in that head.	あのアタマのなかの。
Be it again.	もういちどアタマがあるようにする。
...	...
Clenched eyes	しっかり閉じたメが
clamped to it alone.	アタマだけに張りついている。
Alone?	だけにか。
No.	イヤ。
Too.	にも。
To it too.	アタマにも。
The sunken skull.	たれた頭骸骨。
The crippled hands.	なえたテ。
Clenched staring eyes	しっかり閉じたメが
clamped to clenched staring eyes.	しっかり閉じて見つめるメに
Be that shade again.	張りついている。
In that shade again.	もういちどあの陰影があるようにする。
With the other shades.	もういちどあの陰影のなかに。
Worsening shades.	ほかの陰影たちといっしょに。
In the dim void. (22)	わるくなる陰影。
	アイマイな ^{くう} 空のなか。

仲間 3 のアタマのなかの頭骸骨は<スベテのモノの座と根源>(the seat and germ of all)と「言われている」。このアタマにメが張りついている。メはアタマだけでなく、メ自らにも張りついている。さらに、スベテのモノに張りつい

ている。「閉じたメ」である。コトバはどうなっているか。やわらかいアタマからしみでたり、とまったりしている。「なんとか」と「どうにも」の繰り返えし。仲間1と仲間2も、頭蓋骨から出たりもどったりしている。しっかり閉じたメが、スベテを見つめている。これらの流れは、アイマイな空^{くう}のなかの陰影として推移していく。この陰影こそ、最小最少のコトバがよみがえらせるイメージである。

4. 『さらにまちがうために』のまとめ

この書の最も重要なポイントは、コトバの働きがゼロになれるかどうかである。西田は、「色や形を離れて画家の理念はなく、音を離れて音楽の理念はない、芸術的概念は形式と材料の統一でなければならぬ」⁴と言うが、文学についても同じことがいえる。コトバを離れて文学の理念はない。序で触れた「ゆがめ圧殺し伝達の機能を拒むコトバ」とのベケットのたたかいは、コトバを空ッポにしたいがコトバを空ッポにしてしまったのでは創作活動が不可能になるという矛盾のなかでのたたかいであった。コトバを空ッポにするということは、コトバをゼロにすることではなく、コトバを無意味にしていくという方向にむかう。創るモノとしてのベケットは、コトバを徹底的に無意味にしようとする。コトバも仲間のひとりとして、自己の役割を自覚しはじめ、ギリギリまで自分を最小最少とすることによって、逆に仲間度を高めようとする。それは、最悪への道である。最悪というのは、コトバ自身にとって最悪ということで、仲間にとっては最善なのである。絵画的な比喩を使えば、色と線が自らを最小最少としていくことによって、まわりの空白を生かす禅画に似ている。その空白のなかに、ヒトは実在を見るのである。コトバは自己犠牲によって仲間を生かす

⁴ 「直接に与えられるもの」、『西田幾多郎全集』4, p. 13

といってよい。ロゴスとしてのイエスと、ロゴスとしてのコトバが、ここで重なってくる。コトバは限りなく消えていくことによって、仲間は陰影としてよみがえる。老女はもはやカオが問題となる前面ではなく背中をむけて身を起こし、老人と少年はテをとって立ちあがる。一方、メのほうは、見まちがうという主観的な作用を捨てて、新しい陰影を見つめている。

V. 結論 — 新しい如^{によ}・陰影

ベケットは、禪と同様、人間を素のままになるまで
衣服を剥ぎとってしまう。¹

序で述べたように、この論文は、ベケットの文学はコトバを使いながらコトバとたたかうというかたちで進行したがそのたたかいがどこに行き着いたか、直観によって生みだされるバラバラのイメージをどう関連づけることができるか、この2点を明らかにすることを目標に書き進めた。

フローベルはすでに19世紀半ばに、確かな輪郭や構図におさまりきらない時代を察知していた。既成の輪郭や構図を規定していたものが、ロゴス中心主義やファルス（男根）中心主義であったことは、デリダ(Derrida)らによって指摘されている。それは精神と物質、主体と客体、内部と外部、男性と女性、存在と無、生と死、現前と不在、意味と記号、西洋と東洋など二元論を基調としていた。この二元の境界線が問題となったのが、ポストモダンの時期といえる。現代を分裂症の時代として捉えたドゥルーズとガタリは、リゾームという多様性の論をもってこの境界線を乗り越えた。もっと早い時期に東洋の地にあって、西洋の哲学をつぶさに考察しながら自らの禪の体験を基に自己を探究した西田幾多郎も、二元論を否定することによってその境界を乗り越えたひとりである。ベケットも、その創作活動のなかで、二元論の境界をあいまいにしていた。たとえば、よく描かれる墓地は、生と死の間を行ったり来たりする場であり、登場する男性も男根性を否定された老人であり身障者であり傷病兵である。ドゥルーズ、ガタリ、西田、ベケットを仲間としてこの論文を書き進めたのは、

¹ 司馬遼太郎 「ベケット」、『街道をゆく 30 愛蘭土紀行 I』、朝日新聞社、p.184

以上のような理由からであった。

四つの作品を解体しながら各章ごとにまとめを書いたが、さらにおおきくまとめおくと、『不在の書』はベケットの現実からの距離感から生まれている。それは自己とコトバであるロゴスとの距離感であり、分裂したさまざまな自己は散ッタ仲間となっているがその仲間と仲間の間の距離感でもあった。

『仲間』では、「創りだすモノ」が問題となった。ベケットは仲間を創りだすモノを創りだしている。創りだされるモノは、仲間度を高めるように創りだされる。コエが創りだされ、コエの聞キテが創りだされる。聞キテはヤミのなかに横たわり、恥骨の上にテを組んで臥禅の姿勢をとる。そのありさまは、ロゴスとしてのイエスの死を連想させ、ロゴスとしてのコトバは自己否定によって逆に仲間度を高めることになるだろうということを予測させる。

『見ちがい言いちがい』では、コトバは権威としてのロゴスから転じて、仲間のひとりとして自己を自覚しはじめる。他を限定するモノから自己を限定するモノへと転じたのである。コトバといっしょに働くメも、同じ道をたどる。コトバとメは、錯覚するという自己の働きを徹底するという仕方で自己否定に達しようとする。

『さらにまちがうために』では、コトバが無意味に徹することによって、他の仲間たちがもはやカオを押しつけられることもなく新しい陰影となってよみがえってくる。それは最小最少の色と線で空白を生かす禅画の世界に似ている。メはその新しい世界を、そのまま見つめている。もはや対象化するメではなく、その世界の場に包まれたメである。

コトバもメも、ギリギリ最小最少となって意味づけ作用を失い、自らカオをもつことも仲間にかオを与えることもなく、仲間たちといっしょに不思議なヒカリのなかを浮遊する自由な存在となっている。このような世界は、ガタリ言うく美的・宗教的な意味不在の次元> (ceux de l'a-signifiance esthétique

et religieuse)²の領域であり、西田の言う「見るものなくして見る…形なくして形を見る」³世界である。この見るものなくして見、形なくして見るモノとは、コトバでありメであり統一するモノとしての意識の無の場である。無というのはナイという意味ではなく、もはや対象化されないモノという意味である。見るというときの見るも、対象化する見るではなく、同じ場に包むということである。ココは、「有るもの」が有るがままにある場である。

このような新しいイメージの世界が、テレビという媒体のなかでもっとも表現しやすいものであることは、容易に理解できる。ここで取り上げた四つの作品に流れているものは、その間に書かれたテレビ作品や戯曲にも流れており、その後のテレビ作品のなかで結実している。

1965年の短い戯曲『行ったり来たり』(*Come and Go*)⁴では、見えないベンチにすわった3人のそれぞれわずかな色合いをもったオンナが、順に周囲の闇に消えたりもどったりしている。1975年のテレビ作品『幽霊トリオ』(*Ghost Trio*)⁵では、カオの見えないオトコが、＜灰色の陰影＞(shades of grey)のなかをうごめいている。1976年のテレビ作品『…雲のように…』(... but the clouds ...)⁶では、外を深い闇に囲まれた部屋で、見えないイスに腰掛け見えないツクエに向かっているオトコのコエが、＜溶暗と溶明＞(dissolve)のなかで響いている。1984年のテレビ作品『クワッド』(*Quad*)⁷では、四角い空間のなかを、4人の人物がそれぞれの色合いと音色をもって、四隅から現われ規

² *Cartographies Schizoanalytiques*, p.151

³ 「場所の自己限定としての意識作用」、『西田幾多郎全集』6, p.94

⁴ *The Complete Dramatic Works*, pp.351-7

⁵ *ibid.*, pp.405-14

⁶ *ibid.*, pp.415-22

⁷ *ibid.*, pp.449-616

⁸ 「正方形や立方体などの単純な形態に一定のシステムを採用して、同一単位の反復による連続体によって会場の空間全体を構成するなど、作品のスケールが大きく、きわめてモノトーンな概観を呈している。」(『日本大百科全書』22. 小学館. p.414.) モノトーンが基調であるが、鮮烈な色彩の規則的なストライプで構成されていることも多い。

則的な動きを繰り返している。この四角い空間と人物のもつ色合いは、ミニマル・アートの行き着いた点⁸と一致しているといっている。同じ年のテレビ作品『夜と夢』(*Nacht und Träume*)⁹では最小最少のヒカリのなかで、夢見るオトコと夢見られる自分のイメージが、『クワッド』と同じ溶暗溶明のなかで繰り返えられる。このように浮遊する陰影は、新しい如として定着していつている。

この論文で明らかにしようとした2点について、次のように結論を述べたい。

1. ベケットのコトバとのたたかいはどこに行き着いたか

ゆがめ圧殺し伝達の機能を拒むコトバとのたたかいは、現代を生き抜くためのロゴス中心主義とのたたかいでもあった。限定するコトバを限定しようとする試みは失敗に終わって、限定されるモノたちは不在になっていく。そのときコトバを発するコエに変化がおきる。限定し命令する対象を失って、コエは自らも不在になろうとする。表現するモノと表現されるモノという二元の境界線がはずれるのは、このときである。創りだされる仲間たちのヒトリとなったコエは、創りだすモノに用いられていく。創りだすモノは、コトバを対立するモノから内なるモノに変えていくことによって、対象としての他者から仲間として内に包みこむことによって、コトバ自らが変わっていった。他を限定するコトバから自らを限定するモノへのこの転身は、自らの無意味さを最大限に発揮するという仕方で逆に自らの働きを最小最少にし、これまで限定してきたモノを自由にするという結果になった。そこには、最少限の表現が最大限の表現となるという新しい世界が生まれている。

二元論を乗り越えることは現代の最も切実な課題であるが、このようなかたちでコトバとしてのロゴスそのものと正面からたたかった文学者が、ほかにい

⁹ *ibid.*, pp.463-6

るだろうか。＜ヌーヴォ・ロマン＞（nouveau roman）と呼ばれる新しい小説に取り組んだ小説家は多いが、コトバそのものを素材にした作品はないように思われる。ピカソの1907年の作品「アヴィニヨンの娘たち」は絵画史に革新をもたらしたが、ベケットの最初の小説がフランス文学史に同じ位置をしめるであろうか、というボワデッフェル（Pierre de Boisdeffre）の問い¹⁰は興味深い。フランス文学史ではなく、世界の文学史といったほうがいい。ベケットの1948年の『ゴドーを待ちながら』（*En attendant Godot, Waiting for Godot*）が現代演劇におおきな影響をあたえたことはすでに認められているが、ベケットの到達点からどんな発展があるのだろうか。2000年度のノーベル文学賞を受賞した中国の亡命作家高行健氏は、ベケットを愛読し、小説や不条理劇を書き、水墨風のタブローを描いている。ベケットの発展として見守りたい作家である。

2. ベケットのバラバラのイメージをどう関連づけるか

イメージは、まず直観されたものである。体験した過去のこと、夢みる未来のこと、現在という時点に現われる。直観された瞬間は、主客未分のありのままの如^{にょ}として現前するが、それがコトバで表現されるとき判断の対象となる。しかも、コトバがそれをゆがめ限定してしまう。だからベケットはコトバでイメージを表現するとすぐ、直観されたイメージとは違うものとして否定してしまう。次つぎと否定が繰り返されるため、イメージはバラバラに見える。しかし、つながりが見えてくるまでそのもどかしさに耐えながら、ひとつひとつのイメージにこだわり続けるしかない。それがテキストの引用のおおくなった理由である。

イメージを生み出す直観も、意識の働きである。主客未分の状態から判断の対象へと移っても、意識の内に包まれたモノとして生きたモノである。生みだされては否定されていくうちに、イメージはやせ衰えていく。そしてついには、

¹⁰ ボワデッフェル『小説はどこへ』（望月芳朗訳）、講談社、1969、p. 240

消えて不在となる。一方、限定するコトバは、限定する対象を失うことによって、自らの存在感をなくしてしまう。ここでコトバの転身がおこったことは、何度も触れてきたことである。コトバ自身も意識の内に包まれることによって、自らの存在感を取りもどしていく。コトバとそれと一緒に働くメは、意識の場であって、自らもやせ衰えながら他のイメージと同じ仲間となっていく。そこでは、すべてがギリギリの姿で陰影となっている。その陰影は、すべての限定するモノから自由になった、この章のはじめに引用した「素のまま」のイメージである。このようなイメージの世界は、たとえば相撲の世界である。土俵という場で、裸のイメージがひとつの動きを演じては消えていき、また新しいイメージが入れかわる。あるいは、囲碁の世界にたとえることもできる。宇宙を表わす碁盤の上に、特定の役割を押しつけられたチェスの駒と違って「無名の機能」しかもたない碁石¹¹が、領土化と脱領土化のドラマを演じて、また散っていく。

論文のタイトルを「ベケットの不在の文学」としたが、この不在は現前に対する不在ではなく、不在即現前、つまり不在が現前しているという意味である。

¹¹ *Mille Plateaux*, p. 436

引証文献

秋月龍珉 『鈴木禅学と西田哲学の接点』 『秋月龍珉著作集』（全 15 卷）第
8 卷 三一書房 1978 年

Beckett, Samuel. *Disjecta*. London: John Calder, 1983.

———. *Company*. London: John Calder, 1980.

Compagnie. Paris: Les Edition de Minuit, 1980.

[宇野邦一訳『伴侶』 書肆山田 1990 年]

———. “Film”. *The Complete Dramatic Works*. London: Faber and
Faber, 1986.

———. *L’Innomable*. Paris: Les Edition de Minuit, 1953.

The Unnamable. Translated from the original French by the
author. London: Calder & Boyards, 1975.

———. *Mal vu mal dit*. Paris: Les Edition de Minuit, 1981.

Ill Seen Ill Said. Translated from French by the author.
London: John Calder, 1981.

[宇野邦一訳『見ちがい言いちがい』 書肆山田 1991 年]

———. *Proust and Three Dialogues with George Duthuit*. London:
John Calder, 1965.

———. *Textes pour Rien. Nouvelles et Textes pour Rien*. Paris:
Les Editions de Minuit, 1958.

Texts for Nothing. Translated by the author. *The Complete
Short Prose, 1929 - 1989*. Edited by S.E. Gontarski. New York:
Grove Press, 1995.

[片山昇訳『反古草紙』 『ベケット短編集』所収 白水社 1972 年]

———. *Watt*. New York: Grove Press, 1953.

———. *Worstward Ho*. London: John Calder, 1983.

Cap au pire. Traduit de l'anglais par Edith Fournier. Paris: Les Editions de Minuit, 1991.

[近藤耕人訳『さいあくじょうどへほい』 『ユリイカ』(1996年2月号) 長島確訳『いざ最悪の方へ』 書肆山田 1999年]

Boisdeffre, Pierre de. *Où va le roman?* Paris: Editions Mondiales, 1961.

[望月芳朗訳『小説はどこへ』 講談社 1969年]

Dante. *The Divine Comedy being the Vision of Dante Alighieri*.

Translated by Henry Francis Cary. London: Oxford UP, 1910.

Deleuze, Gilles. "L'épuisé," Samuel Beckett. *Quad, Trio du Fantome, ... que nuages ..., Nacht und Träume*. Paris: Les Editions de Minuit, 1992.

[宇野邦一、高橋康也訳『消尽したもの』 白水社 1994年]

Deleuze, Gilles, et Félix Guattari. *L'Anti-Œdipe: Capitalism et schizophrénie*. Paris: Les Editions de Minuit, 1972.

[市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス — 資本主義と分裂症』 河出書房新社 1986年]

———. *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie*. Paris: Les Edition de Minuit, 1980.

[宇野邦一他訳『千のプラトー — 資本主義と分裂症』 河出書房新社 1994年]

Guattari, Félix. *Cartographies Schizoanalytiques*. Paris: Editions Galilee, 1989.

[宇波彰, 吉沢順訳『分裂分析的地図作成法』 紀伊國屋書店 1998年]

蓮實重彦 『物語批判序説』 中央公論社 1985 年

Huxley, Aldous. *The Doors of Perception and Heaven and Hell*,
London: Flamingo, 1994.

『岩波 哲学・思想辞典』 岩波書店 1998 年

Joyce, James. "Gas from a Burner". *Poems and Exiles*. Middlesex:
Penguin Books, 1992.

Katz, Daniel. *Saying I No More: Subjectivity and Consciousness in
the Prose of Samuel Beckett*. Illinois: Northwestern UP, 1999.

『キリスト教大辞典』 教文館 1963 年

Knowlson, James. *Damned to Fame: The Life of Samuel Beckett*.
London: Bloomsbury, 1996.

Lyotard, Jean-Francois. *La Condition Postmoderne: Rapport sur le
savoir*. Paris: Les Editions de Minuit, 1979.

[小林康夫訳『ポスト・モダンの条件— 知・社会・言語ゲーム』
水声社 1986 年]

『日本大百科全書』 22 小学館 1988 年

『西田幾多郎全集』(全 19 巻) 第 2, 4, 6, 9, 11 巻 岩波書店 1965 年

『讃美歌』 日本基督教団出版局 1954 年

『聖書』(口語訳) 日本聖書協会 1955 年

『聖書』(新共同訳) 日本聖書協会 1987 年

司馬遼太郎 「ベケット」 『街道をゆく 30 愛蘭土紀行 I』 朝日新聞
社 1993 年

鈴木大拙 「仏教の象徴主義」. 『鈴木大拙選集』(全 26 巻、追 5 巻) 第
26 巻 春秋社 1961 年

高橋康也監修 『ベケット大全』 白水社 1999 年

参考文献

1. 作品

- Beckett, Samuel. *Collected Poems in English and French*. London: John Calder, 1977.
- . *Comme c'est*. Paris: Les Editions de Minuit, 1961.
- How It Is*. Translated from the French by the author. New York: Grove Press, 1961.
- [片山昇訳『事の次第』 白水社 1972年]
- . *Company*. London: John Calder, 1980.
- Compagnie*. Paris: Les Editions de Minuit, 1980.
- [宇野邦一訳『伴侶』 書肆山田 1990年]
- . *Disjecta*. London: John Calder, 1983.
- . *Dream of Fair to middling Women*. Edited by Eoin O'Brien. Dublin: The Black Cat Press, 1995.
- [田尻芳樹訳『並には勝る女たちの夢』 白水社 1995年]
- . *Eleutheria*. Paris: Les Editions de Minuit, 1995.
- Eleutheria*. Translated from the French by Barbara Wright. London: Faber and Faber, 1995.
- [坂原真里訳『エレウテリア (自由)』 白水社 1996年]
- . *L'Innomable*. Paris: Les Editions de Minuit, 1953.
- The Unnamable*. Translated from the original French by the author. London: Calder & Boyards, 1975.
- . *Mal vu mal dit*. Paris: Les Editions de Minuit, 1981.
- Ill Seen Ill Said*. Translated from French by the author. London: John Calder, 1981.

- [宇野邦一訳『見ちがい言いちがい』 書肆山田 1991年]
- . *Malone meurt*. Paris: Les Editions de Munit, 1951.
- Malone Dies*. A Novel translated from the French by the author. New York: John Calder, 1958.
- [高橋康也訳『マロウンは死ぬ』 白水社 1995年]
- . *Mercier et Camier*. Paris: Les Editions de Minuit, 1970.
- Mercier et Camier*, translated from the original French by the author. London: Calder and Boyards, 1974.
- [安堂信也訳『初恋/メルシェとカミエ』 白水社 1971年]
- . *Molloy*. Paris: Les Editions de Minuit, 1951.
- Molloy*. A novel translated from the French by Patrick Bowels in collaboration with the Author. Paris: The Olympic Press, 1955.
- [安堂信也訳『モロイ』 白水社 1969年]
- . *More Pricks than Kicks*. London: Chatto and Windus, 1934.
- [川口喬一訳『蹴り損の棘もうけ』 白水社 1971年]
- . *Murphy*. London: George Routledge and Co., 1938.
- Murphy*. New York: Grove Press, 1957.
- Murphy*. Collection Les Imaginaire. Paris: Bordas, 1947.
- [三輪秀彦訳『マーフィ』 早川書房, 1970年]
- . *Proust and Three Dialogues with George Duthuit*. London: John Calder, 1965.
- . *The Complete Dramatic Works*. London: Faber and Faber, 1986.
- . *The Complete Short Prose 1929 - 1989*, Edited by S.E. Gontarski. New York: Grove Press, 1995.

———. *Watt*. Paris: The Olympic Press, 1953.

Watt, New York: Grove Press, 1959.

———. *Worstward Ho*. London: John Calder, 1983.

Cap au pire. Traduit de l'anglais par Edith Fournier. Paris: Les Editions de Minuit, 1991.

[近藤耕人訳『さいあくじょうどへほい』。『ユリイカ』(1996年2月号)。長島確訳『いざ最悪の方へ』 書肆山田 1999年]

2 ・ 伝記・評論

Andonian, Cathleen Culutta, ed. *The Critical Response to Samuel Beckett*. London: Greenwood Press, 1990.

Ben-Zvi, Linda. *Samuel Beckett*. Boston: Hall, 1986.

Brater, Enoch. *Why Beckett*. London: Thames and Hudson, 1989.

[安達まみ訳『なぜベケットか』 白水社 1990年]

Bryden, Mary. *Samuel Beckett and the Idea of God*. London: Macmillan, 1993.

———. *Women in Samuel Beckett's Prose and Drama: Her Own Other*. London: Macmillan, 1993.

[第2章、田尻芳樹訳「ベケット／ドゥルーズ／ガタリ」。『ユリイカ』1996年2月号]

Butler, Lane St John, and Robin J. Davis, ed. *Rethinking Beckett: A Collection of Critical Essays*. London: Macmillan, 1990.

Deleuze, Gilles. "L'épuisé," Samuel Beckett. *Quad, Trio du Fantome, ... que nuages ..., Nacht und Traum*. Paris: Les Editions de Minuit, 1992.

[宇野邦一、高橋康也訳『消尽したもの』 白水社 1994年]

Flecher, John. *Samuel Beckett's Art*. London: Ohatto and Windus, 1967.

Gluck, Barbara Reich. *Beckett and Joyce: Friendship and Fiction*. London: Associated UP, 1979.

Hart, Clive. *Language and Structure in Beckett's Plays* with a Beckett's Synopsis compiled by C. George Sandulescu. Gerrards Cross: Colin Smythe, 1986.

Harvey, Lawrence E. *Samuel Beckett: Poet and Critic*. Princeton: Princeton UP, 1970.

Katz, Daniel. *Saying I No More: Subjectivity and Consciousness in the Prose of Samuel Beckett*. Illinois: Northwestern UP, 1999.

川口喬一 『ベケット— 豊穡なる禁欲 』 <英米文学作家論叢書 25> 冬樹社 1978 年

Knowlson, James. *Damned to Fame: The Life of Samuel Beckett*, London: Bloomsbury, 1996.

Pilling, John, ed, *The Cambridge Companion to Beckett*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.

高橋康也 『サミュエル・ベケット』 (今日のイギリス・アメリカ文学 3) 研究社 1971 年

高橋康也監修 『ベケット大全』 白水社 1999 年

3. その他

秋月龍珉 『鈴木禅学と西田哲学の接点』。『秋月龍珉著作集』 (全 15 巻) 第 8 巻 三一書房 1978 年

Boisdeffre, Pierre de. *Où va le roman?* Paris: Editions mondiales, 1961.

〔望月芳朗訳『小説はどこへ』講談社 1969年〕

別役実 『ベケットと「いじめ」 — ドラマツルギーの現在』 岩波書店
1987年

Dante. *The Divine Comedy being the Vision of Dante Alighieri.*

Translated by Henry Francis Cary. London: Oxford University
Press, 1910.

Deleuze, Gilles, et Félix Guattari. *L'Anti-Œdipe: Capitalism et
schizophrénie*. Paris: Les Editions de Minuit, 1972.

〔市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス — 資本主義と分裂症』 河出
書房新社 1986年〕

———. *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie*. Paris: Les
Edition de Minuit, 1980.

〔宇野邦一他訳『千のプラトー — 資本主義と分裂症』 河出書房新
社 1994年〕

フーコー, M. 『言葉と物 — 人文科学の考古学』 佐々木明、渡辺一
民訳 新潮社 1974年

Fowlie, Wallace. "Dante and Beckett". *Dante among the Moderns*.

Edited by Stuart Y. McDouga. Chapel Hill: The University
of North Carolina Press, 1985

『現代思想』 — 「精神分裂病：文明のなかの人間存在」（1975年9月臨時
増刊号）

— 「ドゥルーズ」（1982年12月号）

— 「ドゥルーズ = ガタリ」（1984年9月臨時増刊号）

ジャコメッティ, A. 『私の現実』 矢内原伊作、宇佐美栄治訳 みす
ず書房 1976年

Guattari, Félix. *Cartographies Schizoanalytiques*. Paris: Editions

Galilee, 1989.

[宇波彰, 吉沢順訳『分裂分析的地図作成法』 紀伊國屋書店 1998
年]

Huxley, Aldous. *The Doors of Perception and Heaven and Hell*.
London: Fleming, 1994

Joyce, James. "Gas from a Burner". *Poems and Exiles*. Middlesex:
Penguin Books, 1992.

蓮實重彦 『物語批判序説』 中央公論 1985 年

『岩波 哲学・思想辞典』 岩波書店 1998 年

『キリスト教大辞典』 教文館 1963 年

Lyotard, Jean-Francois. *La Condition Postmoderne: Rapport sur le
savoir*. Paris: Les Editions de Minuit, 1979.

[小林康夫訳『ポスト・モダンの 条件— 知・社会・言語ゲーム』
水声社 1986 年]

『日本大百科事典』 小学館 1988 年

『西田幾多郎全集』(全 19 卷) 岩波書店 1965 年

Robbe-Grillet, Allain. *Pour un nouveau roman*. Paris: Les Editions
de Minuit, 1963.

[平岡篤頼訳『新しい小説のために』 新潮社 1967 年]

『讃美歌』 日本基督教団出版局 1954 年

『聖書』(口語訳) 日本聖書協会 1955 年

『聖書』(新共同訳) 日本聖書協会 1987 年

司馬遼太郎 「ベケット」 『街道をゆく 30 愛蘭土紀行 I』 朝日新聞社
1988 年

鈴木大拙 . 「仏教の象徴主義」. 『鈴木大拙選集』(全 26 巻、追 5 巻) 第
26 巻 春秋社 1961 年

立花隆 『脳を鍛える』 新潮社 2000 年

『ユリイカ』 — 「サミュエル・ベケット」 (1970 年 5 月号)

索引

[ア行]

アイルランド (Irlande, Ireland) 48, 49, 79, 176

悪霊 1, 4, 175

アシ (pieds, feet) 13, 82, 144, 159, 178, 180

アタマ、頭 (tête, head) 13, 21, 27, 42, 43, 48-9, 79, 82-3, 98, 131,
147, 159, 171, 183-8, 202-5

新しいノー (un nouveau non, a new no) 107-9, 156

古いノー (les vieux non, the old noes) 107-8, 156

跡 (trace) 6, 110, 127, 130-1, 160, 193, 198

アナ、穴 (l'excavation, the hole) 16, 20, 86, 91, 94

アナ男 95

アナ群 95

アベル (Abel) 19, 36-7, 40, 42, 48, 87

イエス (Jésus, Jesus) 1, 4, 58, 148, 155, 157-9, 161, 175, 180-2, 206

イエス・キリスト (Jésus-Christ, Jesus Christ) 181

意識の世界 (Universe conscienties) (U) 6, 11, 13, 20-1, 28, 89, 105,
108, 129

意味 (meaning) 74, 79, 122

意味作用のない、意味がない (a-signifiante) 5, 70, 91

意味する 19, 91

意味されるもの (le signifié) 50

意味するもの (le signifiant) 50-

意味づけ 5, 50, 56

イメージ (image) 29, 42-4, 47, 51, 59-60, 70, 77, 80, 83, 86, 98,

100, 124, 130, 148, 175, 179, 197-8, 200-201, 203, 207
陰影 (shades) 200, 203-8, 212
エコー 70, 131
オオカミ男 (l'Homme aux loups) 93-5
オオキナカオ 33, 36, 59, 109, 138
思い出 (memoire, memory) 14-5, 22-4, 31-2, 53, 55, 56, 71, 110-2,
114, 130, 135, 138, 142
思い出す 21, 178
記憶 4, 6, 14, 21-4, 33, 71, 197
記憶する 117

[カ行]

カイン (Cain) 36-7, 40, 42, 47-8, 86-7, 123
カオ (visage, face) 11, 50, 52, 68, 139, 163, 166, 193, 203
カオス (chaos) 90, 108
カオス界 (chaosmos) 90, 105, 108, 131, 201
カオス相互浸透 (chaosmose) 105-6
カオスのスープ (la soupe chaotique) 14
カガミ、鏡 54 62
隠れ家 (refuge) 11, 52
影 (ombre, shadow, figment) 98, 176, 183
仮説 (hypothesis) 35, 115, 117-8, 121-2
仮説の (hypothetical) 117
ガタリ、フェリックス (Guattari, Félix) 4, 6, 8, 11-3, 17, 24, 33, 50, 64,
72, 86, 105, 118, 134
語リテ 162, 168-9

カッツ、ダニエル (Katz, Daniel) 34, 40, 42, 115-7
 可能的潜在的領域 16
 カミ、神 (l'Eternel, the eternal) 4, 30, 37, 39-40, 48
 神の子 57, 148
 (神の) ひとり息子 175, 181
 神の裁き 122
 神の霊 57
 カラダ (le corps, the body) 11-2, 82-3, 100-1, 111, 113-6, 121-2, 171
 空ッポ 111, 117
 空ッポにする (épuiser, exhaust) 77-9, 197
 涸らす (tarir, drain) 79
 使いきる (user, wear out) 79
Cartographes Schizoanalytiques 6, 8, 11, 18, 21, 26, 28, 89-91, 106
 感覚的領域 16
 間接言説 (discours indirect) 38
 直接言説 (discours direct) 38
 機械 (la machine) 64-5, 67, 70-1, 88, 98, 118
 機械群 6, 15
 オシャベリ機械 (une machine à parler) 70, 98
 エネルギー機械 (une machine-energie) 64
 回転機械 123
 回想機械、記憶機械 (une machine-memoire) 21, 70-1, 79
 器官機械 (une machine-organe) 64, 97
 具象機械 15
 肛門機械 (une machine anale) 98
 呼吸機械 (une machine à respirer) 98

資本主義機械 (la machine capitaliste) 67
 生産 (スル) 機械 (des machines productrices) 65, 83
 食ベル機械 (une machine à manger) 98
 分裂症ノ機械 (les machines schizophrènes) 65
 抽象機械 15-6
 遊牧機械 14
 欲望 (スル) 機械 (des machines désirantes) 65, 83, 88, 98
 機械群の部門 (Phylum machiniques) (ϕ) 6, 13, 15, 21, 28, 90, 105,
 100
 器官 (organe, organ) 11, 110, 122-3, 147
 器官ノナイカラダ (le corps sans organes) 12, 66, 83, 93-4, 96, 120-2
 聞キ手、聞き手 (l'entendeur, listener, hearer) 41, 141, 144, 147-52,
 158, 160, 162
 聞き伝え (ouï-dire) 39-40, 44, 56
 聞きちがえる 56
 喜劇 (comédie) 85
 記号、符号 (signe) 50, 69, 119, 121
 記号体系 (un système sémiotique) 119
 共存平面 (plan de consistance) 5, 89, 131, 154
 強度 (intensité) 90, 94-5, 103, 105-6, 130, 201
 強度の旅 (un voyage en intensité) 89-90
 キリスト (Sauveur, Christ) 47, 156-7, 181
 キリスト教 175-6
 『キリスト教大辞典』 181
 亀裂 89
 亀裂片 89

空^{くう} 19, 36, 200-201, 203-4
 空なる存在 19
 空ナルモノ 100
 空白 135, 197-8
 虚空 (le vide, emptiness) 131, 171
 組み合わせ 76-7, 197
 組ミ込ミ (agencement) 5-6, 98, 119-21, 179
 決定可能性 (déterminabilité) 26, 90, 201
 言語 (le langage) 38, 75-7, 118, 197
 言語活動 (pragmatique) 28
 語用論的体系 (un système pragmatique) 119
 言説 (discurs) 13-4, 61-2, 64
 言説性 (discursivité) 13, 21, 125
 言説の領域 14
 非言説の領域 14
 幻想、空想のモノ (chimère, figment, imagining) 38, 151, 183
 幻影 160
 行程 (un parcours) 3
 コエ (voix, voice) 7-9, 11, 33-4, 36, 38-40, 48, 77-9, 108, 124-9,
 131, 135, 137-8, 141-2, 146-7, 152, 155, 157, 159-60, 162
 自己準拠のコエ (les voix de l'autoreference) 8, 78, 126
 ココロ、心臓 (le cœur, the heart) 53, 98, 110, 131
 個体化、個別化 24-5
 コトバ、言葉 (mot, word) 3, 7, 17-8, 25-9, 33, 50, 52, 56-63, 70, 73-8,
 84, 91, 98, 101, 111, 139, 162, 187, 189-90, 195-203, 205-12
 コトバ、^{ことば}言、ロゴス (Logos) 181, 183, 193, 206

固有名詞 (le nom propre) 95

コレ性 (heccéité) 25, 35, 37, 53, 79, 110, 130

[サ行]

さすらい (l'errance) 14

裁き (justice) 43

審理 43-6

『さらにまちがうために』 (*Worstward Ho*) 162, 195, 198, 205-6

『讃美歌』 180

死 (mort, death) 100-1, 155, 159, 175, 180-1

自然死 (belle mort, natural death) 16

死ぬ (mourir, die) 113-5

死んだモノ 15, 19

自意識 (la conscience de soi) 38

地獄 (des Enfers, the Hell) 47, 56, 96

自己消去の撞着文体 (the self-cancelling oxymoronic style) 75

視線 (un œil, un eye → 複数は「メ」としている。「メ」の項を参照。)

11, 29-30, 163-6, 168, 171-2, 174-5

視覚 (la vue, sight) 153

実在 52-3

実存 28, 52

実存の領土 (Territoires existentiels) (T) 6, 11, 13-4, 21, 28, 89

実体 (substance) 6, 14, 25, 118, 120, 124

実体群 6

自動生産 (auto-production) 12

自転車 (bicyclette, bicycle) 123

資本主義 (le capitalisme) 64-8
 宗教会議、宗教裁判 (le council, the council) 46
 十字架 (la croix, the cross) 52, 155, 158, 175-6, 179, 181-2
 受刑者 (le supplicié) 50
 受信者 (receiver) 41-2
 主体 (sujet, subject) 25, 41, 64, 72, 93, 116, 118-20, 122-4
 主体群 (group-sujet) 6, 19, 118, 120
 主体性 (subjectivity) 8, 25, 116
 樹木状 4-5, 63
 準拠 (référence) 26, 89
 自己準拠 (auto-référence) 8, 36, 63
 アイツ準拠 36
 外部準拠 (exo-référence) 47
 ジョイス、ジェイムズ (Joyce, James) 40-2, 48-9, 51, 61, 123
 条件法、仮定法 35, 183
 条件文 (the conditional) 35
 少数派 (la minorité) 33
 多数派 (la majorité) 33
 冗長性 (redonances) 14
 指令語 (un mot d'ordre) 38
 神学 (la théologie, theology) 46
 『神曲』 (*The Divine Comedy*) 47, 55
 頭蓋骨、されこうべ (le crane, the skull) 182-3, 204, 205
 されこうべの場所、ゴルゴタ (le lieudit du crâne, the place of the skull) 182-3
 捨てる、捨て去る (abandonner, give up) 98-9, 102

(bazarder, scrap) 187

スプレー (un aérosol) 89, 201

聖金曜日 (Good Friday, a good Friday) 155-8

Saying I No More 40-2, 115-8

『聖書』

『旧約聖書』、『創世記』 4, 19, 48, 86 『伝道の書』 19

『イザヤ書』 180

『新約聖書』、『マタイによる福音書』 1, 157-8, 175, 178, 182

『マルコによる福音書』 1, 157-8, 175, 182

『ルカによる福音書』 1, 157-8, 175

『ヨハネによる福音書』 157-8, 175, 181-2

生成 (le devenir) 33, 94-5

ナル 105

接合、接合状態、接合部 (synapse) 13, 70, 98, 105

接合する 105

切断 (rupture) 5, 28, 67, 89, 105

切断する 71, 79, 85, 100

切断線 (ligne de rupture) 5

ゼロ (zero) 94, 191, 198-201

ゼロ度 18

潜在性 (virtualite) 21, 28

線条化 (striage) 14-6, 20, 86

『千の高原』 (*Mille Plateaux*) 1, 4, 25, 38-9, 50, 72, 86, 100, 118

禅の悟り (Satori Zen) 106

層 (strate) 121-3

層化される (etre strifie) 5, 122

地層化 58

想像力 149-50

[タ行]

胎 (womb) 86, 135

胎道 87

他者 63, 210

脱出する 84

脱出線 (ligne de fuite) 5, 86, 95, 100

脱主体化 (désubjectivation) 118, 122

脱層化 (destratifiée) 122

脱体系化 (décodage) 66

脱領土 5

脱領土化 (deterritoriasation) 5, 66, 4-56, 120-2

脱領土化線 (ligne de deterritoriasation) 94

タマシイ (âme, soul) 46, 99-101, 111, 115

タマシイの風景 (soul-landscape) 198

Damned to Fame 33, 132, 134, 155

多様性 (variété, multiplicité, variety) 4-5, 49, 92-5, 207

多様化 95

多様体 6, 94-5

地図 6, 14

チチ (mon père, my father) 13-4, 55, 136

散ッタモノ (タチ) 4, 6, 19, 191, 206

散ッタワタシタチ 3, 205

散ラバリ、散らばり 11, 20, 130, 205

散ル 205
 直観 25, 54-7, 84, 105, 110, 211
 沈黙 (silence) 128-31
 追放者, 追放サレタモノ ((exile) 48, 118
 罪デアル (être coupable, be guilty) 43, 46
 d+ 26, 28, 89-90, 105, 180 d- 26, 28, 89-90, 94, 105, 180
 d± 89-90, 94, 105, 201
 出口 (une issue, a way out) 83-4, 91
 典型的ニンゲン像、伝統的ニンゲン (X) 68-9, 82-3
 天国、天の国 (paradis, paradise) 27, 172, 178
 天上 178
 凍結 60, 73-4, 78
 凍結作用 56
 凍結する 60, 73
 ドゥルーズ、ジル (Deleuze, Gilles) 4, 12, 24, 33, 50, 64, 72, 75, 78,
 86, 118, 134, 197-8, 200
 トキ、時 50, 56, 77, 100, 105, 114, 121, 165, 197, 202
 アイオン (Aïon) 105, 121 = 永遠のトキ 105, 121
 クロノス (Chronos) 105
 独房 (secret, dungeon) 113
 象牙の地下牢 (oubliette d'ivoire, ivory dungeon) 21, 30
 ドルイド教 (druism) 176

 [ナ行]
 内容 (contenu) 111, 119-21
 仲間 (compagnie, company) 9, 18, 33, 38-44, 78-80, 93, 138, 142-7,

149-52, 154, 158, 160, 162-3, 170, 173, 178-9, 181, 183, 202-3,
206, 208, 210

『仲間』 136, 138, 162-3, 208

仲間度 (la teneur en compagnie) 136, 142, 145-7, 152, 157-8, 205

流れの構造 (Économie des Flux) (F) 6, 13-5, 28, 89, 110

『名づけきれないもの』 7, 77

名づけきれないモノ 49, 58, 103

ナミダ (mes larmes, my tears) 73-4, 78

ニオイ (l'odorat, smell) 153-4

臭う (sentir, smell) 154

悪臭 154

嗅覚 153

西田幾多郎 4, 25, 53, 105, 123, 160-1, 194, 205, 207

如 (as-it-is-ness) 53, 55, 79, 130, 197, 211

[ハ行]

場 (所) 4, 20, 110, 123, 135, 194, 209

ハカ (ma tombe, my tomb) 86, 88, 95, 117, 171, 175-6, 179

墓場、墓地 (le cimetiere, the graveyard) 1, 16, 85

罰 48

発信者 (sender) 41

発話 (parole) 75

発話行為 (énonciation) 28, 89, 104, 120, 125

発話者 (les énonciateurs) 21

発語障害 (la strangurie, strangury) 190

発話の位置 (enunciatory positions) 41

ハナ、花 (fleur, flower) 53, 167, 180
 クロッカス、サフラン、野ばら (crocus) 167-8, 179-80
 花輪 (la couronne, the wreath) 179
 ハナシ、オハナシ 31-2, 39-40, 60-1, 67, 197
 作り話 (fable) 139-40
 ハハ (ma mère, my mother) 14, 54, 85-6, 134-5
 『反オイディプス』 (*L'Anti-Œdipe*) 12, 64, 71-2, 88, 98
 ヒカリ、アカリ (lumière, light) 22, 164, 173, 187, 189-90, 201
 (luminaires, lights) 20
 (illumination) 192
 (repandue, glimmer) 159, 160
 非在 (inexistence) 19, 108, 127, 191
 非人称化 (dépersonnalisation) 95
 否定語 75, 126
 ヒツジ (ovin, ovine) 167-8
 子ヒツジ (suivit, lamb) 167, 170-1
 表現 (expression) 28, 111, 119-20, 123, 170
 表現装置 (les dispositifs d'Expression) 28, 54
 非中心化 5
 復活 178, 180
 復活祭 (Easter) 155-6
 不在 (absence) 4, 19, 83, 102, 108-9, 127, 133, 160, 169, 173, 179,
 187, 191-3, 212
 不在感 130
 不在者 19, 37, 40
 『不在の書』 7, 19, 35, 40, 79, 129, 136, 138, 141-2, 178, 181,

200-1, 208
 不定詞 (infinitif) 95-6
 フロイト 11, 93, 134
 フローベル 2, 61, 207
 浮遊状態 (l'état de suspension) 89
 浮遊する 208
 文法 (上、的) 36, 118
 分裂者 (schizophrène) 65, 67, 90, 133
 分裂症 4, 38, 64-5
 分裂病棟 (manicome, madhouse) 183
 平滑化 (lissage) 14, 16, 26, 89-90, 105
 ベケット、サミュエル (Beckett, Samuel) 2, 7, 35, 40, 42, 49, 51,
 61, 72, 75-7, 80, 124, 132-3, 135, 155, 160, 162, 191, 195, 197,
 207-8, 210-2
 法廷 43, 47
 ボール (balle, ball) 80, 82, 129
 ポストモダン 1, 2, 207
 ポスト・ジョイス 40
 ポスト・ベケット 40

 [マ行]
 マイナス1の平方根 (la racine carrée moins un, the square root of
 minus one) 109
 『見ちがい言いいちがい』 162-3, 181, 194, 201, 208
 無 (rien, nothing) 35, 37, 125, 127, 199-200, 209
 無意識 5, 11, 95

無意味 (さ) (inanity) 199, 202, 210

群れ 4, 11, 79, 93-5, 100, 110, 118

メ、目 (yeux, eyes) 10-1, 40, 43, 48, 59, 73, 158, 160, 164-6,
172, 177, 185-8, 193-4, 198, 204-6

メタ言語 77

メタ物語 1

モデル 4, 33, 37, 68, 138

モノガタリ、物語 (récit) 1-2, 39, 61, 63

[ヤ行]

闇 (le noir, the dark, darkness) 137-8, 140, 146, 148, 151, 157, 160,
164

有機体 (organisme) 12, 122

遊牧民 86

遊牧地 (le sol nomade) 86

ユウレイ (fantômes, phantoms) 44-5, 47, 49-50, 72, 93

ユウレイのような (spectrale, ghostly) 159

行方不明、ゆくえ不明 (manquant, missing) 68, 109, 118

豊かな瞬間 106

夢 (rêve, dream) 112, 115, 128-9

夢見る 111-2, 210

[ラ行]

リゾーム、根茎 (rhizome) 4-6, 12, 207

リゾーム状 64, 75

リトルネロ (ritournelle) 84, 91, 95

リビドー (Libido) 98

領土 (terre) 86, 121-2

領土化、定住化 5, 58, 70, 95, 121-2

領土性 (territirialite) 121

領土的風景 (paysages territoriaux) 84

リンボー (limbo) 47

流浪 (vagavondage, exil, exile) 48, 86, 100, 115

レギオン (legion) 1

煉獄 (Purgatoire, Purgatory) 56

老女 163, 165-6, 168-75, 177-81, 186-7, 189, 201-2

[ワ行]

Watt 35, 73, 197